女子文壇

第八年第八號

八月一日

明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十
明治四十五年七月廿五日印刷納本（五日印刷納本）



（通卷第百十七號）

東京 女子文壇社發兌

腦病神經病患者は救はれたり

●賣捌は全國各藥店にあり若し無き時は直接本舖へ御注文を乞ふ

主効

腦病　腦膜炎　腦貧血　便秘　耳鳴　搐搦　卒中

腦充血　神經痛　眩暈　中風　健忘　頭痛　逆上

尚健腦丸を常に少量づゝ持藥とせば逆上を引下げ、便通を必能くし、恐るべき腦充血を良治し中風卒中を未發に防ぎ記憶力を増進する特効あり

藥價（三日分廿錢　一週分四十五錢　二週分八十五錢　五週分二圓）

本舖　大阪市心齋橋筋二丁目　東京日本橋區箔屋町　丹平商會藥房

島村博士證明　健腦丸　TRADE MARK　KENNOGWAN

島村醫學博士は健腦丸の有効を證明せられたり



文の活力は最も新しき形に在り

逍遙坪内文學博士序
大町桂月先生校閱
山下寂水先生編著

作法作例 新しき叙事文

讀者をして一擧手一投足の勞なく坐ながら數十の大家に師事して親しく作文の指導を受くるの感あらしむ是れ本書の特色なり

全壹册
四六洋裝
三百餘頁
定價五拾錢
送料六錢

作法作例 新しき抒情文

好評再版
四六洋裝
定價五拾錢
送料六錢

作法作例 新しき書翰文

近刊
定價體裁
送料同上

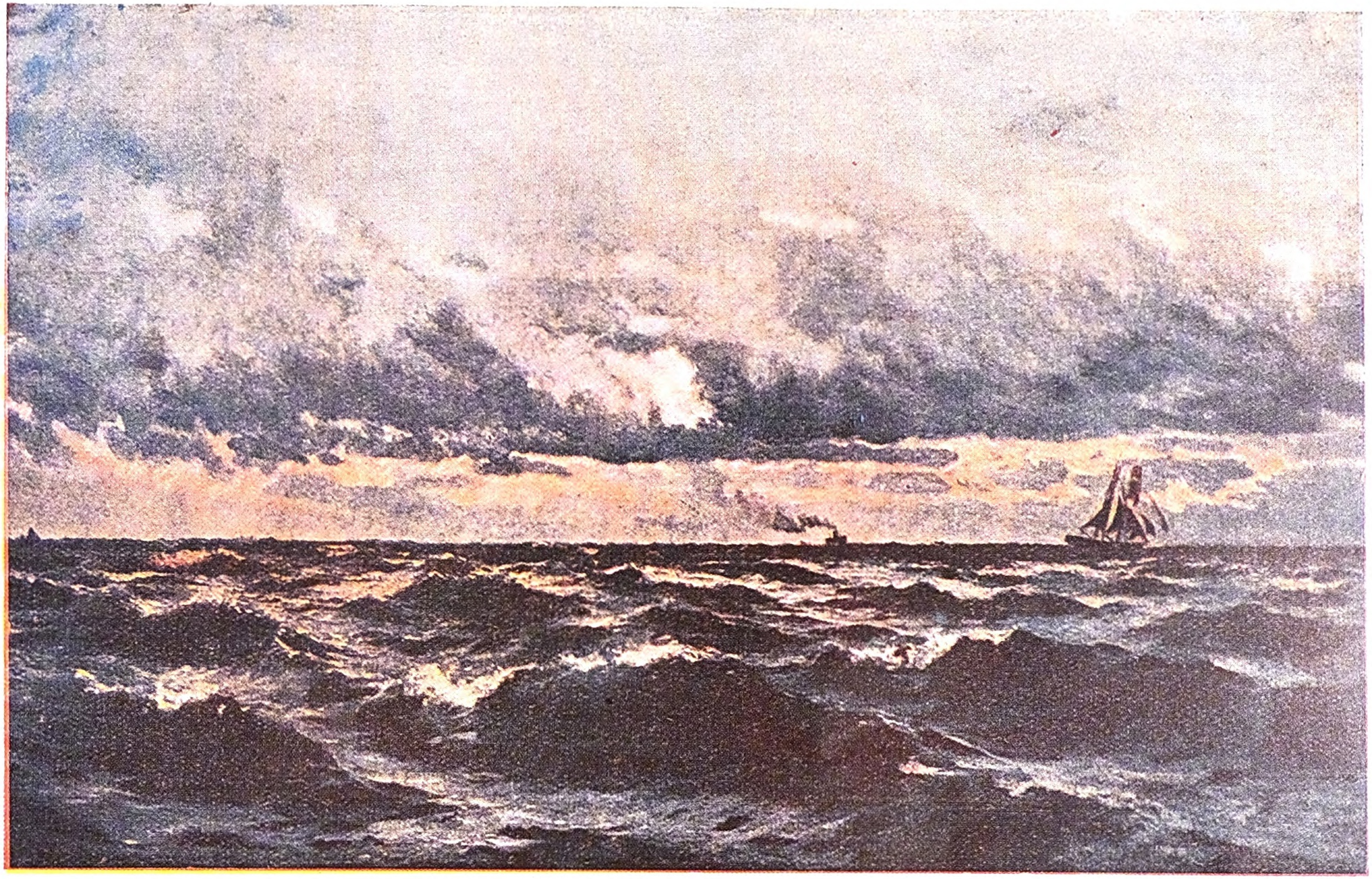
發兌元
東京市神田區小川町一番地
（電話本局三〇六四番）
（振替口座東京三一四二六番）
尚文館

女子文壇八月號（第八年第八號）目次

口繪


アイボリー
品良く價安き
無比絶品なり
近來類似品多
し御注意あれ
石鹼!
IVORY

海　と　空



以下九種の書は百年後でも三重縣桑名矢田磧弘報舘で販賣す

萬物 製法秘術寶典

代價郵稅共廿二錢 郵便切手又は振替貯金なれば廿四錢

目錄、輕便電氣燈●輕便晴雨計●輕便電話機●煙火●癇癪玉●齒磨●石鹸●洗粉●白粉●香水●紙石盤●のみ取粉●萬年草紙●メッキ法●朱肉●空氣銃●萬年手帳●墨●朱墨●鼠取藥●無刀彫刻術●酢●豆腐●甘露水●果實酒●屠蘇酒●燒酎●葡萄酒●魚煎餅●鑵詰●ラムネ●リモナーデー●ジンジャエール●蜜柑水●甘酒●味噌●醬油●水彩繪具等の製法其外大發明器械いらず**早取寫眞術**（器械不用）**早印刷法**等百餘種記載してあるが皆あり合せの道具で出來る樣にしてある、殊に早取寫眞術は名の如く器械を用ひず僅かの藥品を以て器械にても大小の差別なく何枚にても異ならぬやうに人物風景其他如何なる者にても寫せし者と少しも鮮明に寫し得る愉快なる寫眞法である、藥品の無き地方は弊店より送る、又器械にて寫せし通りに寫らねば何時にても**返金**す、又早印刷法は道具を使はず繪でも文字でも大小の論なく速座に數百枚印刷する事が出來るから名刺ハガキ書籍廣告其他如何なる者にても安價で奇麗に印刷する事が出來る、一つ覺えても慥に五十錢以上の價値がある。

奇々妙々 手品種あかし

郵稅共廿二錢郵券代用又は振替は廿四錢

本書を讀んで酒席又は多人數集會の折り手品をして見せたならば拍手大喝采疑ひなし、目錄鬼火の妖術●口中より火焰を吐く術●不思議な水の魔術●月世界の術●針を吞む法●皿廻しの術●かるた逆立術●銀貨をふやす術●水上に文字を書く術●三尺の棒を丸吞みにする法●豆腐の上にて獨樂を廻す術●箱に水を入れる術●火を喰ふ大奇術●熱湯中に手を入れる術●空の帽子より色々物品を出す法●水上に木製船を自由に動かす術●黑いんきを金魚にする法●紙製の蝶を自然に飛ばす術●黑水を清水にする法●水を燃す法●清水を牛乳にする法●銅貨を水に溶す術●ステッキを帽子の中に隱す術●水中又は机上にて鷄卵を踊らせる法 附錄 **驚神的大魔術** 其他尙面白き手品が澤山記載してあるが皆子供にも出來るやうにしてある。

學理應用 世界奇術大全

一週間に思ふ儘に白色となる法●人間百歲迄生きる法●人の生死を前知する法●必ず子を姙む法●必ず子供の出來ぬ法●胎內の兒の男女を知る法●他人の年齡を當る法●顏を櫻色にする法●日に燒けぬ法●髮の毛を多くする法●毛を生す法●書き損ひの字を拔く法●物覺惡き人を忘れさせぬ法●習字速成法●**催眠術**●歌がるた八々に必ずまけぬ法●百日百夜眠らずとも氣の衰へぬ法●老人でも白髮とならぬ法●其外斯の如き奇法を百餘種集めたる書物は廿三錢（郵券代用は廿五錢）

破天荒の快書 破格の大安賣 最新大奇術

郵稅共二十三錢郵便切手は二十五錢

目錄天に文字を顯す術●白晝を闇黑にする術●夢に天國に遊ぶ術●百鬼夜行術●風を吹す術●吹き居る風を止る術●妖光幻術●水の流を止める術●天空に怪人の姿を顯す術●人を空中に眠す術●十字架殺人術●忍術●仙術●**切支丹バテレン**の妖術●モルモット術●金錢自由吸集の妖術●縄拔の妖術●火渡の奇術●武道竹折術 **隱身術** 人の力を取り我身を重くし上げられぬ術●七八歲の小兒を重くして上げられぬ術●棒を掌につけ押しても取れぬ術●片手にて數人の力を防ぐ法●讀心術●三人にて持ち居る椅子を指二本にて取る術●不動金縛の妖術●二本の指にて大人を自由に揚げる奇術●數人にて一人を倒せぬ術其他奇術妖術山の如しそして何人も實行し得る獨習書なれば早く求めて朋人を**驚**かすも亦愉快ならん、奇術師天一も跣足で逃げ出す術ばかり。

禮法 及 婚姻法

日本の禮法は最大洩らさず婚姻部には媒酌●見合●結納の受渡●婚姻の前支度●嫁の荷物を送る事●三三九度盃の仕方●嫁と舅姑と親子盃の仕方●寢室に入る時の心得●フトンの敷方●其他婚姻に關する事柄は最大洩らさず附錄には婚姻出產死亡留其他澤山。郵稅共廿三錢

男女 無上の快樂

本書の內容は秘密に付掲載する事は出來ないから本書を讀んで初めて愉快なる事が出來る者と思へばよい。（他人に見えぬやう密封にて送ります）定價郵稅共二十四錢

一讀千笑 滑稽頓智笑話

面白くてアゴのはづれぬ用心して讀み給へ本書を讀んで居れば退屈する時がない郵稅共廿二錢

道具不要輕便 食パン和洋菓子製造書

有り合せの道具で米より費用少くて美味で一度に廿日分も拵へて置ける食パンや洋菓子が手輕に製造出來る樣にしてある書物は郵稅共廿四錢

簡易 素人治療法

●感冒●胃病●痔●淋病●子宮病●眼病●寢小便●男女陰部諸病●頭痛●腳氣●肺病●ニキビ●ワキガ●サメハダ●耳ダレ●齒痛等の療法●毛を生す法●白髮を黑くする法●其他萬病を高價な藥でなく手輕に治療し得る書は廿二錢郵券代用は廿四錢

◉振替 東京一六九二八番 大阪一四五一七番 三重縣桑名矢田磧 **弘報館**

◉割引上段下段ヨリドリ五冊一圓、十冊一圓七十錢、郵券代用一割增

婦人

八月

八月一日發行

綠蔭臥榻の好侶伴

鏑木清方畫伯筆二頁大三色版

◉河添やなぎ……

◉綠蔭濃かなる御庭に於ける賀陽宮二女王殿下

◉竹田宮妃昌子內親王殿下と恒德王殿下

◉洋裝の松平夫人信子の方と鍋島尚子孃

◉驢馬に鞭つ西鄕侯爵の令息令孃

◉大木伯爵夫人と能書の阿部夫人

◉女學生のボートと水練に巧なる島の女

畫報 ☞

◉美容體育術

下田歌子女史と浦和婦人會

名譽の御前揮毫少年少女

◉マルベボードマン

珍らしき八丈島の嫁入……

洋裝の江木榮子夫人

◉女學生の米賣

渡歐の三看護婦……

彬子爵と令孫……

◉跡見女史叙勳

岡部子爵令孃と溝口夫人

露西亞女學生の觀光……

◉時代の髮形

島津公令孃と大谷伯盆栽

三井令孃の小とりかひ……

◉女流馬術家

鰹ぶしの製法◉タすゞみ

花の如き名家の令孃……

東京市麴町區飯田町四ノ四
振替口座東京一八一八

東京

畫報

の　卷

定價二十五錢　郵税二錢五厘

六冊一圓五十三錢　十二冊二圓九十四錢

☞ 讀物

▼母親たるべき者の見識……三宅博士

▼歷史の裏面に働く婦人の力……黑板博士

▼誤られたる兩親の愛……中島德藏

▼暑中を斯くの如く過さしめよ……三輪田元道

▼常夏の花

夏の草花……三宅花圃

佃島より……長谷川時雨

夕ぐれ……岡田八千代

小動物……野上彌生子

片瀨の人に……、尾島菊子

▼手紙に現れたる婦人の面影……山の檸

▼小野寺十內より妻に……桑田春風

▼流行の心理……久保良英

▼博識な近衞公母堂……ゆかり

▼疳癪持の子供……岸邊福雄

▼夏の趣味……黑田學士

▼小說 或婦人に與る手紙……島崎藤村

▼夏の育兒……加藤博士

▼八月を樂しく暮しませう……嘉悅孝子

▼男まさりの女……しゆん

▼美容體育術……藤波芙蓉

▼古今女歌人……佐々木博士

▼眞夏の姿……をんな

▼今月のお惣菜……吉村里子

家庭必備の淸涼劑

社　電話番町二千三百三十九番

各地到る處の書店に在り

静に寄する胸の波



（本欄記事參照）

洋裝の江木博士夫人

明光





伯爵前田利同氏令孃鞍子（學習院女學部卒業）





東伏見宮妃殿下御用掛宮岡慶子

鈴木博士發見の本品は結核、腺病特に神經衰弱症の最良强壯劑として現時治療界を風靡する有機性燐劑なり

ユーキリン説明書郵呈

ユーキリン

東京市日本橋室町三丁目

三共合資會社

スピーゲル博士發見の本劑が生殖器神經に作用して陰痿を治するの効力顯著なるは内外諸大家の報告之を證明す

ヨヒンビン説明書郵呈

ヨヒンビン錠

東京市日本橋室町三丁目

三共合資會社

醫科大學教授醫學博士高橋順太郎氏創製の本品は殆ど無臭且吸收し易き形態に精製したる眞に理想的肝油なり

改良肝油説明書郵呈

高橋氏改良肝油

東京市日本橋室町三丁目

三共合資會社

賜天覽

典侍 從三位 柳原愛子君序

掌侍 正五位 小池道子君題歌

故御歌所長 男爵 高崎正風翁述 遠山稻子編

歌ものがたり

齋藤松洲畫伯裝幀 菊判總クロース 金文字函入美本

定價金壹圓

送料（市內四錢 地方八錢 滿鮮臺樺十二錢）

本書は故樞密顧問官兼御歌所長男爵高崎正風翁が、和歌に關する種々の趣味深き物語を輯めたり。翁は御歌所長として、天皇陛下の御親任深く、特に御製の拜見を仰付けられしこと多年、陛下の御製に就て殊に臣民の仰ぎ奉るべき御物語を初め、御製拜見の動機、和歌の精神、詠歌の心得草、翁の交友、翁が歌人としての閲歷等、面目躍如として恰も翁が溫顏に接するの想あり。而も本書は翁が生前に出版せられんとして、門人遠山稻子女史に講述、筆記せしめられ、一々翁が校訂せられしものなれば、翁の遺稿と稱す可きもの、翁が深き含蓄と閲歷とは本書を俟つて初めて世に公にせられたりと謂ふ可し。行文平易、趣味横溢、卷を掩ふに暇あらざらしむ。敢て紳士淑女の座右に薦む。

發行所

東京市麴町區飯田町四丁目四番地

電話番町 二三三九 振替東京 一一八一八

東京社

各地書店に在り

第十二卷第十一號……菊判紙數二百八頁 口繪石版寫眞版挿畫 正價廿錢 郵稅二錢

八月一日發行

女學世界

((銷夏號))



東京本町 博文館

萬年雪

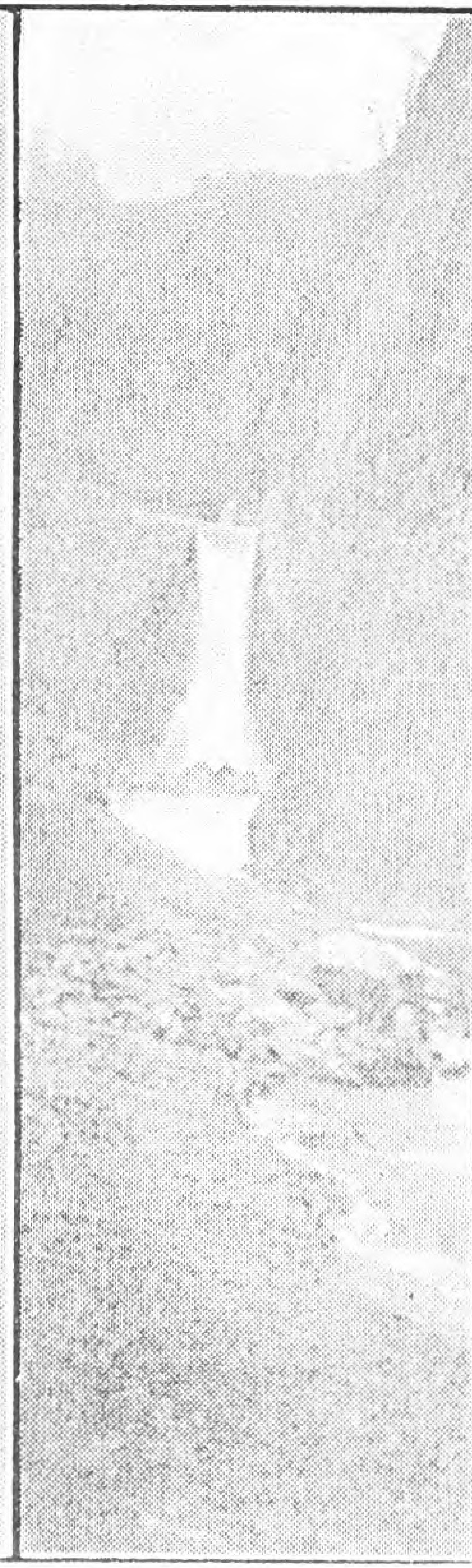


和田愛子孃

空翠



貴族院議員男爵安場末喜氏令孃





大藏大臣山本達雄氏令孃美子

實物三分ノ一大

第二回

新學期開始

實物二分ノ一大

本會員甫章　　本會員徽章

初等文學講義錄

會員大募集入會の最好期來る

此際入會者に限り種々の大特典を與ふ

本會員及本會卒業生の特典

本會員には大家の所論を載せ會員の作品を掲載せる文學雜誌を無代進呈す◉本會員には文章其他の無料添削の特典を與ふ◉本會員には事情に依り無料講習の便あり◉本會卒業生には高等賞與の特典あり◉本會卒業生には各新聞雜誌記者に就職紹介の便宜を與ふ◉本會卒業生を會友とし種々の便宜特典を與ふ

教授科目　文典。論文。小說。書翰文。記事文。新聞學。和歌。俳句。新體詩。國語。漢文。文學概論。日本文學。西洋文學。雜科（各科講師は専門の學士文士）

五ヶ月卒業　會費一ヶ月金廿五錢　全學期壹圓廿錢

講義錄見本附き規則書無代進呈す

東京神田區西小川町　電話本局四五四七番

大日本文學會

!!!銷夏の友!!!

植松美佐男著

家庭少女小說

百合子の涙

■四六判頗美本　■本文二百餘頁

■定價金三十五錢　■郵稅金六錢

百合子の涙は女々しい涙ではない男々しい涙である又美しい涙熱い涙である暗い家庭の濁さに堪へかねて少女ながらも至誠の涙に人生の響と美とを見出さうとした百合子の心持は現代の善良なる少女の心持に非ずして何ぞ

東京淺草區下平右衛門町

岡村書店

振替東京一九〇六五番

のんでなほる

ニキビ吹出物色白藥

ニキビ、吹出物、カユガリ、油顏、赤鼻其他皮膚ドス黑く色澤惡き等は概ね體内胃腸の變化より生ずる一種の毒素に原因す故に之を治するには必ず内服藥を以て。。。。。。。。。。。。。。。體内より治療するを可とす是現今皮膚病學上の定論なり本劑は既に醫藥の成書に於て確實に效能を記載せられたるを更に社會的試驗にて多數患者に施藥試驗し驚くべき好成績を報告せられ奏效の顯著なる事を確信して發賣す患者は只三錢の切手十枚封入申込ある時は直ちに送藥す市内は電話又はハガキにて申込次第配達す



藥價　四日分金三十錢　七日分金五十錢
半月分金一圓　一月分一圓八十錢

東京帝國大學醫科大學專攻
藥學得業士　**金澤巖**
東京市下谷區上根岸町百十一番地
電話下谷貳貳九九。振替東京四六七

●わきが及皮膚病

最も完全なる治療法

夫れわきがなるものは腋下の分泌液より一種不快なる惡臭を發する病症なり凡そ人として此病有時は全身常に惡臭を帶び殊に暖季より暑季に向ては惡臭一層甚だしく人をして近接に堪ざらしむる實に人間として恥づべき惡病なり又婦人の如きは外面如何に美なりと雖も此病有る時は人皆之をさけ應對談話するも快とせず故に良緣を妨ぐる等實に悲み憐むべき惡病なり然れども未だ是らに確實なる良藥を認めず爲に當主其の患者に治癒の目的を達せしめんと西川醫學士と共に多年硏究苦心の後ち茲に一大良劑を發見し數多患者をして實見するに偉大なる効力を有し愈々確實なる一新藥となれり依て同病者に弘く傳へん爲内務省に向て出願したるに當省に於ては本劑を試驗の上(第一六八一九號)を以て官許せるものなり藥名淸腋散と名く同病者は輕重に拘らず本劑にて完全なる治療をせらるべし又本劑はたむし、水むし、いんきん等の皮膚病は如何なる痼疾と雖も速に治癒す

藥價　五十錢、一圓、二圓、送料八錢
本舖へ代金を添へ御注文なれば直に送藥す

製劑本舖　東京神田錦町三丁目三　**中村寶珠堂藥局**

●御申込の際は女子文壇の廣告に依る旨御書添を乞ふ

晶玉



紳商黒田善太郎氏令嬢光子

山形縣紳士伊藤孝右衛門氏令嬢智惠子

樂園



加藤武雄氏及び夫人波子さ愛兒





實業家仁村弘一氏及夫人

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリ貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして生來色黒き男女にても平素之を用ゆれば本劑の主成分たる皮膚漂白性作用により漸次肉體白色となり肌を滑にし皺を伸ししあれ及吹出物をも治し艶美の容貌となる効果を有す世上種々雑多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑特製分貳劑を試みよ偉大なる奇効完全に顯る價並製壹劑壹圓廿錢 特別製壹劑貳圓貳拾錢

色白飲藥

英國及墺國輸入二種の全身清血劑にて飲んで體内の惡血毒血惡液を體外に排泄し血液を清淨にし完全に肉色を白色艶美ならしむる奇効顯著藥なり價英國製壹劑貳圓九拾錢墺國製壹劑壹圓九拾錢双方併用せば偉大の奏効容易に顯る着金即刻送藥す

腋臭治療劑

本劑は腋臭症に對し最近の學理と實驗とにより研究發見せられたる斯病唯一の理想的卓効新藥なれば他藥にて全癒せざる患者は早く試み病原を去り苦惱を脱せよ難重症は特別製を用ゆれば完全著効を奏す 藥價輕症用九拾錢重症用貳圓拾錢頑固慢性症用特別製分五圓卅錢小包密送

あざ及入墨ほくろそばかず。なまづ。いぼ

（最新發明藥）（奇効顯著）

を美麗に除去すること著効ある新藥なり患部の大小輕重を問はず容易に治癒し假令顔面たりとも痕跡を殘さず除去し得らる但し其製劑を二種に區別し一はあざ。入墨。ほくろを除去し又一はそばかす。なまづ。いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の寸方を明記し申込あれば其症に適應する藥を撰定送付す價は各試用劑壹圓拾錢小劑參圓拾錢中劑五圓拾錢大劑拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす）着金即刻送藥す

月經通經劑

本劑は胃腸を害せず子宮を痛めず月經とまりを容易に通經す長き滞り及び血塊には特製分を用ひよ極安全に快通流經す且つ月經不順より起る子宮病血の道を治癒し惡血古血を一掃す患者は早く試み偉大なる特効を知られよ近時無効類似偽藥多し！御注意を乞ふ價並壹劑七拾錢貳劑壹圓廿錢參劑壹圓七拾錢 特別製分貳圓卅錢郵券代用貳割增し

婦人病の福音

本劑は最新の學理と多年の實驗とにより發見せられたる婦人病藥唯一の靈劑なるを以て頑固なる月經閉止及血塊抔と稱へ永年經水なきを快通流下するは勿論月經不調に基因して續發する逆上頭痛眩暈腰或は子宮に痛ある人腹腰子宮部の痳發等に用ひ偉大なる卓効顯著なり早く試みよ

毛生新藥

（奇効顯著藥）

本劑（藥名ヘアーグロース）は多年研究實驗の結果發見したる毛髪發生藥なり即ち男女共禿頭病の人各種の病氣にて脱毛する人頭髪及はゑきわの薄き人陰部毛なき人まゆげ口ひげの薄き人其他總て毛のあるべき所に毛なき人用ゆれば毛髪早々と發生する特効あり本劑は世にありふれたる種々雑多の毛はへ藥とは其効大に異なるに付幸に玉瓦混同視することなく速に試み偉大なる奇効を知られよ價小瓶壹圓廿錢中瓶二圓卅錢特別製分五圓卅錢 着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增しの事

やせる藥

壹劑參圓廿錢貳劑六圓二十錢特製九圓拾錢

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徴したる唯一の痩身劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顔赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたる諸君は速に本劑を用ひ其偉大なる特効を知られよ

以上七藥專賣

東京市神田區五軒町十九番地

日新館藥房

電話下谷五百四拾六番

振替東京壹九貳四六番

花つなぎ



晝顏



出島精子



佐藤綾子



山田菊枝子



鈴木絹子

女流文學雑誌 青鞜
第二巻八號 八月號 定價金二十五錢

發行所　東京本郷區駒込蓬萊町萬年山內　青鞜社　電下谷三七七八　振替東京一一六〇
發賣所　東京堂　東海堂　北隆館　盛春堂

東宮侍講本居豊穎先生題詠
文學博士小杉榲邨先生序文
下田歌子先生題詠

國文學士 小森松風先生編

好評

女子美文作法

▲全一冊大判二百卅頁　賣價貳拾錢　郵税四錢

美文の作り方を最も明瞭に解説し、加ふるに大家の名文を模範として擧げたれば文章を作り、文章を愛する諸嬢には寸時も座右を離すべからざる良書なり

報知新聞記者中村木公君編

好評

實地精査　女子遊學便覧

▲全一冊中判洋装　賣價拾五錢郵税四錢

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め自ら學校の選擇に迷ふ諸嬢も之を讀め一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

出版元　東京市京橋大鋸町　女子文壇社　賣捌 到處書店

（振替口座東京壹七貳九番）

女子文壇 化粧問答 顧問

藤波芙蓉先生

實驗發明

日やけどめ

日に焦ける季節が來ました、けれども本當に日に焦けるのを防ぎ、且つ焦けたのを除る方劑を調製するのは中々手數のかゝるものださうで、それが爲め藤波先生も、從來去る高貴の御方、外二三の或る貴夫人だけには據ろなく調製して差上げてあつたのを、この季節に際し、わが愛讀諸子のためにと、先生に願つて只一回、五十ボンドだけを調合して頂き、この五十ボンドを限り、皆樣に御わけ致します、使用法は極めて簡便で、朝夕郊外の散策、海邊の漫歩の折、これを御顔に御つけになつて出られ、御歸りになり又御つけになれば、日に焦けることは決してありません、化粧水の代用としても結構です。

定價　壹瓶　金四拾錢

送費　市内四錢地方八錢　湾鮮臺樺三十錢

專賣元　東京市京橋區大鋸町　振替口座壹七貳九番

女子文壇社代理部

▶ 文字に現れたる娘時代の表情 ◀

女子文壇 増刊

娘時代

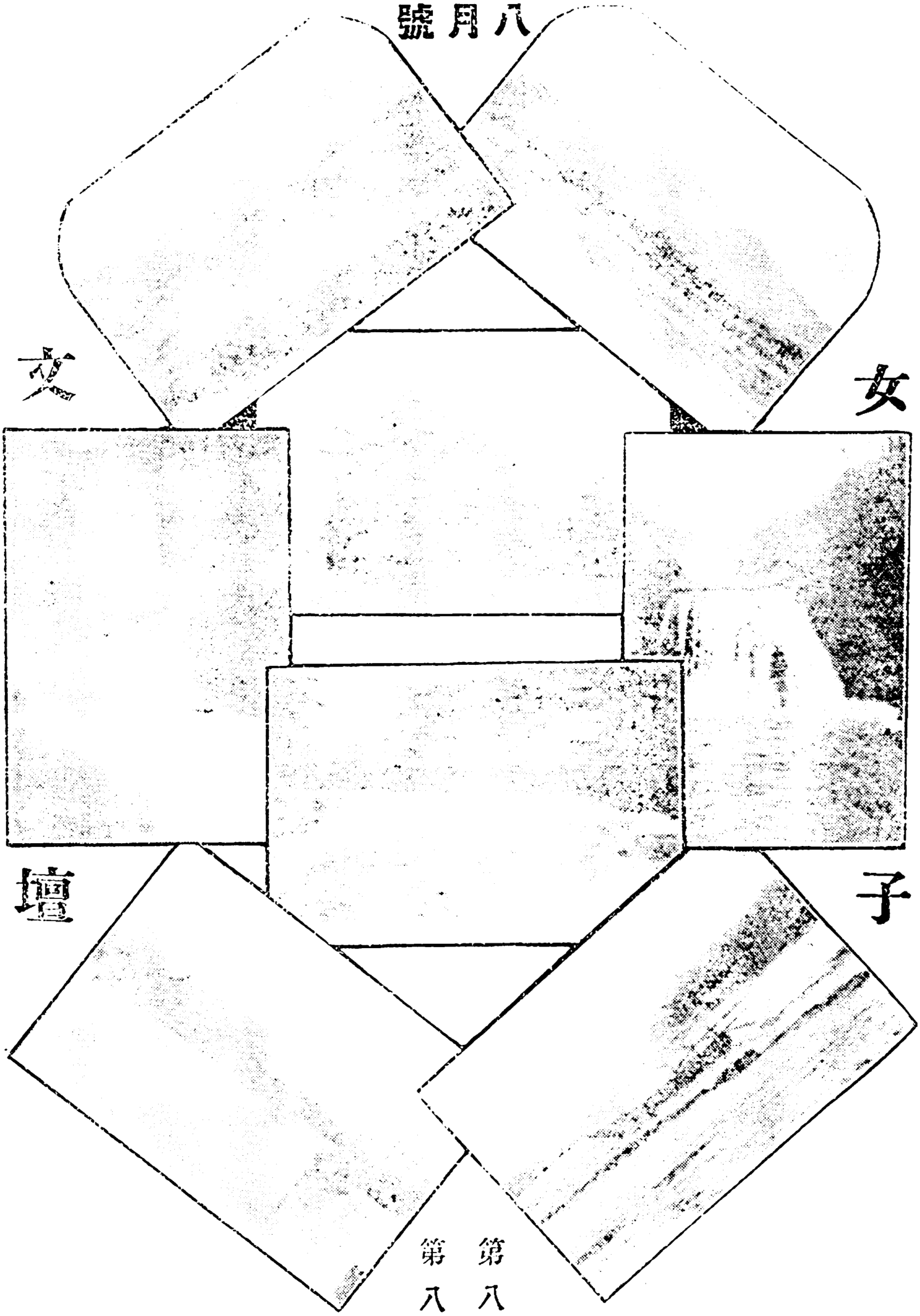
二百頁美装
執筆者寫眞入
特價拾錢
郵税壹錢五厘

發行所 東京市京橋大鋸町 女子文壇社

【振替東京壹七貳九番】 賣捌全國各書店

八月號

女子文壇



第八年
第八號

一國の爲にも、一家の爲にも、一婦人の爲にも

大問題

女子高等師範學校教授文學博士
吉田熊次

△電車の中で見た男子と女子

今日の若き婦人の有樣を見ると、種々の疑問が浮んで來る。若き婦人と云ふ中にも種々の種類があるが、私どもの直接感じるのは、教育を受けてゐる若き婦人である。學校に入つてゐる女學生。又、學校を出て職業に就いてゐる若き婦人とか、或は人の妻となつて居る若き婦人について種々な事を感じてゐる。其の中でもつとも深く考へられるのは、露骨に云へば、是等の若き婦人はかういふやうにして、一生を間違なく過す事が出來るかどうかと云ふ事である。かう云ふ疑問を持つ事は婦人に對して、失禮な云ひ分かも知れぬが、兎に角自分はさういふ感じを第一に持つのである。

近頃私が實際に見聞した事であるが、ある日、電車に乘つたところへ、丁度日曜日であつたので多分郊外に散歩に行つた歸りか、もしくは人を訪問した歸りかと思はれる一家族が乘り合せた。その中に二三人の女の子もまじつてゐた。又男の子も居つた、男の子の服裝を見ると勿論上から下まで木綿のゴワ〳〵した着物で、其の柄も淡泊したものであり、袴も、竪縞の極めて簡單なものであつた。其の擧動を見ても着物相應に活潑であつた。

然るに其の姉とも思はれ、妹とも思はれるのは前の男の子と比較べるとまるで同胞とも思はれぬ程仰々しい服裝であつた、華奢なリボンを着けて居るのは云ふまでもなく、着てゐるものも普通の着物ではない柄はもとより大きく、袂の如きものもいちじるしく長くて、一寸訪問になどには相當しないものゝ様に見える。もとより郊外散歩などの出來る服裝



ではなかつた。従つて女の子の態度は、男の子の態度とは、違つてゐた。男の子が無邪氣に無頓着に快活にしてゐるのに反して、女の子は常に人の顔付を氣にすると云ふ鹽梅、始終そはくしてしつかりしたところはなかつた。母親らしい人は其の傍についてゐたが決して其れを怪しむと云ふ様子もない。女の子はさうしたもの、男の子はかうしたものと

云つたやうに、極めて無頓着でゐるのであつた。

その時に私は沁々と感じた。一帯これはどうした譯であらう。同じ自分の子であつて、其の可愛いさに於ては、男の子だから、女の子だからと云つて變りはないに違ひない、然るに此の男の子と女の子とは、かう云ふ樣に成人してゆけば、其の生長は決して一樣に行くべきものではない。男の子はどこまでもしつかりと自分の力を以て自分の事を處理し、充分獨立して行けるやうに育てられてをるやうであるが、女の子になるとまつたく玩具の樣に育てられてゐる。生命こそ有つてゐるが、是れは一種の玩具である。決して自分一個の力で獨立して行くと云ふ希望のないのは勿論、幼少い時から、始終人の目色をうかゞつて或は泣き、或は笑ふやうに育てられてゐる。一言にして云へば男子は幼い時から人間として育てられて居るのに、女子は、單に人の玩弄物に適するやうに育てられて居る樣に見える。

子供等の母たり父たる人々はいづれも平等に可愛がつて育てゝゐるつもりではあらうが、其の子の將來について考へると、男の子はどこまでも丈夫に健かに育て上げられ、女の子は徹頭徹尾弱々しく、人のもてあそびものに育てられてしまうやうに思ふ。

然して是れは是の一家族ばかりに止まらず、現今の敎育のある婦人の全體に通じて、かやうな躾け方が普通のやうに認められて居るのは嘆かはしい事である。是れは實に國家の爲めにも、亦廣く人類の爲めにも、考究を要する問題であると私は考へるのである。

▲若き婦人の間違つた方向

昔佛蘭西に有名な文學者でまた敎育の論をしたとてろのルーソーと云ふ人が其の敎育小說『エミール』の中でかういふ事を云つてゐる。敎育のしかたには二つの主義がある。一つはある社會を目當として其の社會に適するやうに人間をつくる主義であつて、他の一つは自然人をつくる事を主義とする。自然人と云ふのは如何なる社會に於ても役に立つ人の本性を自然に發達せ

しむる教育主義である。

此の區別に就いては種々な議論もあるが、ルーソーは教育の目的は自然人をつくるのでなければならぬと云つてをる。私は教育の主義方針に關しては、ルーソーと反對の結論を持つてゐるもので教育はある社會に適するものをつくらねばならぬと思ふものであるが、ルーソーの說につ



いては充分に同情すべきところはあると思ふ。

ルーソーの云ふ社會人と云ふのはルーソーの經驗したところの社會、卽ち其の當時の巴里の社交界などに於いて、見聞したやうな虛飾的な輕薄な人間をつくる事がよろしくない寧ろ田舍に多く見る、大都會の浮薄な社交界に出入りせぬところの自然的な人間こそ立派

な人間であると云ふ趣意で敎育の目的は、自然人をつくるのにあると云つた樣に思はれる。

其の意味から見れば、ルーソーの云つた事は必ずしも惡くない。眞實に人間の性格がしつかりと出來上つて居り、立派に發達を遂げて居るなれば、どんな社會に於ても、價値があり、役に立つもので、是れは敎育上理想としなければならぬ事である。

ルーソーの考へた社會の人となるなと云ふのは、其の當時の腐敗せる社會の人の眞似をするなと云ふ事である。所謂自然人となると云ふのは當時の田舍に見掛けたところの立派な自然的な人物となれと云ふ事であつて、言葉は違ふけれども、私の云ふ樣に矢張社會的の人間をつくるのを敎育の目的とするのと相違はない事になる。

ところで、現今の日本の若い婦人達を見ると、私は餘程奇體な感じが起つて來る。一方から見ると、ルーソーが避けねばならないと云つてゐる所謂社交的の人間につくられてゐるやうに思へる。ルーソーの非常に厭つたところのルイ王朝の許に集つた、虚榮にみち輕薄きはまりなき巴里の社交界の婦人の風を寧ろその理想としてゐるのではなからうか。外面を飾り、唯一時的の虚榮に心を奪はれて、ルーソーの所謂自然人的のしつかりした人格の敎育と云ふ事に注意してをらない樣に思はれる。

さきに一例として擧げたところの一家族の若き婦人は丁度それにあてはまつてゐる樣に思はれる。さうかと思ふと今日の若き婦人にはある意味から云ふと、ルーソーの敎育主義であつた自然の慾望を滿足せしめる事を主として、個人々々氣儘な生活を遂ぐる事を理想としてゐる樣にも見える。卽ち一面から見ると、自然人、所謂本能の滿足を遂げる人間の樣に見え、更に他の一面から見るとルーソーの大に戒めてゐた社交界の浮華を追ふ人にならうとするやうにも見える。惡く云へばルーソーの敎育說の惡い影響を多く取つて居る樣に見えるのである。

ルーソーが云ふところの自然人、所謂人格の充實と

云ふ事には一向留意する事がなく、只其の個人本位だけを取らうとして居る様に思はれる。虚飾的な社交界の人になる事を望む點に於いてはルーソーの戒めた社會の人となる事をつとめてゐるが、然らば眞に他の人と共同して生活をして行く様な訓練がついてゐるかと云ふと、どうもそれはない。ルーソーの教育説の一面を惡く理想とし、私どもの信じてゐる教



育とは全く反對の事をしてゐる様に見える事が、現代の若き婦人には往々有る様に思はれる。

▲婦人を災するものは婦人なり

不幸にして此の觀察が誤つて居らないとすれば、此れは、ゆゝしき事と思ふ。政事上の問題もしくは經濟上の問題は大問題にはちがひないが一時的である、是れは、單に一家庭の事實に

のみ止まらず、國家將來の存亡に關する問題である。果して今日の若き婦人達は、今云つたやうな淺薄な虚榮的な敎育を受けてゐるとすれば、是れは將に今日の活生活には不適當なる婦女子をつくりつゝあると云はなければならない。

今日の世の中はどこを見ても生存競爭の世の中である。從つて實力のあるものが結局勝利者となるので、是れはどの社會に於ても殆ど原則であると云つてもよい。一國にしても實質が秀れてゐる國の方が盛大になつてゆくのが當然であり、人にしても、實力のあるものが成功をする。殊に女性に於いても其の通りである婦人がルーソーの所謂自然人の如く、人格の充實が出來、しつかりとして、どこまでも役に立つ立派な婦人として世に出て來れば、婦人としての威嚴も保たれ、婦人としての職分も完全に果たす事が出來る。もし婦人にして、虚弱で、虚飾に充ちて其の他に何も爲し得ないならば、婦人の將來は永久に浮ぶ瀬はないばかりでない。一國の半數を占めてゐる婦女子がかくの如くならば、此の國の將來も亦悲しむべきものでなければならない。此の意味に於て私は婦人に災するものは婦人であると云ひたい。世の中には男子が婦人を輕蔑すると云ふが決してさう限らない。其の根本に於ては、矢張婦人を輕蔑するものは、婦人自身である。婦人にして人格が充實され、確かに實質を供へて居るならば男子は決して婦人を玩弄し得る譯はないと思ふ。然るに婦人自ら幼少の時から、自ら人の玩弄物に甘んずる心を養ふて居るのであつたならば、婦人の地位は永久に高め得る事は出來ないであらうと思ふ。そればかりではなくこの樣な性格の婦人は、今日の生存場裡に立つ事が出來ぬ。必ず人の玩弄物となつて、他人のお影で生存するより外はない。然るに旦夕を計られざる今日の活社會に於いては、かくの如き躾けを受けて居る婦人が、立派に立つて行くと云ふ事は到底望む事は出來ないのである。

私は婦人と云ふものを男子と對等して世の中に立つものとは思つて居らない。社會の事實として、婦人は

男子と相寄つて生活してゆくもので、相爭つて生活をするものではない。それであるから女子の獨立と云ふのは原則として同意する事は出來ないのである。尤も特別の事情と、特別の境遇にある人に向つては仕方がないが、社會の原則としては、婦人は確かに家庭の内部にゐて其の職分をつくすのが當然であると思ふ。然し家庭の内部に於ける婦人は、男子の玩弄物であると云ふ意味では決してない。過去に於てもさうであつたが



將來に於ても、玩弄物的の婦人によつて一家を整理さるべきものではない。充分に強い正しい性格の婦人が強く考慮を經て、精密に處理すべき事が一家庭の主婦としては頗る多い只虛飾虛榮を頭に浮べてゐる婦人によつて、健全な家庭は決してつくられるものではないのである。もしも、多くの婦人が玩弄物的の婦人になるならば次の時代の家庭生活は、健全でなくなるに相違ない。次の時代の健全な家庭生活をさまたげるのはや

がて次の時代の國家を危ふくするものである。是れは目前の利害をすてゝ、一家、一國の將來を思ふものゝ深く考慮しなければならぬところである。

▲一婦人自らの大問題

然しながら一方より見ればまた此の間に種々と注意すべき事項がある。元來人間の青春の發達から見ても男女とも三十歳前後にならなければ健全なる判斷力はつかないものである。況んや高等女學校位の若き婦人に向つて、さう鹿爪らしい注文をするのは無理であるかも知れない。近頃樣々に硏究されてゐる青年の心理から見ましても、さう單純に出來る性質のものでないかも知れない。

然し私は是れ等の點は是の大問題を延期する理由にはならないと思ふのである。何故なれば青年期に於ける種々の心理狀態は婦人にばかりあるのではなくしてひとしく男子にもある事である。然も男子には眞面目に育つてゆく事が女子にそれが出來ないと云ふわけはないのである。第二には子供自身にはそれが出來なくても、人の父母たるもの、祖父母たるものは健全なる判斷を持つべきものである。男の子に對しては健全な判斷力がついて、女の子には、健全な判斷をつける事が出來ないと云ふ譯はないのである。どうしても女子に對して、注意が行き屆いてをらないのであると云はねばならない。

尤もかやうに申したところで、ある人は更に疑問を進めて、男の子と女の子とは多少心の働きが違ふ、男の子に出來る事が盡く女の子にも出來るものではない。男の子に木綿の袴をはかしたからと云つて、女の子にもその通りさせる事は出來ない。男子と女子は心理が違ふからと云ふかも知れない。

是れにも多少の眞理がないとは云はないけれども、それは決して、今日の女の子の敎育の申し譯にはならない。なぜなれば是れは文明國の有樣に比較をして見てもわかるとほり、國々に於て婦人の躾け方が違つてゐる。然し日本のやうに婦人が人の玩弄物となるべき

ものとして躾けられてゐる國はどこにもありはしないのである。ある國では男子の樣に婦人にも自然人として、敎育してゐる。少くとも日本の如く淺薄なる輕薄なる浮薄なる性質を持たするやうに敎育してゐないのである。是れらはもと〳〵、歷史的關係もある事であつて、何故に日本にはかゝる風が起つたかと云ふ事は別に述べなければならぬ事であるが、とにかく今の日本の躾け方は、事實に於て世界に類がなく、道理に於ても今日の世の中に不適當なものである。

尤も私の云ふ所は主として東京の社會についてゞあつて、田舍には此の樣な弊風はないかも知れないとは思ふが、近頃、地方から來た娘を預つた事がある、それを通して見たところでは、矢張、其の恐れがないとは云はれない。是れは、一國の問題であるが、又婦人の地位の上から見ても大問題であると思ふ。



わがうみ

あゝうつくしきわがうみよ
あさはひをうけよはつきを
まひるはくものかげうかべ
しづかにとほくはたひろく
こゝろのかぎりうごきつゝ
うごくがまゝにうたひつゝ
かゞやくときはぎんのいろ
おもひしづめばはひいろに
ちひろのそこもひとひろの
おさきなぎさもいつはらぬ
おのづからなるこゝろこそ
うみのおもてにあらはるれ
あゝうつくしきわがうみよ
なみははるばるきたれども
わけなくきしにくづれけり
あゝおほいなるわがうみよ

—すゞめ—



植物界の巨人

理學博士　三宅驥一

△一本の樹で貸家の百軒も建つだらう

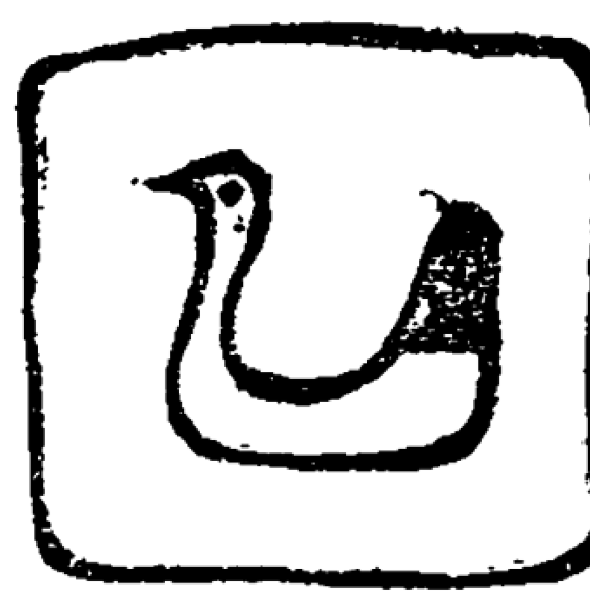
世界最大の木と云ふのは亞米利加のカリホルニヤ州の山林に生えて居る。昔は何萬本となる大森林を成して澤山に生えて居つたのが、段々と少くなつて、今では、カリホルニヤ州の山の中に數箇所の森をして、此處に何百本、彼處に何千本と云ふ樣に生茂えて居るのである。

私は一昨年其の森の一つを訪ふて、山深く這つて行つて親しく其の巨木を見て來たのである。

此の木は松柏科に屬して居るものであつてセリワイア屬に屬して居る。杉に近い木で、其の大きいものになれば、高さは四百尺に近く直徑は四十尺近くある。

もとより此の木のすべてが其の樣に太いと云ふのではなくして、あるものは二十尺、三十尺と云ふのもある。四十尺に近いのは一つの森に一つか二つよりないのである。此のセクワイアの森に這入ると、丁度大きな柱が立ち並んで居る樣である。他の木の樣に上の方が割合に細くはならない。葉は杉に似て、色は杉よりも赤みがかつて居る。

私の行つた森には其の木が三百本ばかりあつて、一番大きいのが樹根の方をとつて廻りが百十二尺はあつたのである。百十二尺と云へばどうも直徑は三十尺以上である。此う云ふ森には、所々に木の根の所にトンネルが作られてある。私の行つた森にも一つあつた。



からしてトンネルを穿つても、木のなかは死んで居ぬので、決して枯れると云ふ事はない此れ等の木の生命は六千年、七千年と云はれて居つたが、今日しらべて見たところでは古くて三千年程である。私の行つた森で見た木は、其の切株の年輪を數へて千五六百年の壽命である事が解つた。

此の樣な大木を一本切れば、其材で貸屋の百軒も立つであらう。現に私の行つた森で中位の木の切株を床として一軒の家が建てゝあつたが、此家で二三十人の人が舞踏をする事が出來ると云ふてとである。



此の樣な巨木も今までは燒いたり伐つたりしたゝめに少くなつて來たので、多少とも殘つて居るものを、今後保護する樣になつて固く伐木る事を禁じて居る。而して木毎に、有名な政治家であるとか學者であるとかの人の名を付けてある。

セクワイア、ギカンチエカと云ふのが此樹の學名で

あつて、ギガンと云ふのが巨人と云ふ意味である。又アメリカ人はピッグツリー、大木と云ひ慣らしてゐる

此の外に矢張同じアメリカの海岸の方に大きな木がある。此れは其數が何萬本となくあつて、森をつくつて海岸をかざつて居る。

セクワイア、ギガンチエアよりは赤味を帶びて居るので、レッドウードと云はれてゐる。學名は、セクワイア、センペルヴイレンスと云ふ。

是れも巨木に劣らぬ程のものであるが、直徑は多少負けて居る。それでカリフオルニアの大木と云ふと專ら、セクヮイア、ギガンチエアの方をさして居る。

此の巨木がカリフオルニア州にばかりあると云ふ事は、銀杏がもとは全世界にあつたのが、今は僅かに支那と日本とに殘つて居る樣なものであつて、前世紀に繁榮えて居たものが、そこに僅に殘るに至つたものである。

私の行つた森には日本人としては私が始めてであつた。もとより森の全體が其の巨木ばかりで他の木が一本もないと云ふのではない。樅や松の木が其間に交つて生えて居る。極めて山の深いところで、森の傍に宿屋が一軒あつて、其處に五六人の人が避暑なんかに來て居ると云ふ程靜かな所である。

まだ大きい木をさがすと、濠太利亞に、ユーカリの木があつて、是れは高いのになると五百尺位もあつて高さは、セクワイア、ギガンチエアを淩ぐか、直徑は二十尺位かないので、矢張世界の最大の木としては、セクワイア、ギガンチエアの方である。

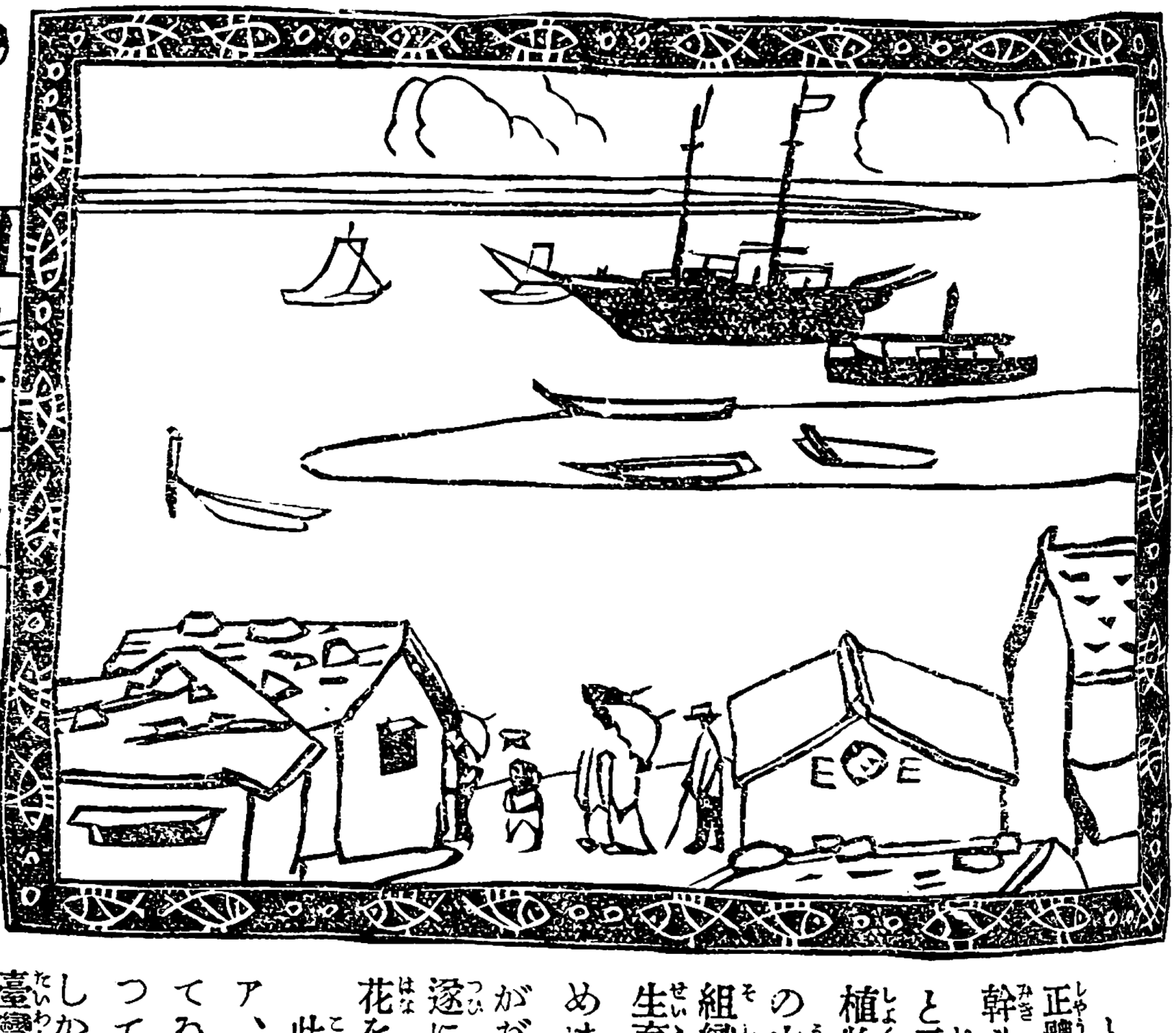
△熱帶の最大の花

世界最大の花はどこにあるかと云ふと、東印度諸島の中のスマトラと云ふ島の中部の森林にはえて居るのである。

スマトラ島は御存じの如く面積は日本の本土の二倍程もあつて、シンガポールの南に當つて、熱帶圏の中にある。暑熱が甚しく、鬱蒼たる森林が全島をおほふて、此處に住む土人は、極めて獰猛な、人を殺す事を

何とも思はない人種である此の島を治めて居るのは、和蘭政府であるが、今も日本が臺灣の生番人を征服し切れないで居る樣に絶えず土人の間に戰がくりかへされてゐる。

最大の花はこの樣な熱帶のスマトラ島の森林に於て千八百十八年に初めて發見されたのである。スマトラ中部のマンナ川のほとりの森の中で、見出されたる其の花は、花の直徑　三尺四五寸——色は一寸奇麗でない。黒みがゝつた汚い赤色で、花から放つ香には惡臭がある。



Ⅵ　銚子町を行く七人の一行

ところで此の大きな花の正體はと云ふと、殆ど葉も幹も見えかねる程小さい。と云ふのは此の植物は寄生植物であつて、他の木の根の中に這入つて、他の木の組織の中から養分を取つて生育をするものである。始めは卵程の頭を出し、それがだん〳〵に大きくなり、遂には根を破つて、大輪の花を開くのである。

此の花の學名はラフリシア、アルノリデーと云はれてゐる、同じ熱帶地方であつても、スマトラ島にだけしか生えて居らない。勿論臺灣にも見掛ける事は出來ないのである。

西多摩より

三ヶ島よし子

惑ひてぞ賑さなれ左右より身を奪はるゝ苦しさに似て

なほ多く悔ゆる日無きかなほ深く心傷つく時のあらぬか

誘はるゝ心なるこそ悲しけれもてゆかましを投げうたましを

われ稀に美しきことなしたればかくして言はず戀人にさへ

やるせなき歎に浸す心もて今日より明日に逃れんとする

明日ははやわが仇さるゝとも今思ひきはめて許す心ぞ

滿願のしるきが如き涙落つ捨てよといひて捨てられしわれ

我ゆゑかあらずか知らずかにかくにゆくへも知らずなりにけるかな

ある限盡さんとして盡さゞる悲しき日にぞ見捨てられにし

初戀を抱きておそるゝわが胸のわなゝき止めば最終の見ゆ

朴の葉の青きが一つひるがへり谷におちいる夕立の雨

君思ひ殘る血しほのをどる時大天地を指して戀てふ

甲斐無きを命と思ふほか無しや男みづから世をもてさとす

君ははや冷くなりぬ敵すらほのほの玉を夢に投ぐるを

悲しくも戀に先だち悔いがたし又戀ひてまし又悔いてまし



火の鞭

筑波根人

富士つくば百里のくさに火のむちをふるとゆめみてさめし我はや

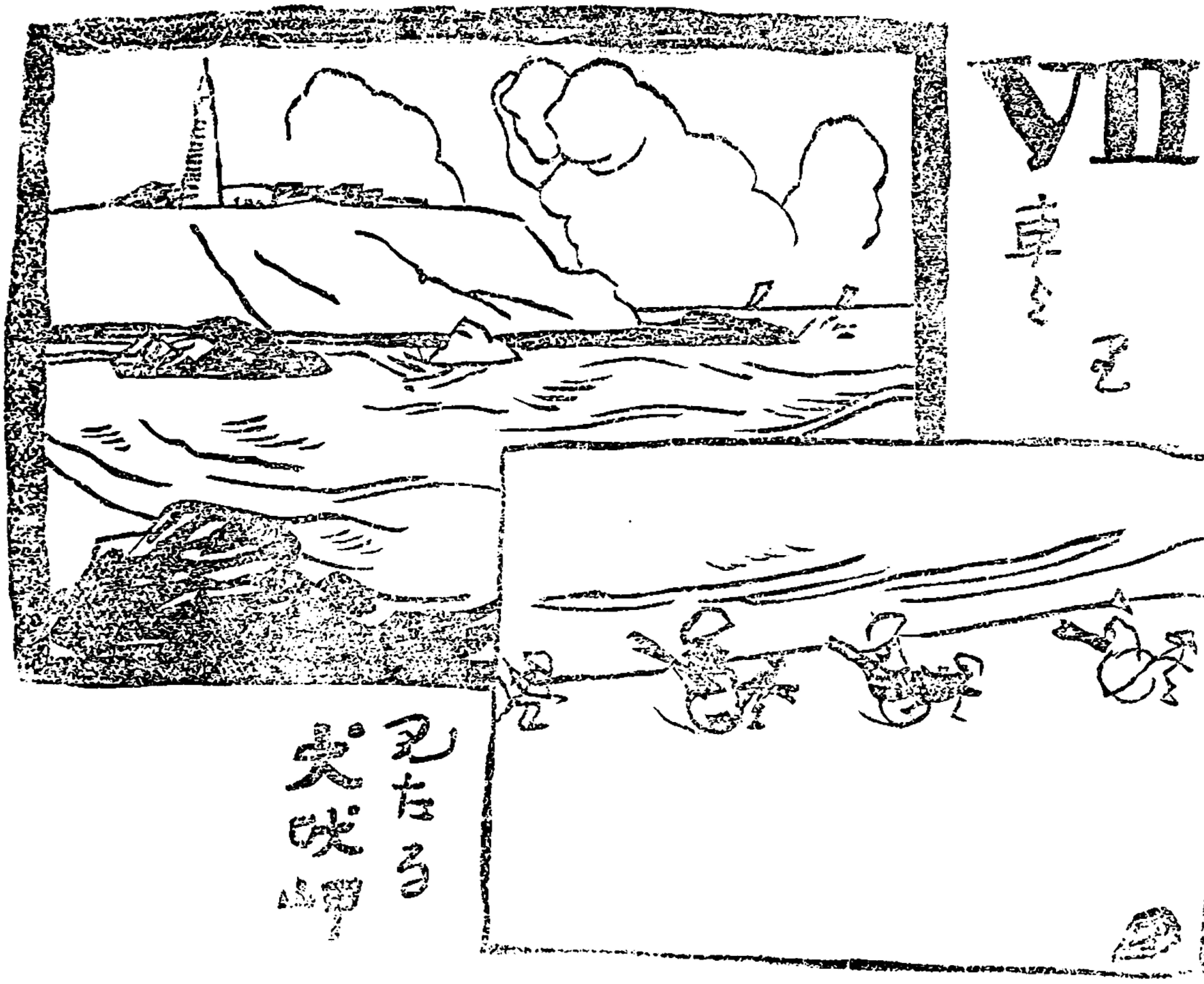
うたびとは世に多かれど、
まことなるこそまれなりけれ。
いつはりにのみなれたる世の人に
君がまことの歌にこもる
あはれはなどかくまるべき
あゝPopeとおなじなやみもてど、
なげきし君が言の葉の
おなじうれひはもつものを。
げにやまことのうたびとは、
そと胸おせば泣きいづる
人形のごとくあるべきなれ、
よろこびも、またかなしみも、
われらみづからのものにあらず。
蘆は河畔にあらざるべからず、
うたびとはなやみのうちに
たえずふるひてあらざるべからず。
さらば、ほとつく息は風となりて、
他のすべての蘆の葉をして咽ばしめん。

Olneyの村より
Cowperの歌はひゞきゝ。
筑波根に君は老いけん、
あはれうたびとよその溜息を空しうせざれ。

二月の『新潮』——生田春月

一時私は強い魔薬を注入されたやうに感じました。あなたの筆はあまりに酷です、あまりに自由です。しかし私はそれによつて反感をもつたのでもないのです、私はノラを見ても直其あとから幾世紀も續けられた日本の道徳に縛められて行くのは快いと思つてゐるノンキ者です。かう申したら餘り手對のないのにお驚きか知れませんが、なまじひ自覺の何のつてゐるよりか、これでいゝと思ひますの。さうして私は一時盛かして散つて了ふ櫻でなくて、花も無い、





或は實許の物かも知れません。寂しいライフ!と仰有るでせう。が私の生活は人樣が見たやうな無意味な物ではないと思ひますの。私はシャロット伏姫(妖姫?)がサア、ランスロットを見ぬ前のやうにありたい。笑つちやいけません。

あなたの筆は今の若い女に非常に權威が強いのに、實に實に言ひやうのない心もちが致します、あの○○○○子樣でも、○○○子樣でも、失踪の原因はあなたの筆が導火線となつてゐると承はりました。一たい凡ての女が賣られると仰有るのはちと酷ではありませんか。近くおうちへいらつしやるといふ花の君もやつぱり賣られて來ますの?そしてあなたは買手なのね!私は人の賣買が出來るのを不思議に思ふより外御座いません。

ある時はあなたは非常に恐ろしい人と思はれます。或時は非常になつかしい人ですの。なつかしいといふ地に、恐ろしい或は皮肉な文を織つてゐる方で御座います。つれ〴〵にお書きなさるのか

知れませんが被害者は助かりません。

五月二十一日　原宿より歸りてグローキシヤニヤ方

被害者は助かりませんと仰有るのを見ると、手もなく私をひとごろしに認定した譯ですね。あまくち、のろま、ひよつとこ、タヌキ、惡口も種々有るが、でもひひだと噂されるよりかいゝかも知れませぬ。

今、午後三時夕日があかあかと奧庫の白壁から照りかへして、庭一ぱい明るい本棚に、左の肩を當てゝ寄懸つてめざましぐさを攜げてゐたところです。「鈴舟は傑作也、大々的傑作なり、これを佳ならずといふ者の

VIII 隣の出來事



如きは、オシヤリコデンベイ氏の審美學の一頁だも窺はざる無學無識の徒のみ。氏の哲學第二卷にいはずや

茶壺に追はれてトッピンシャンと。『鈴舟』は實に此意に副ふもの。何者の痴漢かこれを不佳とせん。ムナ御氣がつかれてざふらふか」御覧なさい、むかしは鷗外先生達はかうして群作家を許したものである、ムナといふところを御覧なさいといふだけ、私はまだやさしい人なのだ。

　あなたは人のおくさんである。冷ッこいお茶をさし上げても、ぬるまつた氷をお勸めしても、きにもはなにもかけぬ大悟てッていのおばさんだと思つてゐた。勿論美しうはいらッしやいます、が何にしてもお年がお年ですからね。しかし待てよ、おれは近眼だから十ウ位よけいに見たかも知れん、詫證文をとられては助からないから今の內あやまつておかう。

　あなたは『花守』の「人故妻を逐はれて」を御よみでせう。……人故に妻を逐はれて湖上の舟に棹さした人は、最う五人の子のおとうさんです、「人故妻を逐はれて、知るは二人の涙のみ、羨しきは羽すりて、雌雄共に棲む白鳥よ。人故妻を逐はれて、さめぬ白日の夢は惚け、雲流れ行く東路に、何しに來ぬる我ならむ」逐はれし君の父君は、さきの內閣書記官長、今も貴族院にときめく方である。當時多くは私が自分の上を歌つたのだと思はれたらしく、感傷的唱和の詩を寄せた人もあり、『天鼓』では長い評釋を試みた人もある、十年後の今日すら追ふべき細君が有りませんのに。迷惑はそればかりでなく、筑波出身の早大學士K君は、これは乃公の事をあてこすつたに違ないと腹を立てゝ、それから大寶までは來ても宅へはよらない。許嫁を村へおいたまゝ、或女と秘密に結婚したのだ。○子さんは騰波の江村にゐる、まだかたづかない。

　グローさん、あなただつて痛くない腹を探られたら其お美しい顔を顰めるでせう。尤私はKが耻をかゝせられたと言つてると聞いたけれど、今以て辯解はしない、人をおこらせるのは人を泣かせるとおなじに面白いものだ、しかし私はあの○○や○○○やのやうに既に夫有る人を動かして家出をさせる爲に筆を執りはしなかつた。又あなたが賣られた人か買はれた人かも

初から問題にはしやしない。唯、夢の世に生くるをとめの君達を喚びさまして「眞」に生かしたいと思ふからであつた。

私の憤怒はなほ火の如く燃えてゐます、曾てSの爲に人故に逐はれし妻を悲みて、淸らかな涙を流したのはやはり夢の世の自分であつた。

みづからを押へあたはず、いみじかる少女の世をばおし取し哉。男子は皆かくの如きなり。をとめの世を捨つる。


IX 芳お學士のむづかしげ海草の說明圖

私の心も大分動いて居ります。單純な幼さを過ぎて不思議な作用をする時代に入つたやうに感じられますそれは物かくにも増した一ぱいになつた心もちで暫の日を送りました。

母を思へば悲くなります、やつぱり相反くもので御座いませう、二つの生活は。

私は徒らな處女の誇を思ふのではないと喜志樣にも申しました。神秘に對する尊敬と、新しい世界に眼を上げた喜びとを、この度の奇蹟の前に捧げます、鏡の上をころがる玉の危さを指觸れることなく、けれど傷つかぬやうに、其

儘危きまゝに守りたいのですけれど。あゝ私の心がそんな姿をするやうになつて參りました。けれど幾たび思ひ返しても歸り來るところは觀照の世界でございます。危いけれど自由な、苦しいけれど廣い空の下に置かれたのです。心のふるへの激しい時、からだが火のやうになつて、眠ることも食べることも忘れます。あゝ私も男に生れたうございました。天つ日の下の悲みを胸に抱き得る女はどこにありませう。師の君は何日私に「おまへも蝗のやうに」と仰しやるでせう‥‥この心若し戀と名けらるなら、私の戀の世界は無人島の大空の下にもございませう。具體的な生活に於ては私は死に到るまで清教徒で終るのでございます。長い袂の花模樣に對して、えりに延ばす白粉の艶かしい感觸に對して、また生物の肌にひそむ脈の響に對して何の誘惑も感じぬ以前に、私は早く眩しい藝術の國に魂を走らしました。あゝ何といふ單純さでしたらうそれが破れて一生に最尊い時は、今私に參りました淸き處女！今までに誰かそれを最深い意味で誇り得ましたか、私は知りたうございます、知つて記念碑によどめたうございます。あゝわが命は其爲に生きるのであれ。

世にいたましきは若い心に享ける暗い未來の暗示ではございませぬか。しかし脅され乍〱私はまだ絶望しきれぬ未練の眼を地平の彼方に投げてをります。落る泪を見まもつてくれる人のないのは私もあなたも同じことでございます。けつして〱そんな人はいりませんでせう、私どもには。

六月十七日　雨はげしき日　　隼

嗚呼、斯人。

てんろんの玉にたぐへんには微しく溫きに過ぐるを奈何せむ。アルプスの雪は消る日ありとも、誰かゆるされざるに處女の尊嚴をけがすものぞ。

嗚呼この人。

　アルプスの一の峰かも、君が肌
　日の御神もいまだ領さず

「鳳」はあかいし嶽に下り來とも
君はゆるさじ人の足觸る

鳳は飛行器

「鴛鴦の衾あたゝかく蓬萊の浪夢に入り千代の睦言雲鶴の枕やひとり知りぬべき」されど賣られたる結婚に何の意味か有る。唯柔順なる女と言はれんことを念ひて道路の人に適くは、たとへば青樓の人の夢みる夢のみ、彼れの千夜とこれの一夜と畢竟一なるを思へ。

何が故に人は其最初の戀を守らざる。何が故に人は二人の主に仕へながらなほ純潔を口にする。



知らずして父の手より夫の家に賣らるゝ者はあはれむべし、好みてわたさるゝ者に至つては悲しい哉、是犬豕也。

汝、美しき人たらんよりはぬすまざる人たれ。むしろ餓ゑて木にくびるとも、金屋に坐して良人に媚を賣るの人たる勿れ白日帶を曳きて大達に走るの醜を知らば、其身を人に與ふるの更にみにくきを思はずや。

「他人」の爲に結婚する勿れ。

われは「人」なり「女」なり、この身、この心、何人も左右すべからず。

汝、何の爲に、をとめの世を捨つる。

やよ海は青き月夜となるものを
わが寢る家に引くな木の戸を

鰹賣ると月夜の海の魚のごと
人こそ騷げ青き月夜に

披きなば汝の香のこぼるゝかと
たゆたふ隙の寂し封筒

戸をたてゝさめ／＼泣きぬかくまでに
青き月夜もなほ離れ住む

牧水

きし子

こゝにまたこの君あり、三千里外に逭はれんとせし途より、其この人の手にかへり來て、悲壯なりし三年の涙も忘られしなり。かくて美しき新人の姿を見よ。

あめが下に耕すべき田を有たぬ身は、母の家ならでかくるべきところなく、母の懐ならで居るべきやども無い、幸に、人の賣らるゝことは知りつれど、われ未だその價を知らず。

君よ、ねがはくば、貧しき子に、彼れの身に纏へる彼れの指に輝ける帶と指輪との數を告ぐる勿れ。

今、六月二十九日、雲裂けて太白西にあり、

天の星落ちてをとめとなる日あらば
死なんよわれは日高見の野に

己の字なりに緣を繞りて南すれば、南の倉の黑い瓦の上に、いつの夜もいつの夜も白い天狼星が居る。吁馴れにし星の光よ、筑波は其右に。

日高見の青の垣似す筑波やま
一人は在りき大天地に

嬌眸曾て流眄す、福祉吾が期せし所、なにごとぞ、往事一夢に歸して、茫々不可追

刺は花よりかくるれど
枝しなやかに咲撓る
薔薇は君なり、會ふ日より
遂げぬ戀とし思はむや

瞳の奧に正身の
俤ばかり留むとも
何せむ。あはれ、かくながら
永き別れとならむとは。

風の吹分る雲片は
明日は一つに流るらむ
戀の搖籃古里は
墓の夢見る名となりて

君が白き腕に纏かるれば
二夜とはいはじ柔むべき
涙とは知るかくながら
永き別れとなりぬべき。

ひとへに暗し、わが旅は
穴に臨むに似たらずや、
あれ見よ、搖るゝ草の葉を
遠き林は雨曇と

鳥は飛び倦んで歸るとも
われはかへらじ、いざさらば
二人は今はかくながら
永き別れとなりしなり。

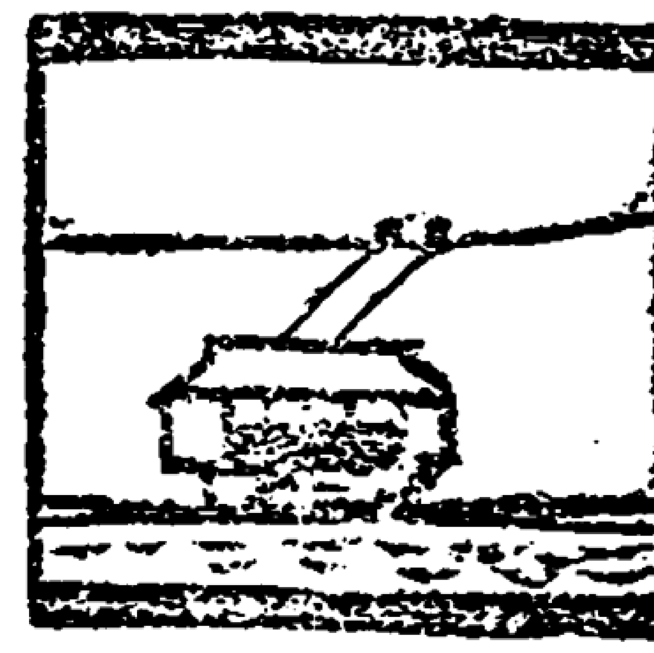
無名婦人傳

（六）父の爲に花の如き十年間の娘時代を女工となつて苦勞せしも渡る世間に鬼はなき美談

白　妙　女　（東京）

私の家の隣りのお美代さんは私より二つ上でした。親子三人切りの家でした、何日しか私とは姉妹の樣に親くしてゐました、尋常一年から、三年までは、お美代さんも幸福な一人子でしたけれど、どうした心の迷ひか其のお母さんが、お父樣と、幼い美代子さんを殘して遂に家出をしてしまひました。私も幼い時の事故、深い事情は知りませんでした。が間もなくお父樣はお美代さんをつれて、是も何方へか立ち去つてしまひました。其れから數へて見れば十年後、私は十七の歳の暮、日も覺えてゐます、十二月十七日、淺草、觀音の年の市の日でありました、六十計りの老人の手を引いて、混雜ずる人中をさけて靜かに歩く若い婦人を見ました。私は十年前別れたお美代さんによく似てると思つて突然聲をかけました、やつぱりお美代さんと其の御父樣でした。餘りのことに三人共言葉が出ませんでした、けれど御姿容から察しても餘り幸福な暮しの樣子でもありませんでしたが、其れも其のはず、重なる御不幸に父樣は不治の病にかゝつてしまつたので、是非なくお美代さんは十二の年から煙草會社の女工となつて、其の時迄八年間、病父を看護し乍らも一家を助けて來たのです。其れでもお美代さんの働いて得るわづかなお金で、親子は、細々乍ら大した不自由とも思はず暮してきたのです、と語りました、遂下谷に住居乍ら、境遇上とは言へ、十年の間互に一度も知りませんでした、女工とて何も恥づべき事はありません、むしろ私は同情の涙にむせびました。と同時に益々其のお優しき御心根の慕はしく、其れから叉ふたりは元の

姉妹の如く一そう親密の仲と成りました。其して相變らず、谷中の專賣局に通つて被居いましたけれど、去年父様はとう〳〵、御不幸にも、やさしきお美代さんの手に抱かれて歸らぬ旅の人と成りました。其の生前にも、親らしい教育もせず幼さい時から苦勞計り掛けて濟まなかつた、のうお前の優しい心根を己は何程嬉しいか死んでも忘れぬわお美代、意氣地のない父と思つてくれるなと言つては、口癖の樣に家出したお母さんを恨んで被居つしやいましたさうです、其の中に谷中の專賣局が淀橋にうつゝたので都合上退いてしまひました、けれど何日まで不幸はお美代さんについては居りません、或人がお美代さんの優しい心根に感心して、或會社の重役の奧樣に御世話なさいました。今年二十二にお成りで幸福な家庭の人と成つて何不足もなく居らつしやいます。此れと言ふのも、皆お幼い時から苦勞成さつたのが、今其の御身に幸福と成つて、來たのです、すると其前家出した母様が、お父様の死を聞いたものですから、夢からでも覺めた樣に、眞實から悔悟してお美代さんの處に來たのです。餘りの仕打小供の時から恨んでは居りましたものゝ、やつぱりそこが血を分けた眞實の親子です、恨みも忘れ恥も忘れて、互に變つた境遇に手を取合つて感涙に咽んだのです、十三年の永き涙の歷史を御存じの旦那樣は、懺悔は如何なる罪をも滅すと言ふからと御情け深きはからひで、母樣も御家にお引取りなさいました。美代何なと好む物を習へ、月謝は出してやるからとお仰るのです、けれどもうおなかには赤子さんが居るので、せめては子を生むまでお裁縫だけでもと、私にお賴みなさいましたので、敎へ申すと言ふ程出來もしませんけれど、御近所ではあり事情も何も知つて居る間柄、私は自分の知つて居るだけは、お敎へ申す心です。先頃まではお小さな其は其は、可愛らしい產衣を縫つて被居つしやいましたが、此六月二十三日、玉の樣な男のお子さんがお生れなさいました、女工と卑まれ女の弱きにつけ入る種々の恐ろしき誘惑にも打勝つて、遂に世に出し迄の、涙多かりしお美代さんの半生の物語に、縫ひさしの衣服は抑幾度か涙にしめりましたでせう、今現在の幸福なるにつけて、悲慘なる生命に終つたお父樣をせめて、今まで生して置てあげたかつた、そして此幸福なる家庭に愛らしい孫を抱いて、一日なりと安心させて、樂に世を終らせてあげたかつたと、其ばかりお嘆きなさるのも、道理なとと貰ひ涙を濺すのでございます。



若き婦人の旅行は危險なり

精華高等女學校長　勝田孫彌

夏期は旅行をするに最も好季節である。一年三百六十五日働く人間は、一年中のこの季節に一週間でも二週間でも旅行することは、心身の上に大に利益のあることである。そこで婦人も旅行しては如何かと言ふ問題が起る。既に旅行と言ふものが有益なものとすれば無論婦人も大に旅行すべしと言はねばならぬ。然し若い婦人の旅行と言ふことには餘程注意をせねばならぬことがある。若い婦人と言ふものは、生理上危害を受け易い立場に居るから、危險の多いこの旅行は、非常の決心と注意とが無ければ、輕々に實行すべきものでない、何故かと言ふに、人間と言ふものは、輙ともすれば放逸に流れ易い者であるから、殊に若い婦人は學校なり、家庭なり嚴格なる監督の下に居なければ、自分自らも亦世間の信用もよくない。それが一時旅行と言ふ放逸なる生活に移り、家庭や學校の監督から脱することは頗ぶる危險なことである。旅の恥はかきずてなど言ふ諺もある位で、旅行中は體面を重んずる念慮が薄い。自ら守ることが嚴でない、これが若い婦人に取つて最も危險なのである。旅行には斯る危險がありとすれば、この危險を冒して旅行する若い婦人は、非常なる決心と注意とがなければならぬのである。

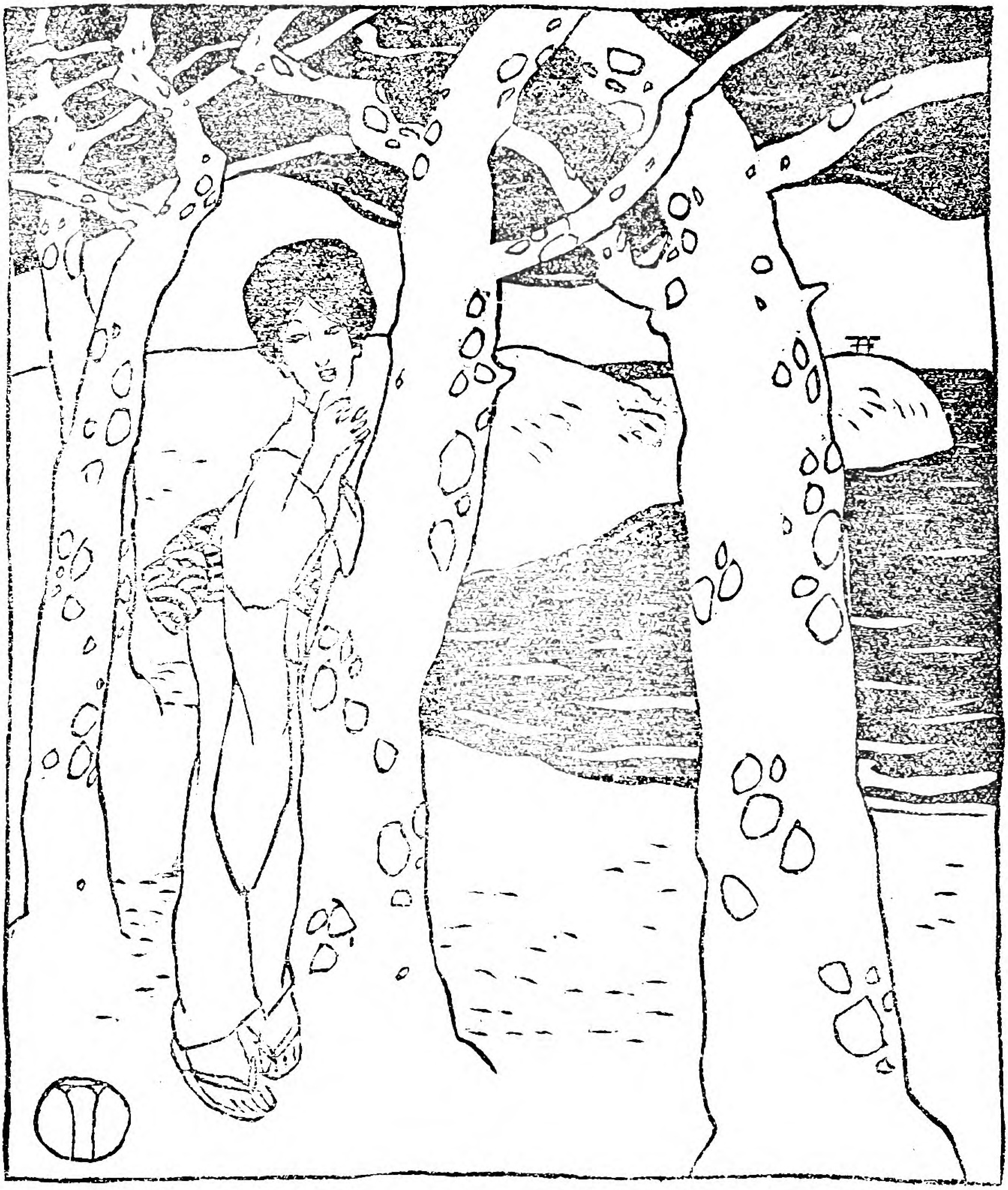
然し人間と言ふものは、絶えず他から監督されて、辛うじて體面を保つて居る樣では頗る心細い次第である。人の意志と言ふものは、他から干渉を受けずに、自由に働く時に於て始めて强弱の分るものである。こ

の意味に於て旅行は若い婦人の意志を鍛錬するに最もよいものかも知れぬ。旅行の樣に、束縛もなく掣肘もなく、自分の思ふまゝのことの出來る機會に於て、よく其の身を持してこそ、始めて人間の眞價が現れるのである。若い婦人を自由の天地へ出せば危險だと言ふて、絶えず嚴しい監督の下にのみ置いて置けば、若し監督の出來ない場合には愈々危險であるから、時には監督なき地位に置て、自ら精神鍛錬をなさしめるのも亦必要であらうと思ふ。然し斯う言ふ自由の天地に、何の掣肘もなく、何の束縛もなく、自が心のまゝに振舞ふとするには、堅固なる意志と綿密なる注意を以て飽まで其の身を嚴格にし、他をして乘ずべき間隙のない樣にせねばならぬ。

旅行は若い婦人にとつては危險ではあるが、精神鍛錬上有効なものであると同時に、見聞を廣め身體を壯健にすることに於て頗る効能がある。元來婦人と言ふものは事物を推理する能力に乏しい。何事に依らず實地に見聞せねば充分に會得せぬ、これには旅行が最もよい、何事も自ら實地に就て見るのであるから、推理力に乏しい婦人も知識を得ることが多い。又婦人は男と比較して如何しても身體が虚弱であるから、夏期の旅行期には、空氣のよい所へ旅行して、身體を壯健にするのは頗る必要であらうと思ふ。斯くの如く旅行は婦人にとつて有益で而かも必要なものであるが、前にも言ふた如く、若い婦人に對しては頗る危險なものであるから、若い婦人に旅行をさす場合には、本人に對して充分の注意をなさしめるのは固より、是非然る監督者が附て行かねばならぬと思ふ。

旅行の心得

△小さな宿屋より大きな宿屋を選べ。
△汽車の時間表は豫め心得置くべし。
△始終身の廻りをきちんとかたづけ置くべし。
△正體の知れぬ物は食ふべからず。
△登山には氷砂糖を口に含んで行くべし。
△朝は早く立ち夜は早く休むべし。
△荷物は出來る丈け少くせよ。



殘れるもの

あの松原がわすられよか。
紫色の帯しめて
松にもたれてまつてゐた
あの娘の姿がわすられよか。

その松原はいまもある。
そしてその娘もこの俺も
死なずに日本にゐるものを。

—夢二—



惡緣

そなたばかりが
女ぢやないが。
賣られてきた夜、人形を
泣く〳〵だいてそひぶしの
かみなりさまがこわいとて
より添ふたが緣となり。
そなたばかりが
女ぢやないが。

―夢二―



わが歌

ちひさき望をかけて夜をあかし
ちひさき悔をおぼえて日をおくれり
紅き窓より顔よき女てまねぎすれど
彼女がよぶは「われ」にあらずして
「男といふもの」なり。
わが心をわかつによしなし。

ともすればおかしき歌口にのぼれど
ばちをとる子もなければ
ほそ〲と市のどよみにきえゆくなり。

―夢二―



この夜ごろ

ほんにおもへば昨日今日
つんではくづすわが心。
夜は夜とて三味線の
みをすてばちの三下り。

いふてせんないことなれば
歌ふてのけよとおもへども。

—夢二—

婦人は何んな心を持つて居るか（下）

澤田順次郎

羞恥を知らぬ者は禽獸

●羞恥。これも本能的感情の一種で、はにかむことを申します。一體人は自分の缺點若しくは失策を掩ひ隱す性質がありまして、他人に之れを觀られ、又は發見せらるゝときは、心に一種の感情を生じます。此の感情は卽ち羞恥で道德の基礎です。諺に羞恥を知らぬ者は禽獸に等しといふ如く、此の心を有する者程貴いのです。然し羞恥には眞に恥づべきものと、然らざるものとありまして、無闇に恥づるのはよくありません。

婦人の羞恥心は小兒に似て居る

人の中でも羞恥心は、開化の度に依つて異なり、野蠻人は殆ど無恥で、開明人の恥づることをば平氣で居ります。恰好小兒の時は恥づることを知らぬ様に、さうかと思ふと小兒は妙なことを恥かしがる癖があります。卽ち人見識りで、知らぬ人に逢ふと顔を隱したり、泣き出したりします。此の點に於て婦人の羞恥心は頗る小兒に似て居ります。其の理由を左に述べませう。

羞恥の心理を分解すると、意識的なるものと、無意

識的なるものとあります。前者は衆人中にて耻辱を受けた時の如く、眞に慚愧すべきものですが、後者は唯だ無闇と耻かむものです。小兒の人見識をしたり、妙齡の女子が人に逢ふて顔を赧くするの類で、婦人の羞耻は人見識りなのです。

男は人中で耻辱を搔かせられたり、或は失策したりする等の外は、平氣で一般に羞耻の情が薄いに反し、女子は少しのことにも赤面するのは、其の性質の内氣なるが爲めです。

＊　＊　＊　＊　＊

智的感情　感情の第二は智的感情で又**情緒**とも申します。智識に伴ふ所の感情で、苦樂の感覺と之を惹起する原因の觀念と結合する時に生ずるものです。

情款　六ケしい文字ですが、他人に對する偏向心即ち愛憎の謂ひです。愛には性愛、親愛、友愛等があり憎には怨恨、嫌惡、嫉妬等の別があります。

男は色慾に富み、女は生殖慾強し

性愛　男女兩性の間に行はるゝ相愛の情で狹義に解すれば色情です。此の愛情の目的は生殖を達するにあるを以て、又生殖愛の名がありますけれども、生殖は色慾遂行の結果で、色慾は性愛第一の目的物なりと論ずる學者があります。故に性愛は男女に依つて異なり、男は色慾を主とし、女は生殖を專らとする差があります。ヘガール其の他學者の說に據れば、色慾に對する男の情は、女子よりも盛で、生殖に對する情は女子の方大なりと。これに依り女子の性愛は精神的で、一旦子を擧ぐれば、夫は第二の目的となるとニーチエーは言ひました。

去られても闇に見に行く幟かな

親愛　所謂骨肉の愛で、道德の根本です。親の子を愛する情は自然で、敎育に依つて得たものではありません。之を獸類及び鳥類に徵するも事實で、常に熱情を以て其の子を養育するものは雌です。下等動物中には雄は毫も其の子を介意せざるのみならず、時としては之を敵視することある場合に於ても、雌は周到なる注意と勞苦とを以て、之を養護することは人の知る如くです。人類にては父にして謂れなく其の子を惡むものは無からうと思ふけれども、之を

思ふ情に至つては母に及ばざること勿論です。されば古句にも、

去られても闇に見に行く幟かな

とあるのは、實に母の其の子に對する眞情を現はしたるものと謂ふべきです。

兄弟は他人の始まり

兄弟姉妹に於ける愛情も、親愛の如く本能ですけれども、之を親子の愛情に比すれば、頗る薄くして、本能でないと言ふ人もあります。諺に兄弟は他人の始まりとは、其の疎遠になり易いことを言つたのでせう。古來の歴史を見れば兄弟の垣に鬩いだ例は頗る多い。保元の亂には源義朝は親兄弟を殺し、頼朝は義經範頼を亡ぼし、足利尊氏は弟直義と不和で、到頭之を毒殺した例枚擧に遑ありません。



姉妹でも不和なものは珍らしくありませんが、男の兄弟に比すれば少なくあります。是れ女の情は男より

も厚いからです。

友愛　朋友を愛する情は、交際より生ずるもので、交際が密なれば密なる程、愛情が深くなります。女子は性愛、親愛に富めると等しく、又友愛の情も男より厚くあります。

女の愛國心は個人的

愛國心　己の生れた土地を愛する情は、其の原因は人々の土地を分割して所有すると父母埋骨の地たるとにあります。之を言ひ換へれば、祖先の勲功苦辛につき、將た風俗習慣につき、我と密接の利害關係があるからです。鄕土を愛する情は男女同じでありません。女子の愛鄕心は個人的にして、男子のそれは社會的です。それですから女は其の國が亡びても、自分さへ安全なれば關知せざる傾向があります。

女は正當に自己を秤價すること難し

自重及び名譽　正當に自己の價値を感ずることを自重の情と申します。此の情は己を見ること過度なる時は高慢となり、之に反して自己を認むること低いときは、卑屈となります。婦人は正當に自己を秤價する力乏しくして、自ら高く見過すか、然らざれば自ら貶するかの二者その一に歸します。女子は虚榮を喜ぶ傾きあつて、他人に褒められ、或はおだてらるゝと、直に得意になりますけれども、男子は己れの實力に添はざる褒稱は、諛諂として喜びません比較的思慮ある女でも、他人の口車に乘せられ易いのは、自重心が乏しいからです。然し眞正なる名譽を重んずる心は、女子よりも男の方が發達して居ります。

女は喜び同情し難し

同情　とは他人の境遇を自己の境遇の如くに感ずる情で、女子は他人に對して同情を寄せ易けれども、自己を中心として不幸は憐れみ、幸福は嫉む失があります。一般に女子は慈悲心に富んで居りますけれども、殘忍苛酷は却つて男子よりも強くあります。繼子苛めは女子の特性で、殺兒も多くは女子に依つて行はれます。

嫉妬は女の天性

嫉妬　とは偏揚なる感情より生ずる疑惑で廣義に言へば名譽の競爭より生ずる感情です。男女に於ける嫉妬の情は、前者よりも後者強く、

嫉妬は女性の天性といふべきものです。而して嫉妬は未婚女よりも既婚女に多いことゝ人の知る如くです。これ女の境遇が結婚に依つて單調より複雑に進み、此の際遭遇する事物は、自己のみならずそが夫の身上にも及びて、有夫の女は無夫の女よりも心を悩ますこと多いからです。

嫉妬は女が其の夫に對ずる自衞的反動力として、一



部分は子孫の繼續上即ち其の身を保護する爲に起るが故に、必要なる場合も無いではありませんが、之れが爲に却つて其の身を危うする弊害が多くあります。或る人の言に夫婦喧嘩の主原因は經濟的より起るもの即ち物質上の問題を除けば他は嫉妬で婦人の自殺又は犯罪も過半は嫉妬であると。

男子と雖も嫉妬がないのではありません。けれども

男は社交の範圍廣くして、理義に明かなるが故に、理非を悟るとも早く、且、女の如く些細なることに怨恨を含む樣のことは少なくあります。然るに女は交際の狹いのと、見聞の少ないとの爲に、些のことも大事件の如くわめき騷ぎ、其の不平を漏らす時の猛烈なるは火山の破裂にも似て、當るべからざるものがあります斯くても尙其の不平が散せざれば餘憤は忽ち頑是なき小兒の上に及んで、罪もなきに叱り飛ばさるゝことがあります。或る社會の事情に精通せる某氏に依れば、小兒の父母に對する感情は、上流では父の方が威嚴があるけれども、下流では父よりも母の方が威勢があると下層社會に於る主婦の權力の強きことが思やられます

＊　＊　＊　＊　＊

體的感情　これは本能的感情に入れる人もありますが、通例苦樂に關するので、別にした方がよからうと思ひます。

女は食べたがる

體慾　生活を維持する爲の慾で、飲食睡眠休憩等の別があります。此等は男女同一なるかといふに、食慾は女子優り、睡眠慾、呼吸慾は男子の方が盛んです。食慾に關しては、女子は一般に早く空腹を感ずるに徵して知ることが出來ます。然し女は苦痛に對する耐忍力に富んで居るから、飢渇を忍ぶことは男子よりも強くあります。

男は一般に寢坊で、朝起きが困難なるに、女は早く起きるのは、平素の身嗜みもありませうが、一つは睡眠に對する慾が、女の方が薄いからです。宿屋の女中が坐ると直ぐ居眠を始めるのは、睡眠の不足から來るもので、之を男の位置に換へれば、男は女より以上居眠りするに違ひありません。

＊　＊　＊　＊　＊

女には飛び離れたものはない

右の外、意志に關するものもありますが、是れは略します。要するに男女の心理は總べての點に於て異ひますが、男子には優劣の差大にして極端な者が多くありますが、女子は中庸で、極端なるものは少ない。それで古來男には大偉人もあれば、大惡人もありますが、女子にはさういふ飛び離れた者

はありません。附録として左に男女心意の發達の狀を記しませう。

女は生れながら女らし

男は生れながらにして男らしく、女は女らしとは誰も言ふ所ですが、其の男らしく又女らしいといふは、最初から男女の觀念を抱いて見るが故でなく、そが動作の上で知らるゝのです。或る婦人の經驗に、男兒の生れた時と、女の生れたときは、未だ見ぬ先から分るといふことです。其の言に女は生れるや否や直ちに聲を擧げて啼くけれども、男は生れて暫時經たなければ啼かぬ。それで判明ると。

又男女は母の胎内にある時から、其の母に與ふる所の感動を異にし、通常男なる時は啻に其の母の容貌を變せしむるのみならず、氣象も何となく荒くなれども女なる時は然らずといふ人があります。是れ果して



然るや否や未だ知らざる所なれども、姙娠中母の動作が胎兒の上に少なからざる感動を與ふる事實から考へても強ち俗説とのみ排斥することは出來ません。

早く笑ふ者は女

男女は生後に於ける心性上の差異は、體格の差の微小なる如く著しくありませんけれども、早く笑ふ者は女で、早く歩行するものも女ですては女の發育が男に比して早いからで、此の時から、女は女らしく男は男らしき擧動を現はし、遊ぶにも女兒は柔順なることを好み、男兒は雄壯なることを好み女兒をば蔑視する風があります。女兒も亦自ら城廓を設けて、敢て下らざる氣象盛んなるが故に、若しも他より冷待若くは侮辱せらるゝ等のことある時は、熱心にその防禦に勉め、若し自己の力の足らざるを悟る時は、他の有力者に依賴してまでも、自衛せんと欲します。之を男兒の淡泊にして無邪氣なるに比すれば、如何にも執念深いことが判明ります。

三つ子の魂百まで

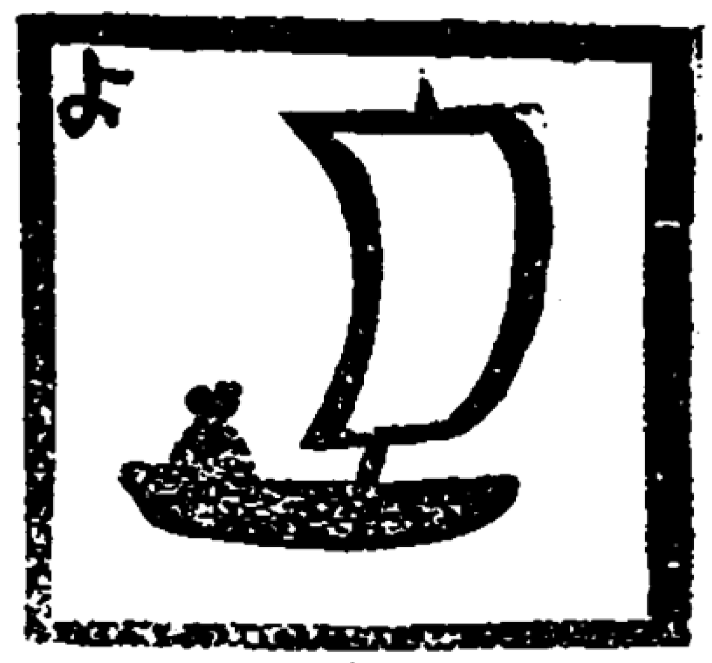
斯樣に純白なる幼心にも、猜忌、嫉妬、疑惑、愛憎、誇稱、虚榮、恐怖等の念は、常に之が小さき心を充たして、爭論の種となること珍らしくはありません。而して此の幼心なるものは決して一時の現象に止まらずして、歳月を經るも變ることなく、人と共に成長することと三ッ子の魂百までもといへるに徴しても知られます。

女性徒は論議を好む

長じて妙齡になれば、身體の發育と共に、女兒の心も大人びて、物を言ふにも將た笑ふにも氣を附くる樣になります。其の父母兄弟若しくは長上に對する擧動も、以前に換つて控目になつて、溫柔に加ふるに靜肅を以てするが故に、內氣若しくは卑屈の樣なれども其の裡面にはハキ〳〵した心が燃えて居ります。貞淑溫良で、床しいのは婦人の美德で、此の美德は婦人に斯ういふ心があるからです。

婦人の長所

婦人には缺點も少なくありませんが、長所も多くあります。即ち細事に行き渡つて如才なく振舞ひ、經濟心に富でよく物事に勉强すること等は、其の特徴で如何なる場合にも周到なる注意を拂はぬことはありません。（をはり）



感想記（二）

與へよ、然らば與へられん——吾が世の底は美しく澄みたり——愛は女の全生命——嫁と姑との間——幸福を姑に求めよ——洋裝で淸元を教ゆる若き未亡人——紺屋の若い衆——十二社——風雨雷鳴——雨宿りと詩——兄と妹——歌

日向きむ

人と生れて一番物足らなく、悲しく不快に何と形容してよいかわからぬ樣な、厭な心地になる事は、自分が此世に居るといふ事に就いて、何等の善い影響も他に及ぼして居ない、いひかへれば全然何も他人に與へて居ない生活ほど、堪られない感じのするものはないであらう（勿論さう具體的に自ら意識してゐるとゐないにかゝはらず）自らさへ知らぬ我が心の底に與へたいと云ふ要求の根ざしが、深く深く潜んで居る處に、永遠に向つてやゝに成長發達してゆく生命の芽がほの見える、すべての人類の靈魂の上には神の子といふ消しても消えぬ燒印が捺してある。

浮世の夢から一度さめて、見えない世界をみてゆく時に、えいえぬ感が胸に滿る、大人には馴れた此世の山河草木、花鳥風月が赤坊にはたゞ珍らしく不思議な物として見え聞えする樣に、無邪氣な驚異の眼をもつて見まもつてゐるあのさまが、丁度それに似てはゐまいか。

世の人が無意識のうちにも他に與むとして悶へてゐるのを知る時に、昨日まで塵の世といひ穢土と思つた此世の中の澄きつた底の美くしさに驚かざる得ないのである。此世は汚れた處ではない、我利我利亡者のさまよひあるく六道の辻ではない、矢張神の國である。妙なる香を吹く風に滿ちて虛空から不斷に華は降つて居る、たゞそれを人が知らぬのみである、見る目を閉ぢてゐるのみである、人間は自分の知つてゐるよりは遙に尊い美しい善いものであるとはコンコルドの哲人

も云つた。
人は自ら他に何物か與へてゐるといふ幽な意識でもある時には、病苦のうちにも、赤貧のなかにも、いひしらぬ慰安と滿足を感ずるのである。此平等の天眼鏡に照して一切人の世の關係を明かにみてゆく時に、夫と妻、親と子、友と友の中は勿論、古來むづかしいものゝたとへにもなり、淸女も有難きものゝうちに數へた姑と嫁のあひだにかゝつた薄黑い謎の雲、互に晴れない胸の靄さへも、共に同情すべきものがあるのがよくわかる。彼女等は生れながらに神からうけた女性の使命をあくまでも果したいといふ、靈魂の高い叫びに堪へかねて、知らず〳〵危い陣頭に立つわけである。
女はエデンの園に平和と自由を樂んだ古から、男の爲に造られた、男にはなくてならぬ第一のものとして神は女を造り給ふた、けれども弄ばれる爲ではなくて愛と生命を男に與へる爲である。すでに造られた目的がさうである故に、女の生命は愛なのである、愛は女の生命なのである。

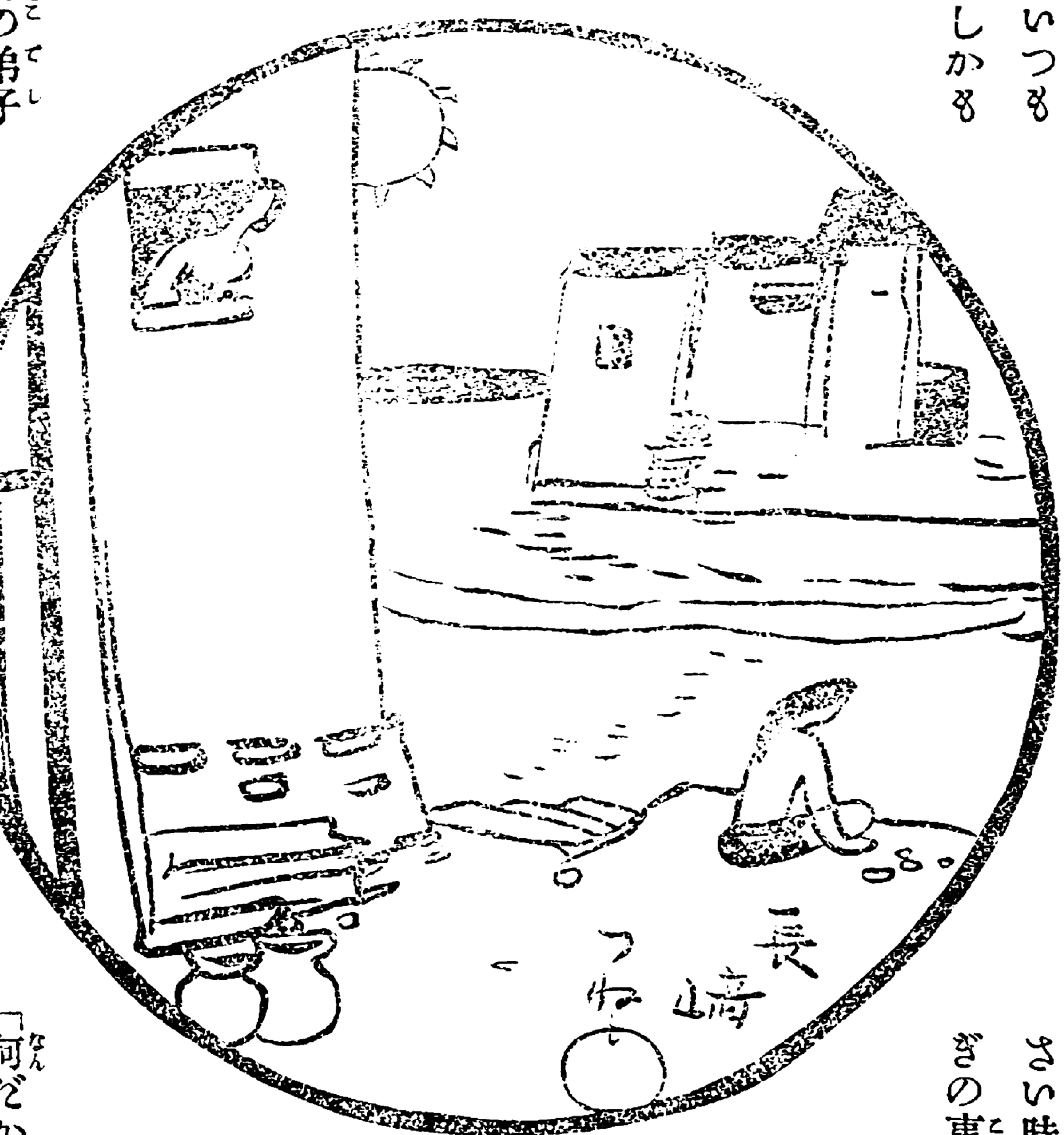
嫁と姑のたゝかひは美しい愛の戰である、より多く與へようといふ兩方の麗はしい心と心の戰である。であるから何方にも一理も二理も三理もある、相方から競爭してそゝいで來る愛の泉の重量に堪へなくなるのは姑の子、嫁の夫である、兩方の愛の流れにひをかけて同じ分量に受け入れなければならぬのである。より多く與へた方はより多く滿足する、受るより與ふる者は幸福なのである、幸福をひとりしめるのは利己主義のそしりをまぬがれぬ、人にも人の幸福の爲に與へさせてやらねばならぬ、與へさせてやる事はやつぱり幸福を與へると云ふ事である。何ものか與へたい爲に悶えてゐる姑から嫁も子息も大に與へられゝばよいのである。愛を乞へ、經驗を乞へ、さういふ立場に立つて與へらるゝものは或ひは與ふるものよりもより幸福かも知れぬ、けれど自ら我にかへつて來るものまで、我我は考へなくてもよいのである。

＊　＊　＊　＊　＊

脚氣が大變に惡くなつた樣に聞いた若い松川未亡人

を代々木の佗住居に訪ふた、床にでも就てかと思ふた夫人は起きてゐられた、いつもの洋裝を解いて日本服、しかも浴衣に晝夜帶といふ打解けた姿であつた、夫人は近く清元の指南を始められた、洋服に清元。

コントラストが面白いでせう？と此前に行つた時、夫人は寂しく笑つて云つた、床の間の端に重ねた金のふちの聖書と、赤いへりの讃美歌の本とが目立つ、子供も大人も交ぜて數へて七人のお弟子が出來た、此間まで男の弟子は一切斷つて居たけれど、近所の紺屋の主人と店の若い者が人を持つて再三弟子入を



したいと云つて來るので、ゆるす事にしたとの事、小さい時に聞いた落語の華族うなぎの事を思ひ出してをかしくなつた、「矢張先生とよぶのですか」

「イヽエもうお師匠さんになりました、」清元の先生は如何しても似合ない御神燈をさげる方がよいとすゝめられるが困つたものですと夫人はいふ。

「けれどゝうせ御けいこするなら仕方ないからさげていゝでせう、さげなくてもいゝけれど」

「何だかさげるのも妙でね」と夫人は笑ふ、紺屋の若衆がお弟子になつたらいよく\お師匠さんらしくなる、神田祭や、

夕立の三味線とは心もちあとさきになつた、唄の聲が二三人揃つて洩ると、本當に何だか清元らしくなるだらうと思つたら、外から内を見ようとして軒にたゝずむ呑氣なおかみさんや、子を脊にした守つ子の姿まで見えて來た。お米のはなしや教會の話はもうよしにして、あひの手の一寸夕立にまちがひさうな「おさん茂兵衛」を二人で浚つて、次に志ず家を訪ふた、御主人は御留守であつた、唐茄子の黄色い大きい花が田園の歌をうたつてゐる、古の武藏野の細道を辿つて、水なつかしい十二社の處まで來ると、怪しい黒雲が被さる樣に下つて來た、嚴島の長い廻廊を思ひ出させる小さな橋を急ぎ渡つて、社の方へ眞直に來て、左の方の石段を降りようとした時は、四邊は急に暗くなつて、フエリーランドから吹いて來る樣な嵐のかせが、私まで吹き飛ばしさうに襲ふて來た、神寂びた杉の大樹の並木のひまから、明方の樣な空が物凄く光つて、雷鳴ははげしくなつて來た、ポツリ〳〵と大粒が降ちて來たかと思ふうちに、恐ろしいひぢ笠雨、わざ〳〵此處へ參詣に來たらしい四十餘りの田舍者らしい妻君を眞先に、洋服の若紳士、大きいひさし髪の新夫人らしい人ふろしきを背負つた小さな小僧、かんから團子賣る老爺どの、アルミニユームのお辨當箱を紫のふくさで包んで小さい本と傘を手にした私とも、都合六人、社のきざはしを馳け上つた、雨はいよ〳〵降つて來る、左手に見える狹い石階を泥水が大瀧の樣に落ちる、風はうなる、雨は叫ぶ、夏の自然は大活動を始めた。

同じ軒端に雨宿りしても、みんな沈默して地面をみつめて、うづくまつてゐる。私も手もち不沙汰だから手にした本をひらいて、折にあへばいとゞあはれな雲の詩をよむともなく讀んでゐると、

「濡れて終ふ」といふ人聲が雨の音のひまから聞えたふと目をあげると向ひの神樂堂の軒下に、白ガスリに袴着た二十四五の青年と、二十二三の妹らしい婦人とがイんでゐた。

「ゆきませう兄さん」と云ふとおもふと婦人は篠つく雨の中を、傘なしでかけ出して私達の居る社へついた

私の腰かけてゐる前の欄の處へ立つて、神樂堂の下に立つてゐる青年をさしまねく、頭から耳のあたりに雨雫が垂れてゐる。

おとなしく立つてゐた青年はこつちを目がけて馳け出したと思ふうちに飛鳥の樣にヒラリとばかり、欄を越えて廊の上に飛び上つた。

「まあ！」と妹が顔をみると「何？」と兄さんはすましたもの、「隨分獰猛に降るねえ」妹は笑つた眼でなつかしさうに頼もしさうに兄さんをながめて居た。兄妹はいゝものだと思つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

旅人のわけゆく小野の夏ぐさの
　そよ〳〵さらに物おもへとや
露ふかき野邊の草戸の薄明り
　かすかに君がすむ庵やこれ
身も靈も夢も白妙の歌ひめて
　あるじや待てる床の白百合



小暗き窓より

望月れい子作

五月雨時が來た。眞青であつた紫陽花の蕾が次第に鳩羽色を帶びてきた。音もなく細い霧雨が來る日も、くる日も煙つてゐる。

澄むだ、滑らかな露の漲つた、美しい櫻桃や、不透明な甘い汁の充實した苺等、それら初夏の果物が、ギヤマンの器に盛られて、机の端に置かれた時、紺蛇の目に注ぐ雨の響に、聞き入りながら、濡れた高臺の街を歩む時、しつとりした、六月の永雨の懷しさに、やはらかく胸は蔽はれるけれど、雨降るまゝに靜乎と暮れて行く夕、私は恰も、憂鬱病の樣に氣が滅入てしまふ。

書物を手にするのは懶し、こんな時には、と柱に掛つた細棹に眼を附けても、緊張した三絃の彈かるゝ音響は、薄暗い現在の心を、反撥されさうで、やつぱり手に觸るゝ氣にもなれなかつた、せう事なしに、じめじめした緣の端に佇むで、土に吸はれて行く雨の脚を見るともなく、無意味に視線を投げてゐると、白丁木の枝の上に、つぶらな瞳を見張て、絶えず、チ、チと囀つてゐた雀が、白い小さな葩を、ハラ〳〵と蹴り落して、スッと拋物線を畫いて飛び去つた。生物の活動が靜止した小庭に、夕暗は押よせる樣に迫つてくる。血の樣な花を持た柘榴の細い幹に傳はり、葉に流れて重さうに、その尖端を辷り落ちる、透明な銀色の雫が見る〳〵、濕地に、泌みて仕舞ふのを私は凝乎と見つめてゐた。——暗い壓迫を感じながら。——

座敷には未だ燈火が點かない、濡れた青葉の反映に我手足のみ、蒼白く暮れ病むでゐる。私はまるで古井の底に沈むでゐる樣な苦しさを味はふのであつた。

ボ……ト……リ……と亦露が落ちる。——かうした氣分を感じる時いつも私は、アンドレーフのラザラス

と云ふ短篇を思ひ出さずには居られなかつた。

『墓石の下で三日を過したラザラスと稱ばるゝ男が不思議にも甦つたので、友人知己が一夜宴を設けて彼の爲に祝盃を擧げた、けれどその宴の半から、席に連なつた人々は何故か、迫らるゝ恐怖を覺えて盃の數も重ならず、奏樂も斷絶がちに、その宴は興もなく果たのであるが、その後ラザラスに近よる者はなかつた。彼は終日彼の住居の前に端坐して、石像の如に身動もせず白日の光に曝されてゐた。濕つた墓の土に埋れてゐたラザラスの身體には、人々を恐怖せしめる死の烙印があつた、彼の唇は眞紅に糜爛してゐる、彼の肉體には手と云はず、顏と云はず、紫黑色の斑痕が殘されてゐた、それのみならず彼は啞の樣に一言も發しない、そして凝乎と彼に凝視らるゝと、誰も々々、不思議に心の底から身震ひが出た。彼は太陽が砂漠の地平に沈むで行く時狂した樣に立上つて、重い足どりで何處までも落日を逐うてよろめいて行く。

後年、彼の眼は、ある王者の爲に拔かれたけれども二個の空虛な穴を持た、彼の顏は寧ろ人々を戰慄かしたと云ふ。』

彼を怖れた人達は死を恐れたのであつた。――薄暗い死の運命を。――私も、私も、うす暗い緣先に獨佇むでゐると死を語るラザラスの瞳が凝乎と心に迫つて來るのを怖れる。

眞紅な海洋の落日に心吸はれた時、劇場内の强烈なアーク燈の光線に若い姿を映し出された時、我が唇に上る詩は『死なまほし、このうれしさに死なばや』の二句を繰返してゐるけれども、興奮の歡喜が消え去ると同時に、我に來て喞々と私語くものは薄暗い死に向つて歩みつゞくる生物の運命である。――あゝ私は何故斯も咀はしい悲愁を感じるのであらう。緣先に釘づけられた我身を、くる／＼と兒戲の如に轉回させた。そして障子の側に坐つて眼を閉ぢて仕舞ふた、私の頭腦はこの可笑しな動作の爲に暫らく混亂してゐる、走馬燈の影畫の樣に坐してゐる所も、自分の身體も、遠かに廻つてゐる。私の目先には、紫、青、赤の小さな光の輪が無數に湧いて閃めいて居る。私は再び愁訴する雨の音を判然と聞き得る迄に、座敷の瓦斯のマンルが青くほのめき出で、咀はしい夕暮が戸外に放逐さるゝ事を、專念に、願つて居るのであつた。――

恣に泣いた後の寂しい天に斷々の雲の流るゝ夕暮

黄疸色の夕陽の光線が、思ふさま、水氣を含むだ青苔の上に遽と徐かに投げられる、それがやがて、薄暮の仄白い明りに、まぎれて仕舞ふ頃、微に、顫へ來る南風に、竹橋兵營の喇叭の音が傳はつて來る。山の手なる我家の周圍には、蚯蚓が嘆き初むる、格子に凭れてアンダンテなその哀調を耳にしてゐると、何處かへ、何處かへ……彷徨ふて行きたくなつた。

思へば私は何と云ふ痴鈍な女だらう、我情緒の動くまゝ興奮と、その反動に浮きつ、沈みつ、半夜死の影に戰慄されたり、ストオヴに投込まれた燃料の如に熱したり、……そのとりとめのなさ。『頭は雲に入て居て足は地についてゐない』と云ふのは私の樣な人間であらう。未だ思索し了らぬに早くも馳つて行く强者、寧ろ眼隱された馬車馬の如な人間に生れたかつた。

只私には唯一の幸福（？）があつた、或時以來私はそれを痛切に味はひ得る樣になつた。

それは矢張り、六月の雨降る夕暮、二つ歳上の友と語り疲れて默して居た。友はある事情によつて起つた悲痛を訴へ、私は言葉の限り慰めた揚句であつた。けれども友は私の言語によつて慰安を得なかつたらしい、やつぱり悲しい表情をして折々嘆息した、そして夜の明けぬ樣な心持を殘して、燈火の點く頃歸つていつた。私の眼にはいつまで彼女の帶の白つぽい秋草模樣がのこされてゐた。彼女の悲しみは世間にあり勝な悲哀であり容易に解決のつく悲愁であつた。――けれどそれを客觀し得ず、乃至强く主觀に訴へ得ない彼女にとつては假に私がその境遇に置かれたより、以上の苦痛であらう。私の心は貧弱であつたけれど、私には味はふと云ふ事と、うたふと云ふ特權があつた。……かう思ひ續けた時、我手と手とは無意識に握り合つた。私は幸福を意識したのである。私の××はそれが低調で、無價値で、假令何人の胸にも共鳴し能はずとも、それが寂しき旅人の慰藉で、私の生命の力である。

××――よ若年にして貧弱しい私は明地にその名を呼ぶ事は面伏なのである。――死ぬる日まで私を見捨てゝお呉れでない、我歡喜を、勿うばひ去りそ。！





桔梗ケ原（一）

太田喜志子

お鈴と、
紅くしなやかな、ゴム櫛を日光に透して見た、どのやうな懐しい姉達と、いつも白い眞綿ばかりむいてゐられた祖母や、黒く艶ある前歯と眉の剃りあとの青かつた母親との他には、あまり他人に馴染み得なかつた七八歳までの私の世界。

正木、萬年青の果に依つて珊瑚の名を忘れなかつたのは六歳の春で、一の姉が嫁ぐといふ事を知つた前後であつた。

庭の奥、土藏と板倉とのあひだにたゞ一株の黄梅の木があつてその花の咲いたのを見つけ出したのもそのころで、お鈴はよく唄を謳つてきかせた。

朝日のキラ〳〵射し込む閨の戸の節穴に指をあてゝ「血い眞赤出たなア――ア」と虚泣して見せた事などあつた。

縁先には、永年祖父が飼つてゐるといふさま〴〵の小鳥の籠が吊されてあつた、暖い日光を浴びては囀つてゐた。

二月すゑの黒い土…その濕つた上に、またも深い雪が降つて、野には頻りに小銃の音がきこえ、山から來た渡鳥は群をなして逃げまどつた、見渡す木々の梢は重々しく枝垂れ、つひ近くの松林からは幹の折れる音がいたましく聞えた。

雪の夜はまた格別であつた。

物音一つない夜――實際の死のやうな――たま〳〵にポトポト……と、みゝづく羽ばたきのやうな音がすると、「アレ！、雪降入道が泣く兒を探し歩くのだ」と祖母は横抱きにして炬燵の中へ抱へ込んでしまつてはパチ〳〵と花札遊びに餘念なかつた。

横になつてゐる頭の上は小さい窓になつてゐたのでじいッとして耳を澄ましてゐると、ポト……ポト……としのびやかに聞える。それは枯枝に盛りきれなくなつては落ちる音で私はその音をきいて、甘へたい心持

がしてならなかつた、十二月から一月すゑに降る雪のやうな無慘なものでないのがそのころの私にわかつた
風もなく、しつとりした雪の夜、水氣を帶びてゐる雪、あの、妙に嚴しい物の凍てる音はなく、すべて打ちひろげられた世界へ、甘へつゝ、甘へつゝ、降つてくる積つてゆく……といふやうな、そして、そのかげには打ちとけた自然の親しみがある、と思はれた。そのポトポト……といふ音は、靜かな枕にひゞいた。そんなかすかな、氣味のわるさうな音のやうであるが私にはその夜の氣分を永く忘れる事はできない。

朝、目を醒して見ると、雪はやむでゐた、そして軒端にはそここゝに不可思議な物のあとがついてゐた、正直な祖父さんは、雀の翼のあとだ、と敎へてくれた雪の積つた柔らかい地上によく注意する人はあの奇妙な翼のあとを必らず見る事であらう。

手洗鉢の傍にあつた柊のこんもりした蔭には、名知らぬ小鳥が、チ、チ、と鳴いてゐた。

南天の果は赤い雫のやうに、こぼれてもゐた。

しみぐ\と身に泌みてゐるが、さうした大雪も、どんよりした日光と、柔かい南風の吹き出したのとで雨垂が引切りなしに落ちて、みづくしい氣が野山をこめると、もう堪えかねてゐたやうに雜木林の方からはさまぐ\の小鳥が囀り出して淡いみどりの空氣の中にたゞよつてゐた。

「……ぬれてもまゝよ、おちてもまゝよ……おばさんのお使ひに、今々出やる……」

をくり返しくり返し唄ひながら、雨垂に肩をぬらさぬやうに出入するのがおもしろく三尺の軒を往來した

その緣先の雪も、泥がとび散つたまゝだんぐ\消え去つてゆくと、庭に下駄の踏み心地よく、雨垂が作つた小さい渚には、白く細い湯氣が立ちのぼつてゐて、小鳥の翼にでもはね落されたのか、粟が小さいみどりの芽を擡げてゐた。

そればかりではなかつた。青垣の根方、さまぐ\の陶器の破片の打ち棄てゝある躑躅藪のかげに、牡丹の果生えがヒヨロくと紅い二葉と白い根とを見せて危うく頭をもたげてゐるのや、濠ばたの日あたりに、つつましやかに黄いろい花のかたまりをのぞかせてゐる蕗の薹などを見つけ出しては、その度毎に、黒く濕つてゐる土の有つ溫かさと、惠ましいやさしさとをなつかしく思ひ、此の土の中にはいかばかり不思議さのひそんでゐるものであるかを考へさせられた。

けに忘れられない、黒い土に青い芽生え‥‥。柳が銀鼠のやうな花をつけ、つゞいて連翹の黄なのや黒もじの白い花などが、枯野をいろどりはじめると、小川の淺瀨には去年のまゝ枯葉は泥にまみれて沈んでゐる、がそれをむぐつては小さい魚がチロ〳〵泳ぎ出だした。

それからまた、なつかしいものゝ一つは路であつた、市街へゆくにも、山へゆくにも必らず松林を貫かなくては出られない。

田圃を踰え、草原をよぎり、また河に添ひして、あやしいうね〳〵みちは縷々として白く、果てはいづれも山の裾へ消え入るのであつた。



「母さんが丈夫になるお藥」といふので忘れがたくあつたサフラン、それからコップ共に竹藪の中に棄てられた時分は、ます〳〵蒼い顔になつて仕まつた母が、ある日俥に乘つて市街の病院へ往つた。

私と弟とは、土手にパン〳〵草を摘んでゐた。

その上を搖られ〳〵草上の母は、「お土産を買ひに往つて來ますよ」と見下した。俥は黒く光つて往つた。

「男の兒といふものはこんな處へ來るもんぢやないよ」ッて衣裄によりかゝつて小袖の裾と襟とを

重ねてゐた祖母は兄を睨めた。
頸すぢがきわどく白くお化粧の出來上つた一の姉は口をすぼめて叱られた兄を見やつて笑つてゐた。
赤い提灯、荷馬、黒く艶々しいお籠、鉢巻をして印袢天を着て泥醉の人共、
そんな人共の中に一の姉は唯一人、赤い布團を敷いてお籠に乘つた、チラ〳〵チラ〳〵と髮かざりは鳴つてゐた。
ヨーイトヨ――……コリヤ〳〵、花嫁御はなア――エ、……
千鳥足に擔ぎ出せば籠はギーシギーシと鳴つた。
玄關から木戸まで、赤い灯に照らされた赤い顔の幾人かは思ひ思ひの事を言ひ交して立ちさわいでゐた。
私は誰の背にゐたかおぼえてゐないが、木立さびしい村はづれの田圃みちにさしかゝつた時、二の姉は「私ね、泣く場所に困つて暗い廊下の一番奥に往つて泪を拭いてゐた」と云つた。
「お姉さまはねエ、お籠にお乘になつてから泣いてゐらつしやいましたよ」と一人は云つた。
私は唯、わけもなく淋しくなつた、荒々しい男共に擔がれて……赤い布團敷いたおねえ樣は、一體どこへ往くのだらうか……、皆、うら淋しい顏をしてゐるのでなか〳〵思はれた。
ア、あれがおかでの灯だよ、あれが、お峰の俥の火だよ、と云つて皆立ちすくんでゐる。
もう見えなくなる……あれ、あれ、
その聲がどんなに淋しくきかれたか、
他の事はしらない、しらない、私はたゞ泣き出した、恰度足もとには、小さい川が流れてゐて、夕闇に光つてゐた。

仲よしのお鈴の家はつひ近くの柳林の入口にある一軒家で、水車屋をしてゐた、父親といふのは、北の山家の酒造家男であつたが日ごろ思ひ合つてゐた同家のおこうといふ婢を連れ出して來て、其處に落ち付いたのだといふ。お鈴は、伊代松、留次といふ二人の兄があつた、二人共揃つた放埒者で、大の働らき手でもあつたが、留次の方は早くに家をとび出してしまつた。
秋の收穫がすむと、もう間もなく正月といふ夜の永くて遊び事の多い期節となつて若い衆の誰れ彼れと夜あそびの樂しみにどの位耽り樂しむ事であつたらう。
伊代松も眞先、その一人であつた。

トカ〳〵とした赤い焚火は艶ある杉戸に映つてゐた
私は、一人ぼんやりと炬燵に寢ころんでゐると、伊代松の大仰な唄聲は賑やかにあたりをしづめて、遠く林の方へ、あの鳴瀨屋のある街の方へ消えて往つた。
「伊代公もよく根氣がつゞくのう、あれぢや、鳴瀨屋でもたゞぢや置くまい、……その話の娘といふのはいくつだとへ」
と、母さんは肩をもんでゐるお鈴にたづねた。
「十九だつて云ひますす……それにもう、たゞの身體ぢやなくなつてゐると云ひますから……
……。」
ある夜、そんな事を談し合つてゐるのをきいた。



蒼ざめ果てた顏はしてゐても、終日勝手元に立ち働く事の多かつた母が、夕方になると子守の手にすらどうも仕樣のなくなつてくるやんちやの弟に、立ちながら乳を含ませてゐて唄つたうたのあの悲しいトーン、
私は心がじれ〳〵して來て耐へられなく、ひとり濠ばたの葡萄棚の下に往つてすくんでそれを忘れようとした、そこには、大蔄が寸にのびてゐた。葡萄の葉はまだ若く、みそらの星も仰がれた、そして、リリリ、ヽ、ヽリリリヽヽヽと絕えてはつゞき續きする、ヽ、ヽケラのあの陰氣な啼き聲、その上まだあるなしの姿をした蝙蝠がてゐばかりは鋭どく頭の上を飛びまはるのであわてゝ三の姉のゐる中庭の方

へ走せて行つた、そこには兄と二人して杜の妖怪の談をしてゐるところであつた。

あ、あ、と耳を澄して片足づゝ上げては、しのびしのび、少し身體をのめらして、じッとしてゐるのに私も恐る恐る耳を澄せば、程遠くない柳林の方から不思議な叫び聲がきこえて來た。

あれ、な、あれよ、きこえたか。

と、はじめて兄はふりかへッた。

三の姉にもきこえたといふ、猫の苦悶する時のやうな、また、赤子が誰かの手に壓迫されてゐて漸くしぼり出す聲のやうな、底暗いさびしい叫びが二度三度と同じ調子に低く低く消えゆく…。

三人はじッと立ちすくんで仕まつた。

その時私は、灰色といふ事を感じた、自分も、自分の周圍も…。

そして、その底暗い叫び聲は蒼黑い一ツの線を自分の心の前にひいて行つた、と思はれた。

稚ない稚ない私の思索は、實に不測な働きを有つてゐて、時折あやしい幻想界に引き入れた。

「片手あぶない…」私は、握られてゐない片手をどうしようと叫んだのであつた。

ぬす人

原田琴子

はし近く出でたる時にわれぬすむ人をもあらば美しと見む

泣かましはゆるすべからぬ戀をする憎き男の來ずなりしこと

花となり見知れる男ことぐにいと心地よく散らましものを

別れんと聞くはうとましいやはての飽きたる時と捨てゝいに給へ

あかさましかへらじといひみじろがすおしむ人なき宿の月かな

かたはらに源氏の君のおはすかとかへり見らるゝ夕月夜かな

君が捨てし石を拾ひてわが玉と愛づるがごとき

あぢきなき戀

「君とわれ」このへだてこそかなしけれおゝとこしへに二人なるかな

かはほりのおどけ姿も時によしわが變心のおもしろきごと

糸切れて風船のぼる心地よさ天地の謎解しごとくに

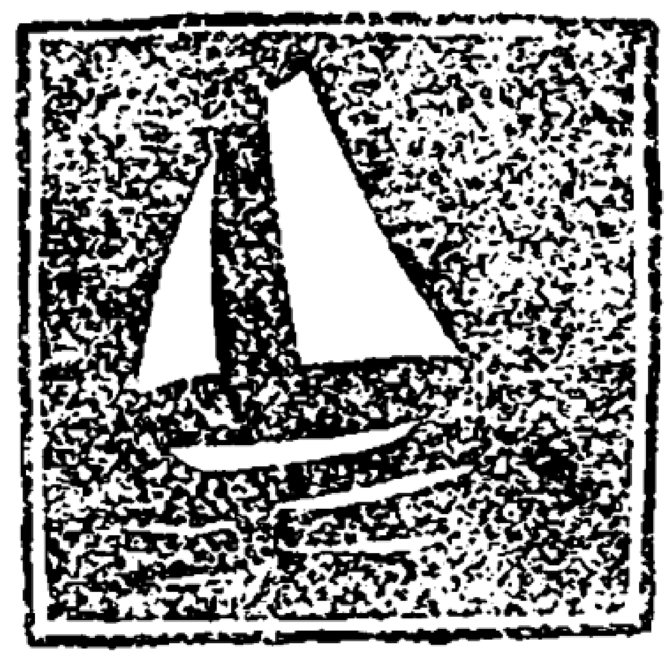
こればかりおのが心にさからはずすなほなるかと戀をさげすむ

わか上に明日をたのむは新らしき男をまつに似たるものかな

やはらかき昨夜の枕をまた羞ぢぬなまあたゝかき白百合の前

男をば知るゝ知らぬとわが上に小さきことなりあへて思はず

彼の男海に入りきと世界みな海となるべき心地するかな



夏の海

花山院貴美子

ハタ〳〵と、枕邊近く窓を打つ青簾の音に目が醒めた。白い寢床の上に仰向になつた儘、硝子越に見るともなしに外の方を眺ると、桐―櫻―コブシの葉が、互に抱き合つてしつくりと密接した、其の隙間から淡碧の空が瞳の中へ溶けて入りさう。

夏！夏！夏!!!。夢の樣に幻の樣に、斯う思ひながらガバッと起ると、何となく急に眼界が展けて、如何にも夏らしく凡てのものが、スガ〳〵しい感じを與へる荒いネルの上へ銘仙の袷羽織を引被て、裏から海の方へと出る。ザク〳〵と白い砂地つゞきの松原を、通り拔けてとある松の根株へ腰を下した。

太陽は未昇らない。海は一面靄に掩はれて遠く烏帽子岩の邊、次第に薄れ行くよと見る間に、ギイ〳〵と一艘の漁船が櫂の音高く、靜かなる曉の大氣をゆるがして、かなたへと去つて仕舞つた。

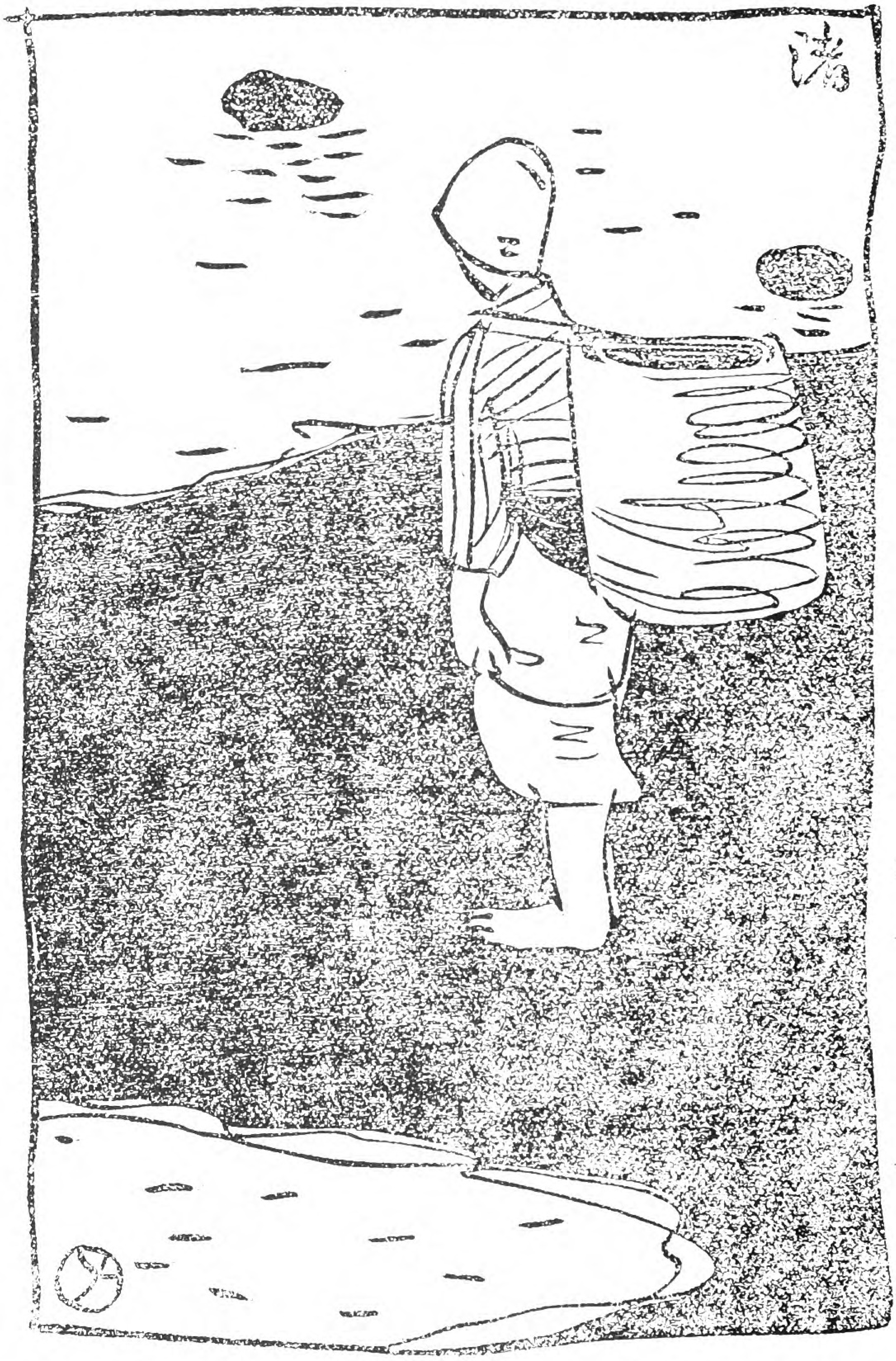
松並木の間から漁家の朝餉の煙が、スースーと上るかと思ふと消えて行く。小さい波にヒタ〳〵と私の直ぐ足もと近くまで寄せては返して行く。露を含んだ月見草が危ふく草履の傍でうなだれて居る。おゝ可憐なる花よ、私はソッと摘んで口に接吻た。

漸くわれかへりしローマの、昨夜取り忘れたリボンが頸元ふかくはいつて、後れ毛がハラ〳〵とほゝへかかる、未來永劫に何處より來りて、何處へ往くか。うねりうねる大波小波よ。深い眠から醒た樣に驚きの瞳を瞠はつた私は、再びその波の行衞を追ふた。

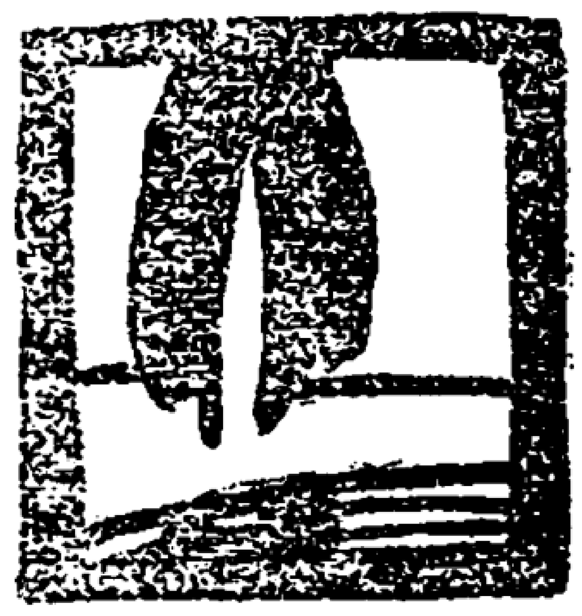
去年の夏は武藏野の城北隅の一寮舍に、病氣で殘つた友と單調なる佗びしい生活をしたが、今年もまた茲南海の漁村で、この夏を送らうとしてゐる。生母の樣に懷付いた乳母夫婦と、お澄ちやんと云ふ此の春小學校を卒業て裁縫のけいこに通ふ娘限り何も知らぬ友だちは羨むけれども、都を離れたこんな淋びしい片田舍に、何を好んで暮らさう何人にも語り得ざる此の胸の苦痛、私の心は絕えず物足りない。ある時はたまらず人が戀しい。

此の頃は大方の雜誌は讀み飽きて、毎日お澄ちやんを相手にして子供みたいに遊んでゐる。

かういふ時には琴でも習ひたい、鼓も打ちたい、あれ程惜しがられたのに、たうとう一つも習ひ終せなかつたのが、今更口をしい。傍にあつた机の上からハーモニカを取つて、吹き初めたが動悸がせわしく、息が詰る樣になつて仕舞つた。ソッと體温器を出して量ると七度五分、今朝より二分ばかり上つた兩の袂を胸に抱いて鏡に寫つる、わが姿を見たときは知らず、私の瞳には熱い涙が湧いた。



何人も願ひて容易に得難い母の血と、語りに熱ある父の血とを繼承いだ此體を、青春き時の戀まざ〳〵と朽ち果てしめるのは惜しい。さらでだに此小さき胸には秘められる幾多の想ひあるを。呪はれたる肉體よ、私は此後何な運命の下に生きてゆくであらう。あゝ夏の海はひろ〳〵と輝いてゐる、なつかしき自然よ、永へなる自然よ。



丹波路

笹野露子

『鬼は丹波の大江山』といふ、其丹波にも春は回つて來た。

たらやの葉といふ。小さな螢火で字なり畫なりよく子供が書くので、「繪かき葉」ともいふ、春のころ芽を吹いて、大きさは柿の葉ほどもあらうか、色青黑く、形はゆづり葉に似てもつと丸い、この厚い青い葉はよく火を吹くので、近火があつても幾分か防げるといつて、曾祖父が隣家に近いとこへ植たのだといふ。

裏門の方へ十歩ほど出ると、水車小屋から白くなつた米を箕へ入れて母が出て來た、氷は解けて筧の水が勢よく落つるやうになつてから、ギユーゴトン、ギユーゴトンと絶えず靜閑なる日に車は動くのである。たらやの木は小屋の屋根を隱すまで茂つて、大きな繪かき葉の青いのが、又がんぜなき子らにむしらるゝ時が來た。よくこの筧の上に、蕗の薹のたけたので、まねの水車をこさへた。水が多過るといつては、繪かき葉の落ちたのや、芝草の刈つたのやを寄せて石を載せ、土をかけて、堰をしては叱られたことがあつた。溝には芹がほきてゐる。

丸い大きな桑の根つ子が物置の軒に埒もなく持込んである、可愛らしく開いた蕗の薹の上にものつかつてゐる。珍らしい暖い日。

父はどう氣が變つたのか、桑の根つ子を表の方へ運んでは割つて、山吹色の木肌の美くしい、新らしい香のしさうなのを、日當りのいゝところへ並べてゐる。

私はいつかたらやの下を過て、たら池の縁に立つてゐた。覗いて見たけれど、それらしいものは見えぬ。鯉がかこつてあるのだけれど。

葡萄の棚が風で倒れて、池の中にもふちにも、狼籍たる樣をなしてゐる。なほさうといつても、延びた蔓を切りはらつて了はなければ、出來ないので、それも惜いと其儘になつてゐるのだ。去年はこのまゝ大分生つてゐた。けれど林檎は生らなかつた、ことしも生るまい。花は咲くのだけれど。

枝垂柳が、幹にも枝にも黑い苔が生えて、風もないのにおびえたやうに慄へてゐる。やがて芽をふくであらうか、あゝこの柳の緑に烟る頃には：：：

突然後の方から唱歌がきこえる、振り返ると幸ちやんが繪かき葉を溝で洗つてゐるのだ。いつも宇ちやんまで出て來て向側にしやがみこんだ、着物が合はないので、お臍まで出てゐる。「宇ちやんお婆さんにおいも貰ふたね」といふと、につこり笑つて、首を振つて、して踏んでゐる。手と口のまはりが黒い、縞の胸前だれには灰がついてゐる。

木戸を出た、枯草の間に赤味がゝつた、柔かさうなゲシ／＼の葉がもう生えてゐた。よくこれを洗つて鹽をつけて竹の皮に包んで「漬々」をしたものだけれど……それは十何年か昔のわれらである。今の子は喰べない。

たんぽゝが一つ、地べたにしがみついて、さいてゐた、莖は延びてない。麥はやつと一二寸延びたばかりまだひばりの冬籠の夢はさめはしまい。

わざと畔から飛んでは泥田の中へ草履を吸ひこませたり、土の黒い畑のくろへ這ひ込だり、猫の啼き眞似などして二人ははね廻る。

きれいな、枯芝生の上に腰を下して、幸ちやんを抱て短かいお下髮の尾を頰に當てゝ唱歌をうたつてゐると、向うの畔を、髮の赤い十一二の女の子が小さい籠下げて行く。どこの子か、叮嚀におじぎをして、しつけも偲ばれて床しく思はれた。

蓬は大分大きくなつてゐる。臼下でとつた粉米で、團子をするのに入れるのだといつて、早くから蓬をつむ子があるので、私もたまらなくなつて、摘で見たこともあつたけれど、お節句が卯月八日のお釋迦樣の日でないと草餅を搗かぬ家風なので、空しく干からびさしてしまふのが、たまらなく、くやしかつた。

「一寸お尋ね申しますがえ、あの紅井のでんげんさんへ詣るんですがえ」五十位の婆さん、「權現さんはね、そこの土橋を渡つて山べりを、右へ／＼と行けばひとりでに行けます」「ハイ／＼どうもあんた、おありがたうございました」といつて紺の「たちかけ」の不恰好なお尻を振つて、二三間先に待てゐた、三十位の女に「あのよ、やつぱしこゝを上るんぢやとよ」といひつつ先に立つて行く。娘であらうかお腹が大きい。十里も二十里も、泊りがけで安產を祈りにまゐるのだ。目と鼻の先にゐてさへ、なか／＼詣れないのに！



耳袋（八）　猿丸太夫

△（ロシアの皇后陛下の話、つゞき）此時傍に佇んでゐた一兵卒が、皇后の御耳に口を寄せ「たはけた奴です、彼奴は賄賂が欲しいのですよ、全くそれに違ひありません」とさゝやいたので、侍従は早速五十コペックの銀貨を巡査に握らした所が、巡査の今までの權幕は何處へやら、俄に愛嬌好く笑顔を造り、ペコ〳〵頭を下げて「奥さま此は痛み入ります、さあ何うぞ此方へ」と先に立つて上等の席に案内した、自慢ではないが猿丸太夫も活動寫眞といふものは未だ見たとはない、確に双つの眼はあるんだけれど――

△越前家の若君を迎へようとして、德川一家の反對にあひ、三島彌彥さんをお聟さんにしたのは誰あらう、當代富豪の一村井家のお孃さんです、さても其後奥樣が何かお氣に叶はない事があつて、御機嫌の惡い時には旦那が優しくお慰めします。奥樣の御不平は大抵他家の奥樣が旦那樣からチヤホヤされてゐるのに、家の旦那樣は、妾を可愛がつて呉れないといふやうな事で下々で言へば痴話喧嘩といふのでせう。併し實際は旦那樣が奥樣にお優しくなさる事は實に勿體ない程です、それでも奥樣はまだ御滿足なさらないのです。併し御夫婦の仲は睦まじく、毎朝お起になると、お二人でお手を引き合つた儘お湯殿にお入りになります、お湯殿の御樣子は詳しくは判りませんが、兎も角一時間半や二時間といふものは何うしてもかゝります。御入浴が濟んだと思ふと、今度は又お二人で化粧室へ入られます、これがザッと一時間はかゝる……われこれを不如歸の歌に聞く、早く歸つて頂戴なと。名にし負ふ川島武男君の令弟だけあつてお羨しいわけでございます。

△大日本蠶業雜誌の囑託講師吉永信子といふ先生の講義に曰く「昔の人が申してあります、士は己を知るものゝ爲めに死し、女は己を愛する人の爲に泣く、と云ふて」云々冗談でないだけにびつくりする。

△また藤浪芙蓉先生を引合に出すやうで失敬だが私も一つ御婦人方にお藥を盛つて上げようと思ふ、代は無論いただかない。曰く、お子さんが無くて困つてる方は「五加皮酒」を用ゐること、一服で身でもること受合也。これは藥種屋

へかけつけずとも、蝙蝠の遺矢を探して、未だ十分に消化し切らぬ蚊蠅其他の小蟲の亡きがらを酒へ浸してのむのだ。大阪朝日に證據があるのです

△何國かにいたづらした娘を柿の木へ縛りつけて、親父が傍に附いてゐて、道行く人に涙ながら言つて聞かせたため、村の若衆連が大いに義憤を起して、親父を袋叩きにした話がある。丹波の一部ではさういふ時は、女は生れたまゝの姿、男は簀蓆とて簀の下へ敷いた蓆のよく〳〵燥け切つたので裃を拵へて着て村内を一巡しはじめて放還さるゝ習はしであつた。それも昔。



△北海タイムスに「青色魔の艶書」あり。

江畔の細柳緑に咽び、晴樹遙かに青嶂に浮んで、日長く、風暖に、鳥鳴き、人を娯ます時節とはなりぬ、偖て突然手紙差上げ、嘸御驚きの事とお察し致します、お身も私を二三年以前より御承知の事ならん、何卒今後お手紙を下さいね、私は只々お身の心ある返事を待つて居ります、お返事は明日此の新川端で下さい、時間は今朝頃、委細はお返事下され次第申上ます。

戀しき　竹内さまへ　　石黒より

電燈會社の子僧だといふから滑稽だ。

▲鹿島灘に入水したる男のかきおき

死んで詫しよか泥棒になろか思案涙の泉川

と、海に入つた、泉川とは如何に。

▲胎内に十五年と題して、會津日報に出でたる記事。耶麻郡加納村大字米岡野生字櫻屋敷庄司一郎方に、此程サテモ素的に珍らしいトーネーが生れた。此トーネーは、生れ落ちて既に身のたけ四尺に近く、骨格逞ましく、近隣の人々は何れも怪異の感に打たれたる由。母は朝日參り、父は英國種コッケー號にて去る三十一年に受胎せるが、十五年間を經たる今日、突然生れ落ちたるものにして、母體は健全なりと。馬のことらしいが、十五年間晝夜監視したわけでも無からうし、誰か落首の主を知らんや。

▲スリッパの尖へ戀人の寫眞を嵌めて穿くことが米國で流行してゐる。いしきの尖へぶら下げぬはまだしも可愛い。

▲長崎の十善寺町の骨董屋、大の近眼にて自分の膝を火鉢と間違つて、煙管で嫌といふほど撲るとなど度々あり。この程細君とモサクサ喧嘩の末逃行跡を逐て或家の前まで來ると、驚くべし其家の亭主と睦まじさうにより添うて同じ床几にいちやつてゐる。ウヌこの阿魔アと飛かゝつて擲つて〳〵擲りつけると、驚くべしそれは其家の細君だつた。それからまた驚いたか、どうか。

▲キスは水の容器を持たなんだ太古の人間が、流れに口づけて一杯に含んだ上で他人に與へたことから起つたものだといふのと、男女自然の情に因るといふのと人が人を喰つた時代にいきなりかみついた遺習だといふのと三説がある。今は專ら愛情を表する爲にすと信ぜらるゝばかりだが、米國ではバチルスの傳染を防ぐ爲にとて衛生接吻器を賣出した者あり、象牙の環に銀の柄のつきたるものにて二者の口と口との間に挿むのである。だがL同士がそれでは滿足すまい。

▲獨逸シレヤの新聞に『妻は犬と共に驅落せり、發見の方には雙方共進呈す、妻の代用としてよく働く健實なる處女を求む』と廣告したる者あり。京都の服部愛子といふ女の求聟廣告には、(一)極道でも好いが舅と口論せぬ者(二)舅の酒豪に和して毎日二升程のお相手の出來るもの(三)服部家代々男子が生れないから男子を生ますだけの器量あるもの(四)死んでも見捨て

ぬ愛情のあるもの。希望者は直接出頭試験の上合格者は其儘採用するとある。酒のお相手だけの試験には、すぐ合格する人もあらうが、男の子を生ませる試驗といふがむづかしい。

▲人の眠らうとすると正體の知れぬ化物が布團の中へ入つて來て姿も見えず手にも障らねど、ムクムクと動きて終夜眠れず、ある婆さんは何か欲しければ何でも上げますから名を言つて下さいと拜んだけれどうともすとも答へずやつぱり裾の方から入られたいといふ。ある豆腐屋のかみさんは石臼を曳いてゐたら、後で手を出して頰ぺたを撫でる者があるから、振返つて見たけれど誰も來てゐはしなかつたといふ。西から月が出たり背中を叩かれたり、帶を引ぱられたりする者があつて新聞は初號活字で騷いでゐる。茨城縣東茨城郡山根村の事だ。面白いのは被害者は女丈なり。



▲此れは巴里のこと、新婚の夫婦が互に餞の品物を夫なり妻なりに贈る習慣になつて居るのだが昨今は其品物にも事缺いて互ひに拳銃を贈ることが流行つて居るとは、嘘の様な事實である。結婚の時から夫婦喧嘩してピストルの打合をするのを待設けて居ると云

ふ譯か知ら。

▲衆議院議員候補者の自薦狀には、珍なのが多いが、一番振つたのは宮城縣の首藤陸三氏の自薦狀だ。政見の主義のと並べるのを一切略して、只自分には嫁期に達した可愛い末子の娘がある、自分が當選すれば、代議士の娘として立派な所へ嫁にやることが出來、自分も樂隱居になれる、は何うだ。うそのやうだが、結果は落選である。

▲ジヤツヂにだつたと思ふ。婦人連が旗を立てゝ、大手を振つて進行して來ると、或る男がポケツトから鼠二三匹を拋出した、これを見た前列は血相變へてちりちりばら／＼に逃げる圖があつた。序にいふ、西洋婦人は鼠を忌嫌ふこと日本婦人の蝦蟇同樣だ、ところが日本では鼠を括つて交番所へ賣りに行く女がある、佛國では蝦蟇を珍味として女も食ふ。だから婦人記者はナマイキだと毒づいてゐるのは京都日報の記者だ。妙な論理もあるものだ。

▲判事が一人の好男子に二弗の罰金を宣告すると、そばにゐた其夫人が『それはひどいわ』『そりやあんまり亂暴だわ』と騷ぎ出した、判事は『默れッ』と大喝したが、靜まらないので官吏侮辱罪に問ひて、五弗を科した。夫人は罰金を拂ひつゝ怨めしさうに、御亭主を見て『家に歸つてから見ていらつしやい』

▲君士但丁堡の或る劇場に左の掲示あり。

觀劇の便利の爲に、舞臺より三列までのお客は演技中、伏して御覽ありたし、三列より六列までは跪き六列以下の方は立つて御覽ありたし、叉悲劇を演ずる際には笑ふ事無用。

と、さりとは究屈な芝居かな。

▲紐育で今年の始め未婚の女子三十名集つて、自主的娘倶樂部なるものを組織した、會員は本年中は結婚は勿論、約婚をもなさずとの堅き盟約をなし、徽章は鍵形のピンを襟にさすことゝして、規約に背きて約婚したる者は金五圓、結婚したる者は金十圓、驅落したる者は金二十圓の罰金を出す譯であるが、此罰金は相手方の男の方から之を取立てるといふ規定にして居る驅落が一番罰が重いのはどういふ譯だか分らねど、獨り者をなやますべく、べらぼう文學を書いてる連中はまさに三族を夷くべきなり。

東京往來（中）

朝の活動と夕暮の歡樂

外島涙之介

▼浴衣姿に薄化粧した夏の女は美しく見えて、春さきの着物の美よりも、夏の姿の美の方が眼に着く、勿論此も山の手と下町では異つた風俗を成して居る。

▼關西の濃艶なる趣味に比較して、東京の瀟洒なのは事實ではあるが、庇髮の跳梁跋扈に伴うて服裝及び態度が西洋臭を帶びて來た、昔は女と云へば白い腕に赤い袖口の見えたのを好いとしたものだが、今は安レースの筒袖などが現れる樣になつたのは、やはり西洋趣味のおかげだ。併し最新流行を逐ふ貴族富豪等の婦人や意氣を喜ぶ藝妓等の一部では、和洋を調和して庇髮でもいきなのがあり、日本髮でも上品な形が出來た。學習院女學部や虎の門女學館の學生に上品な日本髮の流行して居るのは無理でない。隨て東京で結髮の第一流なりと稱される新橋のお虎さん、お千代さんや、お文さんの處、或は白牡丹の階上に出張して居るお元さんの處などにはあらゆる階級の若い人や中年の婦人が朝から晩迄絶え間が無いと云ふ事である。

▼日本髮に雪踏を履いた人が、オペラパックに扇子を持添え、手套をはめ、ベールを冠つた上に變り色のパラソルをさし、自働車で風を切つて行くと云ふ不調和でも不自然でも之が東京の女の理想的流行だと云ふのだ。

▼然しこんな人許りの東京では無い。朝八時前後、試に神田橋の上に佇で居ると、幾百の老若男女が列を成して通る。此は大藏、内務、宮内、の各省を始め、印刷局、電話交換局、會計檢査院、府廳、市役所等三菱

原の諸會社に出勤する男女である。流行などを知る事は出來ぬが、生存競爭とか生活とかを知るには神田橋などもいゝ場所である。之を女子に見るならば印刷局や電話交換所或は造兵廠の入口がいゝ。朝は比較的元氣らしく三人五人一團になつて笑ひながら話などして行くが、四時から五時頃になると、黄色い風塵の立つ廣い往來を、氣笛に送られて出てくる若い女のすゝけた顔、困憊した黒い手に辨當を持つて、口元を結んで腑目に默つてぞろ／＼歸つて行くのである。

▼然しそれらは女工であるが、所謂女工でなく、學生でも無く、交換局を始め各大商店の賣子、勸工場、又は展覽會の見張人等の部類も夥しい數である。是等の若い女は務めて女學生風をする。故に一見東京の若い女は女學生許りのやうに思はれる。然し之も觀察に由て區別がつく、最も簡單なのは持つ風呂敷によるので、各種の實習學校、裁縫女學校の生徒は大きな包を持つ。云ふ迄も無く衣服や造花の道具などが入つてるからであらう。唯の女學校の生徒は數冊の書籍を入れた位の包である。以上以外の女學生風をする女は雜誌一冊に辨當だけだから包みが小さい。加ふるに袴や下駄などが上等過ぎてゐる上に厚化粧をする。包の大小と化粧の工合とで區別がされる。

▼暑中休暇になると、男女學生の歸省と講習會に上京するものとが交代する爲に、新橋や上野の各停車場は頗る雜踏する。其の歸省する女學生の一人一人が出來る限りの美しさ、熱心に硏究した髮形、化粧の仕方から衣服の縞柄、着こなしなど、知り得ただけの東京化を裝ふて居る。歸省する諸孃は最も得意で、鄕里の姉妹姪叔に見せつける有樣を胸に畫いて居やうけれど吾人が停車場で瞥見すると、一年目に歸國する人か、三年振に歸省する人かゞ能くわかる。

▼暑い／＼東京に殘つて居る女學生、或は新しく暑中休暇を利用して上京した人も一見してわかる、庇ばかり高く張り出して入れ毛が見える下から眼許りきよろつかして居るのは來たての女學生だ。

▼馬でも犬でも焰の樣な舌を出して喘いで居る一時二

時頃の日盛りの往來は、電車が走る許り、兩側の商店の白い日除が強烈な日光にてり附けられてまぶしい、眠れる東京は夜に非ずして、却て炎熱燒くが如き晝の最中である。通行の人は郵便配達夫に自轉車に乘るボーイ。立つてるのはポスト、電柱、電車の旗振り。荷馬車挽も荷車挽も木陰に休んで安い氷水や甘酒に日中を避けてゐる。

▼日中は眠る大都會も、朝の内は活動して居る、殊に割引電車に之を見る事が出來る。先づ割引時間の終らんとする十分前の停留場の有樣、まるで小修羅場を現出する。行き違ひに脇目勝な氣取つた態度をする女も、若い奥樣も、吾れ勝ちに乘らうとする男に押され職人に突き除けられても割り込まうとする淺ましさ、品も愛嬌もあつた者でない。



▼讀者か想像するより、朝の藝者町は半玉の太鼓や姉さん達のお稽古で靜かでない。然し一體に沈靜の中に底力のする華さがある樣で、一種異つた空氣が充ちて居る、世の婦人達が彼等を排斥する樣でもない、宗教的信仰も強い、脫俗的で、旦現實の人生に接して相當な觀察を持つてゐる。

▼前號にも電車に關する事を書いたが、電車の中では、向側に坐つてゐる人と、或る時間内は姿を見合してゐる事が多いので、各人が服裝に注意し、それが段々華美になつた。

▼所謂山の手に屬する電車に乘ると、朝は殆ど七八分まで新聞か雜誌を閲て居る。閲ない人は時代後れの感じがある樣だ、此頃では婦人も盛に閲る樣になつた。中年の人は新聞が多いが若い婦人は多く雜誌か教科書をてわ〳〵見て居るので、これは産婆學校の女學生だらうとか、あれは女學校三年生位だらうとかもわかる。十二三のお下げのお孃さんが、雜誌の少女小説を熱心に閲て居るのは可愛らしいが、千九百三年(九年も前)の英國のある雜誌、しかも法律雜報の部を見て居た女學生があつたが、これは閲るのでなく、(よめぬ外國語を)よめる態をする人でにが〳〵しい話だ。

▼萬事手取早く、鋭く、しかも分業的な東京の商賣人の中にも、尤も勇ましく且頗る亂暴な商賣は、日本橋の魚河岸の朝の光景であらう。客か賣り手か不分明ぬ程亂暴な言語が喧嘩的口調で交換される中に、船で朝早く河岸から上つた魚も、午前八時頃までに大部分は取引が終つてしまう、それらの魚は、いなせな若衆の勇ましい掛聲に乘せられて、山の手の奧でも午餉の膳には上る樣になる。魚河岸の朝はいきた東京の縮圖である。詳しくは本誌でも知られてゐる江戸兒のチヤキチヤキ魚河岸のお孃さんの話に聞いて御らんなさい。

▼魚河岸と對して神田の多町の青物市も、仕事は早い。しかも豪商の集合である。この町には一中年山葵の販賣のみで富豪に成つた家もある。

▼三越や白木で買へない人、或は三十分間に一ヶ處で立派な和服なり洋服なりを安く買はうとする人の爲に神田柳原に古着商が十數町軒を並べてゐる。その裏通りに古着の市が立つて、各區を初め近郷の同商人が集まる、それも午前に終るので東京の朝の行事の一つに數へられる。

▼婦人にはあまり關係のない話だが、いきた東京の一面は、兜町の株式取引所と、蠣殼町の米穀取引所の光

景であらう。あらゆる階級の人、分別盛りの人、老人も、青年も、要するに大に、急に、金の欲しい人、一握千金を夢みる人でなく現在の萬金を思ふ人が集つてくる朝八時前場の立會から後場の大引の四時迄に仲食の時間を除いて六七時間の間は、勝者敗者幾百の顏色の、壇上の叫號　信號の度に變化して行く有樣が手に劍こそ持たね一場の活劇だ。その間各仲買の電話はベルの鳴りどほしである。目の色を變へて歸る人、にこ〳〵して近所の料理店に行く人、一憂一喜、虚々實々、取引所の近所の心持は面白い現代詩である。



▼斯の如くあらゆる方面に活動する東京の夏も、夕暮近くになると通りといはず横町といはず、涼しげに水を撒く、撒かないと警官に注意される、太陽が西側の屋根に落ちると、往來に涼臺を列べ、向側の縁臺と、こちらの涼臺とで一日の出來事から面白い話が交換される。團扇と煙草盆との間に町內の娘の噂、嫁の陰口、姑の惡口は次から次と展開する。夏の夜の趣味は涼臺が大いに助

ける。

▼窓や障子は明け放しで、奥の縁側には岐阜提灯や蟲籠が吊され、忍草の下に片肌ぬぎの亭主が味さうに盃を擧げて氣焔を吐いて居るのが往來から能く見える。之が下町趣味である、氷柱の側にハンモーターが風を切つて廻轉して居る處でキラソー酒でも呑んでゐるのが貴族趣味であるとすれば髭のある親父が乳母車を押して四辻の處へ集るのは山の手趣味でゞもあらうか。

▼吾々が浴衣を着ようとする前後から、芋屋が小さい氷屋になり、水菓子屋が立派な氷屋になる。丁度劇場の道具立の樣な最も不裁體な常盤樹や、安い鉢植を列べ、葭簀でまはりを造へて水玉の簾を懸け、涼しさうで實は干固まつた樣な氷屋が一町に一つ位の割合に出來る、然し客は夜が多い。

▼夏の東京の趣は夜にある。夜は縁日にある。一六、二七、五十、三の日、虎の日、午の日などにあるから四の日が無い丈で毎日ある割であるが、四の日が虎や午の日になるとすれば、一區に縁日らしいのは五つ平均あるから、一日七十餘箇所に當るけれども雜踏するのは一區平均二つ位である。一々擧げられないが地方にまで名を知られたのは、深川富岡門前町、淺草觀音、日本橋の水天宮、銀座の稻荷、烏森、虎門金毘羅、芝明神、神田小川町稻荷、牛込神樂坂の毘沙門 赤坂一ツ木地藏、などである。それらの縁日の內、各自最も近い處へ出かけるものとして居る。故に女の夜出るのは縁日に增すものはない。薄化粧をして大形な浴衣を着、團扇を持つて出かける若い女を多く見かけるのは縁日である。何町となく賣店が見世を張つて居ても、最後に植木屋や金魚屋がなければ縁日の樣でない。

新刊

悲しき玩具

故石川啄木氏の歌集である、此集は歌集として見るよりも、故人の生活の近代的であつたことを知るたよりとして、著しい個性の現れた著作だ、歌を以てわが悲しき玩具なりといふほど、著者の生活は不遇であつた、此間に處して著者の眞面目な考と、新しい開拓とは吾等をして敬服せしむるものがある、(定價金五十錢、郵稅四錢、京橋畔東雲堂出版)

▲山田鴛川の譯注、文章軌範、高須梅溪のスケッチ文集、本間久の白眼、赤司繁太郎の人格の修養、百田棚花の夜等は次號に紹介すべし。

至尊御惱みあらせらる

天皇陛下には明治三十七年末頃より、糖尿病に罹らせられ、次で三十九年一月末より、慢性腎臟炎御併發、爾來御病勢多少增減ありたる處、本月十四日腸胃症に罹らせられ翌十五日より少々御嗜眠の御傾向にあらせられ、一昨十八日以來御嗜眠は一層增加御食氣減少、昨十九日午後より御精神少しく恍惚の御狀態にて、御惱症あらせられ、御尿量頓に甚しく減少、蛋白質著しく增加、同日夕刻より突然御發熱、御體溫四十度五分に昇騰、御脈百〇四至、御呼吸三十八回、と云ふ宮內省公示の發表されてより、上下愕然として措く處を知らず、愁雲低く大內山の空に漂ひ、折柄九十度に垂んとする暑熱をも忘れて、文武百官は御見舞に參內し、全國津々浦々に到るまで、至尊の御重態に心を傷めざるはなく、一日も速に御快癒を祈らざるはなし。されば東京に於ては、宮城外を廻る電車の響も其音を低め、一般の娛樂機關も場を休みて御遠慮申上たり。

陛下其後の御容態は御變化あらせられず、二十二日午前には體溫少しく御降下稍御安靜の態に拜し奉れりとの事なれば、一般士民も聊か心を休めたるも、何分にも御寶算六十一を數へ奉る御老體と云ひ、御惱も御難症に在すれば、國民等しく憂慮を禁ずる能はざる處なり、武運勝れて目出度く在す、至尊の御爲に、速に御平癒あらせられんことを、讀者諸孃と共にひたすら祈念する處なり

（廿二日午前記者謹識）

江木博士夫人が洋裝の由來

婦人記者

おくさん、今日は何時になく大變お元氣が宜しいぢやありませんか、そして帶を下に締めていらつしやいますのね、どうかなさいましたかと、たづねますと、この頃のやうになつたのは譯がありまして、まだぞんじありませんか、私の洋裝にするやうになつたのを、とおつしやつたので、いつからでございますか、一寸も存じません。

今まで濃艶な和裝で美しく取繕つて居られたのを、おしいやうな氣もしましたが、また洋裝の似合はぬわけもなく、裾長う曳くスラリとしたお姿は、外國婦人と見まがふばかりであらうと思はれて、洋裝になつたのはどうした譯ですかと、物好きに訊て見ますと、別に深い仔細もなく、左のやうなお話なさいました。

私は三四年以來心臟が惡くて、起居も不自由なほど惱まされて、今年の正月から、一切面會も謝絶して居つた位でございます、わけても宮殿下から、能樂の拜觀の招待を受けました時や、旅行、訪問などに、幅廣い帶を胸高に締めて、禮裝して居りますと、心臟がはげしく壓迫されて、呼吸もつまる樣な仕末で、今にもこのまゝ死で了うのでないかと思はれ、一日は愚か半日もたへられませんので、滅多に外出したことがなかつたのです。やむを得ず外出せねばならぬ場合には、半幅帶で心臟を壓迫せぬやうに、ずつと下げてお腹の上に締めて居りますと、形は惡し、姿も醜く、

いつも被布でかくしては居りましたが、それでも、時に依りますと、被布を着て出て失禮なこともありますし、さして心臓の苦痛も變りませんので、どうしたものかと、思案して居りました折から、醫者や良人が洋裝にしたら、心臓を壓迫することがないから、どうかとすゝめるまゝに、安ものを一着拵へて着て見ますと案外にも樂で起居も自由に出來ますので、洋裝に更めたのでございます。和裝ならば活潑な眞似も出來ませんが、洋裝ですと思ふやうに運動も出來ますから、それでこんなに太つて、皮膚の色などもすつかり、以前と變りまして、自分ながら見違へるやうになつたのでございます。その代りお轉婆になりましたよ、こんなに丈夫になれるものに、以前に洋裝に更めて居ればあんなに苦しまなくてもよかつたのにと、遲かつたのを悔いて居ります。

　足らぬ私を、いろ／＼と敎育してくれたのも、良人でございます。

　衞生々々と皷吹するのと、醫者の言葉を、溫順しく受けて、洋裝にしましたので、眞實衞生の上からこの身を思ふてのことで、ふわ／＼と世間の風潮に浮されたのでも、また驕奢に奔り、華美を競はんが爲めでも毛頭ございません。

　毎年夏には輕井澤の別莊にまゐりますが、良人の職業が職業なものですから、彼地に行き切りとはなりませんので、行つたり歸つたりして、良人の身の廻りの世話や、食事の世話をせねばなりませんので、今年はわけても、著書などの方で、忙しく往復も例年より多いのでございます、それで旅行服、夜會服、訪問服、運動服、普通服と一通り取揃へましたが、和裝を一通り取揃へますよりも、半分位しか費用はかゝりませんので、洋裝の方が大變經濟だと思ひました。

　時節も時節でございますし、この分で行けば、秋頃までも、洋裝にして居りますと、全治して了ふと思ひますから、さうすればまた、和裝にするのでございます、そんな考へから安ものばかりで質素なものです。

　もしも良人や醫者の進めに從はなかつたら、全くて

んなに丈夫になれなかつたのでございます。

けれども、世間ではまた、洋裝を着出したかと、寫眞を雜誌に出したとか、虛榮心の强い奴だとか、なんとかかんとか書き立てられることでございませう。

この間帝國ホテルに招待されて、洋裝でまゐりましたが、それが見つかつて、そのあくる日でしたか、新聞社の方が來られて、どうして洋裝にしたか、洋裝の寫眞もお撮りになつたのを知つて居るから、かしてくれとおつしやるので、よく撮つたのなど知つていらつしやることゝ、お目にかけますが、貸すことは出來ませんと、堅くお斷りしても、どうしてもお返にならないので、その明る日に、新聞に出されたのでございます

すると各雜誌社から、貸してくれと申されて、一方にかして一方を斷ることも出來ず、これまでゝもさうですが、手許になければないと、斷りましたが、ありさへすればお貸し申したのでございます。それを隨意に雜誌に出して下さるので、私から出して下さいと申したことは毛頭ございません、それにお近しくして居るお方が來られるものですから、貸せないともいはれないし、やむを得ずお貸しするのでございます。

寫眞ですか、一年に一度や、二度三度、四度位は撮ります、それが虛榮でせうか、寫眞屋が親類なものですから撮つてくれます。

虛榮といへば、その文字の示すやうに、身分不相應なことをいふのですね、私だつて、入るを計つて出るを制すること位は知つて、良人の身分職業に對し相應した生活をして居ります。

衣類は凡て良人が見定めて、これが似合ふ、あれが似合ふといふて、買つてくれますので、それを私がかうしてだまつて着て居りますだけで、別に虛榮に着て居るのでもありません、何といつても子供がないので別にこれといふ樂しみもないものですから、子供のかはりに私にでも着せてくれるのでございませう。子供がないほど不幸なことはありません。人形でも買つてお芋でも喰べさして喜んで居る位なもので ございます。

江戸道中名所名物見立角力

東海道

大關	駿河	富士の山
關脇	島田	大井川
小結	三河	岡崎橋
前頭	みや	七里渡し
前頭	神奈川	富士の人穴
前頭	吉原	駿河半紙
前頭	相模	筥根山
前頭	大磯	虎が石
前頭	小田原	ういらう
前頭	桑名	やき蛤
前頭	尾張	鳴見絞
同	おきつ	田子の浦
同	白子	ふだん櫻
同	品川	淺草のり
同	相模	小田原提灯
同	濱松	廣いやうでせまい
同	佐夜の中山	夜泣石
同	筥根	さいの河原
同	大森	和中さん
同	大森	麥藁細工
同	筥根	さんしよ魚
同	目黒	比翼塚
同	はら	富士の正面
同	平塚	曾我の里
同	川崎	めうと橋
同	神奈川	浦島の塚
同	府中	姥が池
同	六代御前	腰かけ松
同	おき津	あいそめ川
同	岡部	うつの山
同	につさか	わらび餅
同	關	大地藏
同	草津	姥が餅
同	尾張津島	牛頭天王
同	池上	本門寺
同	芝	神明宮
同	芝	愛宕山
同	川崎	大師河原
同	遠州	秋葉山
同	武州	目黒不動
同	相模	藤澤寺
同	みや	熱田社
同	小田原	道龍權現
同	戸塚	やきもち坂

行司

いせ 二見の浦

名古屋 金のしやちほこ

更科 田毎の月

世話人

江の島 鎌倉

善光寺 四目の家根

近江八けい

勸進元 東海道

差添 中仙道

和田信二郎氏所藏

中仙道

大關	あふみ	みづうみ
關脇	信濃	淺間山
小結	同	木曾の棧
前頭	同	諏訪の池
前頭	上州	由利若大じん射抜穴
前頭	太田	美濃紙
前頭	上州	碓井峠
前頭	うすゐ	はんねいし
前頭	信濃	諏訪めいし
前頭	木曾	ねざめそば
前頭	信濃	上田島
同	みの あふみ	ねものがたり
同	輕井澤	夏も蚊幮入らず
同	上州	たてたばこ
同	木曾	おろくぐし
同	福島	せまい様で廣い
同	追分	みをぐひ石
同	くつかけ	燒石の河原
同	池の端	金丹ゑん
同	木曾	行火なわ
同	木曾川	かじかの魚
同	板橋	縁切り榎
同	和田峠	日本一高い地面
同	垂井	てるての松
同	まごめ	女瀧男瀧
同	今津	常磐の塚
同	の子里 あをの	はんにや岩穴
同	原	物見の松
同	しほな	相生松
同	御嶽	鬼の岩穴
同	さるがばんば	かしは餅
同	今井ケ原	石の二王
同	福島	くるみ餅
同	信濃	諏訪兩社
同	甲州	身延山
同	湯島	神田明神
同	江戸	湯島天神
同	上州	妙義
同	上州	はるな山
同	武州	王子稻荷
同	武川	熊谷寺
同	新田	大くわう院
同	信州	米山藥師
同	野尻	りんき坂



花柘榴

法師

△君が書かぬと寂しいからカンシヤクでも何でもいゝ、ぜひ書いてくれと懇ろに望まれた。牛乳の匂ひが鼻について、卵を入れて掻廻して呑むことは上手になつたが、氣分がよくないし、骨折て書いても向う島のうをふとされたり、一所懸命を二度までも一生懸命となほされたりしたので疾から匕を投ておるのだ。向ふ島のふはうと書くのが正しく、一生懸命は一所懸命が本たうなのは言ふまでもあるまい。わざ〳〵なほしてくれる親切は有難いが、少しは書いた人の意志を尊敬するだけのしんしやくが有つてほしいと、先づ叱りおいて。

△大家となれる君達の相率ゐて散文欄に出ることを肯じなくなつたには苦笑される。おほかた自分に茶化されて不覺の耻をとつてはならぬと思つてだらう。しかし評が氣にいらなんだら、正面攻擊なり側面打擊なりお氣に召すやうにして、矢張仲よくなされては如何に。長曾我部菊子から「私は初からてんで水野先生に作物を見ても讀んでも頂きません、先達ても伺つたら花世さん僕は君にあんな文章を書けと敎へはしなかつたねと言はれた程のことでムいました」と言て來た。水野君の家に居てすら敎はらなんだとすると、河井君にも無論見ては貰ふまい（よしんば見せたところで評する男でも無いし）して見ると花世さん（菊子）は自力で開拓して行かうとする人だ、誠文館から出版する『マダム振り』は其第一文集であらう。蔦朝が加藤筆子さんを文學のわかる人と書いたやうに、讀賣には花世さんの名が有つたけれど、かねて聞いておるらしくもなかつた。嫁に行く前に生花や茶の湯を習ふ量見で筆を執る人なら格別、花世さんはもつと大きく眼を明けねば困る。

△今井邦子さんに對する醉茗の評は珍らしく熱の有る文である。昔はあゝして我れ等を激勵し鞭撻し推讓してはぐゝめるも實に醉茗である。文庫派の名は空しく殘るのみなれど、與謝野夫人、小島烏水、北原白秋、山崎紫紅、水野葉舟、窪田空穗君等皆我等の侶であつた。邦子さんの若き日が過去つたことは悲しんでも致し方がない尤も悲しむべきはまことに其素養の缺けておるとだ、ゐとい、えとへの區別など敎へ參らせしは自分であつたが、今は哺乳の傍新しき覺悟の下に新しき勉强をおしなさるでせう。十五で歌をよめるを誇りとするには至らない、現にはやぶさの初めて詩壇にあらはれたのは十四歳の時だつた。

△詩を作るころの邦子はまことに其ゴルデンエーヂであつた、町田靜江より交りを乞はれて拒絕したのも其頃である、太田きし子の氣を付けたのも其頃である、町田太田の二人が發奮してやうやく名を擧げ來れるは其屈辱？があづかつておる。（されど町田さんはもう女子文壇を見てはおないらしい。）町田さんのみならず、お孃樣といふお孃樣は皆去つて了ふ、長く我等の友たる人はすくなきことまさに晨の星の感が有る。〇〇御殿に參りて日々佛蘭西語を姬宮さまに敎へ參らするなにがしの君のなほ忠實なる讀者たるが如きは感謝すべき事實ならずや。婦人雜誌の讀者は、或者は其豐麗なる口繪に、或者は其俗惡なる記事に、或者は其懸賞に、或者は其執筆者の名に多くの力を以て引かるゝのである、作家として壇に上るは大によし、能はずんば退いて忠實なる友助言家傍觀者たるも亦よからずや。要するに人格を信ずれば可。

△水野君は小唄を讀めと言はれたが、針妙に『松の葉』一冊うつすひとがあるか知らん、化粧欄の繁昌を見ても、今のお孃さん達のゐらさが知れよう、おしやれの時間が長いから不如歸位で溜飮を下げるがせきの山、平家も知らなければ八犬傳も知らず、五人女や天の網島は愚、田舍源氏は誰の作とも思ひつくまい、『民謠全集』はさう大した物ではない。水野君の言つた「〔御油や赤坂吉田が無けりや何のよしみに江戸通ひの御油をごいと書いてすましておくなどあまりならずや、尤も荒井御番所と箱根が無けりや連てい

こゝのお江戸までの荒井を荒いと解いた人に比べれば前田さんはまだいゝのだけれど。

△女子文壇叢書の第一巻は若杉濱子に都合有りて前島きみ子の小説を取ることになつた。三年前ならば山田邦子の詩は群峰の上に聳えて先づ帝冠を戴いたらうに、第二巻以下は神秘未だも らすべからずと雖、今の翹楚たる者花山院きみ子小磯とし子赤木花子三根ちさ子粒木つね子有り、やがては選に入りて前者のあとを踏むべき人たちである。こひねがはくばみちの中に止まされ。

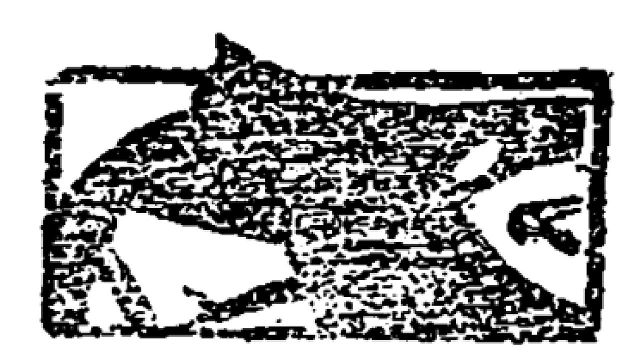
△大分まじめな事ばかり書いた、ちとお茶をさし上げよう。寢たり起きたり、盜汁とのどの痛いのとに苦みながらやうやく十一册の『俳風柳多留』をうつしをへた、氣短になつて、のんべんだらりと長いものを見てゐられなくなつた自分にとつて、新しい世界を見出したやうな思ひのするのは、この川柳である。十中六七はわけのわからぬ物ながら、口語詩なんかよまされて無理に解つたふりするよりか罪が無くていゝ。明治も四十五年の今日になつてまだ間がいゝ節の廢れぬに驚くよりか、安永六年出版?の『柳多留』に『新世帶間のいゝ時は誰も來ず』に驚く方が氣持がいゝ。

口語詩も詩だといふ、酔茗もあんまり御自慢では無ささうなれど『露』もあることなり、おつき合に作らねばならぬとは思ひ乍ら、たゞの一度も作れず、口語詩なんか國語を知らぬ手合のゴマカシ仕事だと獨で憤慨してゐた位だ。ことに女の口語詩と來ては言語道斷である。と何も入當りに當る譯ではないが。

△川柳には古來はしがきが無いけれど「どこへでもくツついて出る馬鹿亭主」位ならわかるだらう、私の習作はそれよりはむづかしい。

腹は貸し物むすこ離縁を承知せず
接吻を捧げて棒を引く氣也
たはけさはスヰートホームよみたがり
ツーラインおらが方では二本棒
ツーラインの日本一女房にのろけさせ
いが栗から思ひついた夢二の目
夢二の目さかさ睫毛も植ゑて見せ
倉七つ明ケて娘に懲り〳〵し
天下泰平少尉にして嫁を取
ちつと澁がむけると夢二式といひ
足は勿體無し手の爪ならと女房いひ
髮はあゝでも要司村福子美人也
酢つぱいんだのに木瓜をいやといひ
腕まくる女もありて法界也
ハスの字が見えると法師沒書にし
酔若はあしたになるとくしやみをし

娘七人有れば長者もつぶれるの諺からも取つたし、伊賀越道中双六からも取つた、腹は貸し物は我れながら名句と思ふ、酔若のくしやめに至つては神韻奕々たるもの。さるにても皆おこらないか知らん。考へるとこはい。



化粧問答

化粧研究會
婦人修容會　顧問　藤波芙蓉

○化粧品の原料を何處から求むべきかと云ふに就いて　近頃さる御方から、「新式化粧法も合鏡も讀んで見たが、研究の行屆いて居るには敬服の至りだ、併し讀んで實行が出來なんだら、繪に描いた美人も同樣、失禮だが貴下の兩著も取分け地方にとりては正に此繪美人的、只讀んで眺めて、これが實驗をすることが出來ぬと云ふのは、兩著の發表されてある其方劑の原料類は、何處の藥屋に行つても求められないものが多いからだ、これでは折角貴下の研究を聞かされても、何の役にも立たぬではないか。こゝは何とかして誰にも其方劑を容易すく手に入れ得るやう一考を煩はしたい」との御叱りを頂きました、一應は御尤な御言葉と存ぜられますと同時に、この樣の問答でも矢張り同樣の憾みを御感じにならるゝ御方々も澤山おありのことゝ考へられます、それ故實は從來とても、時間の許す限りは私の手許で調劑して差上げても居り、又御望みにより市川藥局に依頼して調製してやつて呉れるやう仲介者の位置にも立つて居るのですが、何分にも苦味丁幾二・〇、重曹一・〇を七〇・〇の水に合せた原料に一錢とはかゝらぬものを七錢か八錢かに賣付けるのを普通と心得て居る藥劑師、それに化粧品の原料には、一般の藥局に具へて居る醫學用の外に、化學用や工業用の藥品を多く要しますので、此等は大抵の藥屋に仕入れてありませんので、兎角に厄介がり、何とか口實を設けて其調劑を斷はると云つたやうな次第、と申して折角それを使つて見ようとして御手に入れることが出來ぬとありては、如何にも佛つくつて魂入れぬ結果となる譯故、茲はさる御方の御言葉の通り、何とかして皆樣方の御便利となり、私が發表した方劑のすべてを、容易に、且つ低廉に調製して呉れる藥房を特定して差上げようと、目下それが物色に注意を拂つてをりますから、暫らく御待ちを願ひます。

問　（一）新芽色おしろいを求めたいのですが、何處に賣つて居りますか。（二）手がブクブクして色艷のわるいのは何としたらよくなるでせうか。（大阪、好枝）

答　（一）御地の丸善洋品店にある筈です。キセロル粉おしろいの青といふて御求めなさい一個七十五錢と思ひます。（二）コールドクリームをすり込みよくマッサージをなさい。



問　（１）三プロの過酸化水素水では白色劑として効果がありませんが。（２）肥滿して居りますので運動のため歩行につとめて居りますが却つて肥肉を加へます、何と致したらよろしいでせうか。（３）毛生劑を調らへて頂きたいですが代價を御敎へ下さい。（花吹く里）

答　（１）四プロのでなければ駄目でせう。（２）精しくは今月から婦人畫報に連載致すことにしてある「美容式體育術」と云ふのを御參考願ひます。（３）毛生劑にも原料にいろ〳〵ありますから、單にその代價のみを申上げるわけには參りかねます。

問　（一）從來美しい聲だと云はれて居りましたのが、近頃は高い聲も出ず、出すに苦しうございます、どうしたら美音になれますでせうか、ヅボートがよいと伺ひましたが全く効能ありませうか、どちらで賣りませう。（二）手が割合に小さい爲めピアノなどを彈くに一寸困りますが、如何致したらこれを適度に發達させることが出來ませうか、當年二十一歳です。（三）腰から足にかけて肥えて居りますが、これを全身と平均させます方法はないものでございませうか、元來歩行好きですが、それがいけないでせう。（淺草、千鳥子）

答　（一）ヅボートのよいといふ事は、むかしから音曲を業とした者の共に申して居ることで、それで私もいつぞや本欄で委かく御答は致しましたものゝ、實を申すとそれは一時的のもので、實驗上大した効能あるとは申されません、併し御ためしなさる御つもりでしたら大抵の漢方の藥店にあります、で、根本的に音聲をよく

致しますには朝早く起きて新鮮なる空氣を三回程深呼吸なさつて、それから先づ右の鼻の穴を指で塞ぎ、左の穴から深く（心で一より八まで數へる間）吸込み、而して其吸込んだ空氣を今度は左の穴を塞いで置いて右の穴から吐出（心で一から六まで數へる間に）するのです。斯くすることを最初五回（段々慣るゝにつれ十二回までのぼせる）したら、同じ方式を反對に、即ち左の穴を塞いで右の穴から吸込み、右の穴を塞いで左の穴から吐出すこと同じく五回、斯く毎日御やりになつて居るとキツト成功致しますこれは現に私の妹を初め私の知つて居る女義太夫、浪花節の先生、琵琶の師匠の或人々に敎へて、何れも相當の効果を收めて居る實驗上の事實です。（一）及び（三）は（花咲く里）さんへの答の（2）を御覽下さい。

問　私は絶えず顏に赤い吹出物がして此頃では鼻頂にまで出ましてかゆい時と痛む時とありますが、先生御發明のニキビ劑がよろしいでせうか、又洗顏には御社から御わけ下さる洗粉を使ひますれば他の糠や石鹼は使はないでもよろしうございますか、私は元來アレ性ですのに鼻頂のみ脂肪が多く毛穴を押すと白いものが出ます、何卒療法を御敎へ願ひます。（京都、良子）

答　多分乳頂疹でせう、兎も角ニキビ劑を御つけなさつて、御覽なさい。その結果によつて別劑を申上げませう、洗粉のみで他のものは御使ひになることはありません、その位でなければ何も改めて私が純植物性の洗粉を案出する勞を採る必要はない筈です、鼻には艶肌劑を御つけなさいまし。

問　日やけどめをつけましたら、大層キメが細かになり色も白くなつたやうな氣持が致しますが、五十ポンドだけで、あと御わけして頂けないでせうか、夏季のみでなく冬季にも使ひたいと思ひますが。（福岡、月の香）

答　私元來懶怠者で、美髮劑や洗粉は、文壇社の事務員だの家内の者に手傳つて貰ふことが出來ますからですが、コールドクリームと日やけどめとは調製法が極めて面倒で、少しも他人の助力を受けるわけに參りませんので、厄介ですから成るべくは、もうあれだけで御免を蒙りたいと考へて居ります、それに冬季には不適當のものです。

問　（1）顏のキメを細かにする法（2）一番によい洗粉。（3）ニキビのよくなる法。（4）コールドクリームは幾分位すり込めばよいでせうか、更に灰色になりませんが。（5）合せ鏡、新式化粧法の代價を。（田舍女）

答　（1）他にもありますが、兎も角姉妹劑を御つかひなさつて御覽なさい。（2）自讃に似て鼻白ろましく存じますが、文壇社で御わけする拙製の純植物性洗粉がよいと確信致します。（3）神田旅籠町の文光堂からニキビ劑を御求めになり、それを御つけなさい（4）顏がポーと赤味を帶びるを程度になさい、灰色にならぬ筈はありません、恐らくはそのすり込み方がいけないでせう、その方式は新式化粧法と合せ鏡との中に精しく圖入で述べてありますから御參考願ひます。（5）甲は三十五錢、乙は四十五錢外に郵稅八錢づゝの答です。

問　ちゞれ毛の爲めに繼母よりは心が曲つてるからだと申され、身を切らるゝ思ひが致します、何卒先生御同情下さいまして、それを直す法を御敎へ下さいませ、美髮香油と申しますのは、使ひますと直ぐ毛が延びますのでせうか。（白菊）

答　御氣の毒に存じますが、今の處私の力ではちゞれ毛を根本的に直すことは出來ません兎も角先づ湯で普通の如くクセモミをなさつて其上にその美髮香油を御つけになり毛が眞直になるまで、よく御すきになれば、二三時間はキツト素直な毛の狀態を保たすことが出來ます。

問　（一）いろ／＼な化粧料を使つて見ましたが思ふやうなものは一つもありません、クラブ、レート、御園、大學等の化粧料のうち、何れを選べばよろしいでせうか、（二）毛髮かたく且つ少ないのですが、やはらかく密生さす法を。（三）合せ鏡の代價を。（大阪の女）

答　（一）御尋ねが漠として居つて答に困ります、とは云へ、御趣意の程は全然わからぬでもありませんけれど、斯樣な御尋ねは誌上でお答するを遠慮致したいと考へて居ります、御擧げになられた化粧料類に就いては餘り多くの事を存じて居らぬと申上ぐるが適當かも知れません、私が實驗して正しく良品であると認めたものでしたら、其化粧品のため、又皆樣方のために、喜んで紹介致します、他をあしざまに申さねばならぬやうな場合は、絶對に避けたいと念願して居ります、佛陀は私は愛語を守れと御敎へ下さいました。（二）精しくは合せ鏡を御覽下さい。（三）三十五錢郵稅八錢です。

問　艶肌劑と美髮劑とを頂きたいのですが

代金は如何程差上げませうか、尚本欄に御尋ね致しますには宛名を何方に致すのですか。（赤坂、糸ゞき）

答　廣告欄を御覧下さい、御質問の場合には私宛に願ひます。

問　毛が脱けて困りますが、止める方法を（長野、月の子）

答　いろ〳〵ありますが、ローションと申すのが大層有効なことを此頃實驗致しました。これを御求めになり頭皮に隔日一回づゝすり込みなさつて御覧なさい、横濱馬車道通り正金銀行前、村田屋にあります、一瓶一圓の答です。

問　（1）過酸化水素水は何處で買つても差支ないでせうか、（2）又これをつけた上にコールドクリームをぬつてもよろしいでせうか。（3）アブラ性にはコールドクリームは適當しないでせうか。（4）ニキビのあとが橙のやうになつて居るのを直す法を御教へ下さい。（5）生際を濃くするには、如何致したらよいでせうか。（愛媛、百白花）

答　（1）正銘のでしたら何處で御求めになつても差支ありません、（2）よろしうございます、但しコールドクリームは塗りつぱなしに致すべきものではなく、よく皮膚にすり込みましたらその殘りかすは紙でサツパリと拭き取りなさらんといけません。（3）不適當なとはありませんが、御つけになつてよく拭き取らんと、一層アブラじみます、然るべくば其上に艶肌劑を御つけになられたいと存じます。（4）姉妹劑を氣永く御つけになつて御覧なさい、それでいけなければ剝離法を實行せねばなりません。（5）いろ〳〵方劑がありますが、鹽酸ピロカルヒン五分、カンタリス丁幾三十匁を酒精二百匁に溶解さした液がよいでせう。

問　（一）先生御著書合せ鏡及新式化粧法の發賣所と定價を御教へ下さい。（二）直接御通信致しますには矢張女壇社宛で差支ありませんでせうか。（千代子）

答　（一）甲は京橋區西紺屋町實業之日本社乙は日本橋本町博文館、代價は（田舎女）さんへの（5）の答を御覧下さい。（二）社宛でも差支ありませんが、編輯部では私への書簡類は、すべて一まとめにして毎月十日頃に廻して寄越すことになつて居りますから、御いそぎの場合には、直接拙宅（牛込赤城下町）へ宛て下さつた方が御便宜かと存じます。

問　（1）二十歳に足らぬ年で白髮が生え、ます〳〵ふえて困りますこれを防ぐ方法を。田村化三郎氏著肥える法痩せる法の發行所を。（熊本、吉子）

答　（1）消化不良若くは神經過勞から來たのではありませんか、兎に角毎朝百倍の食鹽水で洗つてクリサラピンなりイヒチオールを御つけなさつて御覧なさい。（2）京橋銀座讀賣新聞社です、岐阜の（百合香）さんにはこれを以て御答と致します。

問　粉おしろいを打つと申すのは、袋にでも入れて擲くのでせうか、または皮か何かでしますのですか、とき水で煉りのやうにしてつけてはいけないでせうか。（富山、アイ子）

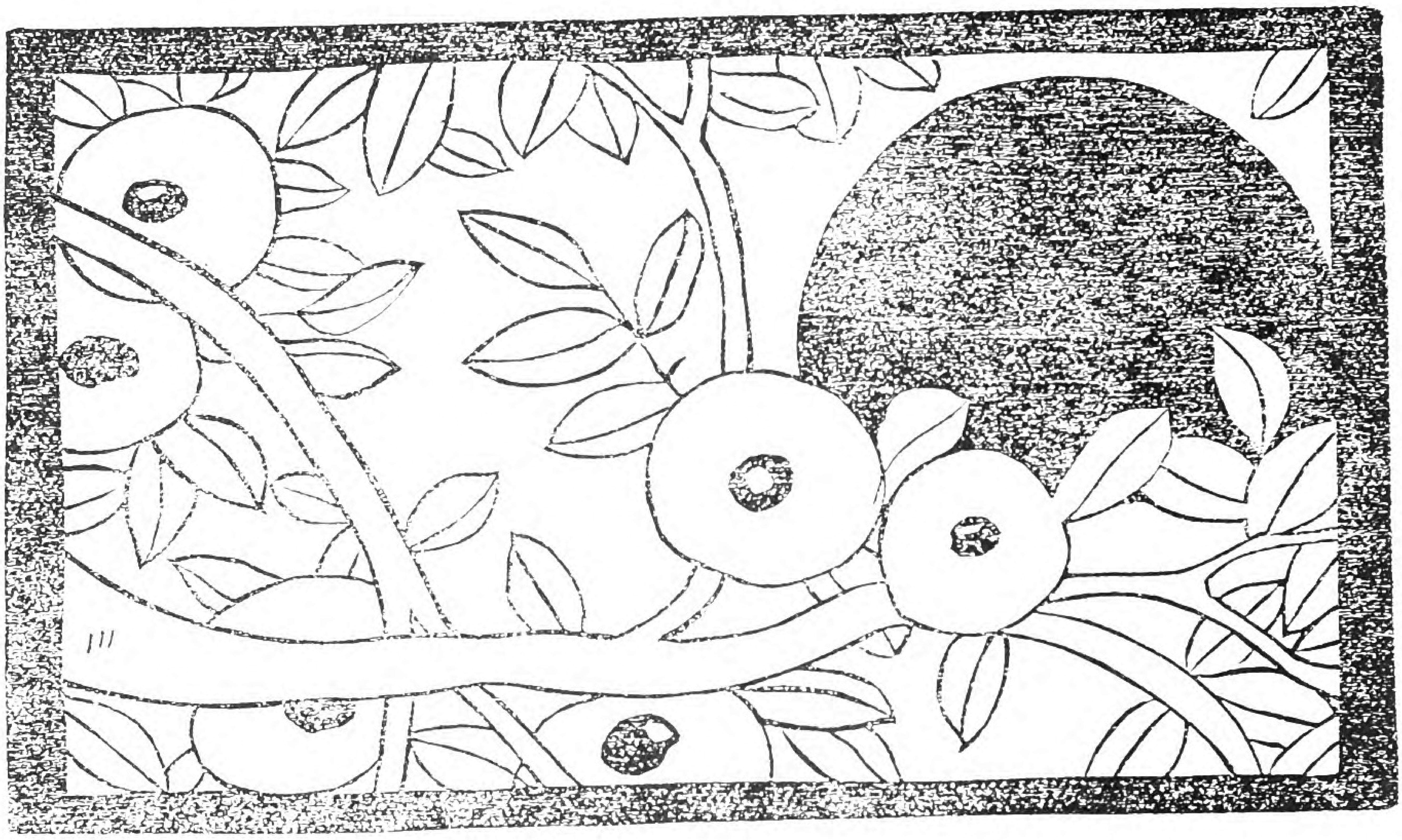
答　洗顔なさつたら、おしろい下クリーム、例へばキセロールクリーム又はスタートクリーム（キセロールなれば水を倍に溶かし、スタートはその儘）を、ムラなく平らに御ぬりになり、其上に鹿のナメシ皮で粉を少しづゝ（一度に多く打つてはいけません）御うちになり、段々と濃くなさるのです、とき水などで煉つて御つけになつては、お化粧が直ぐ動いてムラ〳〵になりますから、若し煉様にしてつけたいと思召す場合には、右のおしろい下クリームに煉合して御つけなさるが一つの便法です。

問　（一）ソバカズの良劑を先生に御調製願はれますまいか。（二）先生の御宅を御教へ下さい。（釧路、愛讀女）

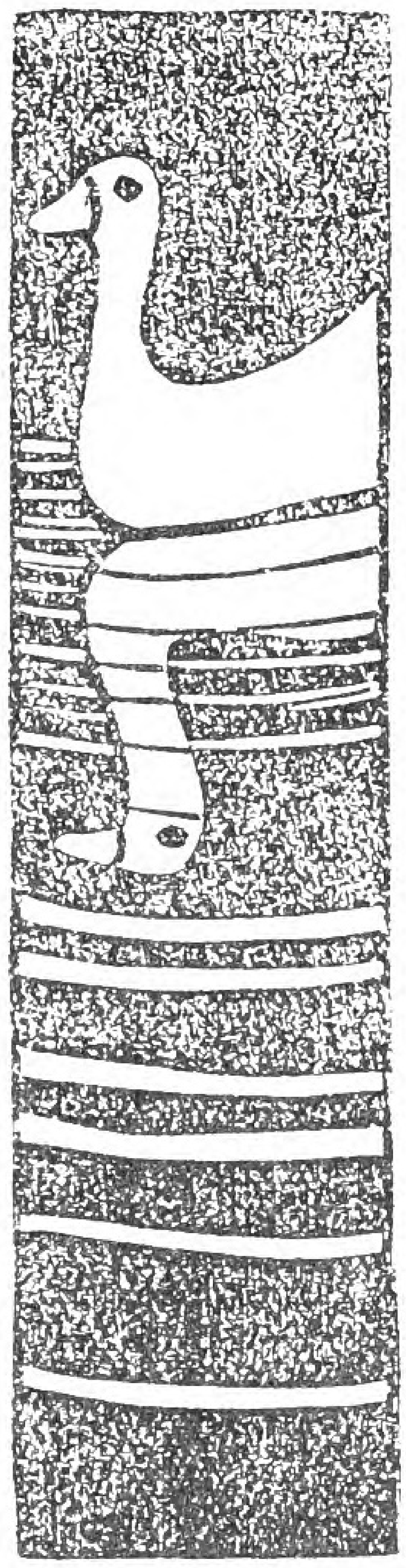
答　（一）おいそぎ下さらないなら、調製して差上げませう。（二）牛込赤城下町です。

問　（1）過酸化水素水の使用を中止致しましても、顯はれた効は保たれませうか、私はこれをつけますと小さな吹出物が致しますが、性に合はないのでせうか。（2）小さな吹出物が顏一面に黒くなつて居りますが、文光堂のニキビ新劑と艶肌劑と、どちらが其黒くなつたのを取るに適しませうか。（3）白色内服用として亞砒酸は何ケ月位で効が表はれますか、或醫師に調劑して頂いて一ケ月程服用致しましたが別に効果がありませんが。（美作、尾花女）

答　さア、それはまだ正確な實驗を致して居りませんが、中止したら何時かはまたもとに歸るかと思はれます、それは鹽酸性のでせう、硫酸性のなれば吹出物する筈はないのですが。（2）艶肌劑の方になさい、ニキビ新劑はニキビの發生を防ぐが主眼ですから。（3）三年位はかかりませう、但し亞砒を服用して白くなるは中毒的に變質するので私は其様な恐るべき大毒の藥を御用ひになることを深く御とゞめ致したいと存じます。



誌友欄



小說

○若き心

水野葉舟選

津山葉蘭

多見之助！さう多見之助だつたわ、ほんとに酷肖なんだ……、お房はかう思ひ出すと何かなしに和りとほほ笑まれた。何時か新聞の化粧品の廣告に出てた寫眞をまあ綺麗な役者！と思つて見たのが、かすかに仄りと頭の底に殘つて居た瓜實面の格構のよい二重瞼のポチリとした小さい口の、面をあり〳〵と鮮かに胸に描出して先の自分の瞳に未だ明かに殘つて居る影と竝べて見てほんとによく似て居ると思つて、さも滿足したらしい氣持で急に懷しさうに今出た所をふり反つて見た、明らかな新緑の植込を透して肉色ペンキの建物が奥ふかに見えるその植込を廣く巡つた柵は正面の門の所で結びつけられて上の電燈の文字なしの白いのが際立つて、或おかしがたい威嚴を見せて居る、浪形の瓦の上に屹立した十字架はコバルトの空にまぶしく崇高に輝いて五色の色ガラスは西日にくる光に美しう照りはえて居た。

初夏の甘つたるい風が人氣に逆上せて少し汗ばんだお房の額の髮をそゝる樣に吹いてゆく、町の向うにうね〳〵と連つた中國山脈の邊りは早や夏らしくぷくぷくと湧いた雲が眞白く鳩の胸毛の輝きを見せて居る。塀越しに往來にはみでて居る新緑の下をお房はクリームの傘を故意と眞深にして歩んだ、そしてうつとりと或影を追ふやうにして居る身はともすれば長襦袢の紅絹が柔かく足にまつはる樣で重ね草履の運びが重く遅れがちになる。四五人前に行つて居る内の一人がふと振返つて見て和こりとした、「如何なすつたのまた辛度くなつたの……」とやさしく待つて居た手をとろうとした「えゝ大丈夫よ」お房は心もち赤くなつてからいつたが直ぐ白い道の上に目を落して紅緒にからんだ爪先を見乍ら歩んだ。友は又のぞきかゝる樣にして「けふのお話しよく解つて？愛の解說つてほんとに好題でしたわネ、あの方京都の方ですつてネ、なぜ京の人は

あんなに男の方でも綺麗なんでせう」傘と一緒に持て居た手巾を長い袂に入れかへ乍ら別に答をうながす樣でもなく獨言のやうに云つた、お房はこんな場合でも平氣で居られる友を羨ましく思つた、何かしら見すかされたやうでそつと面をそむけたがいつとなしに今までのことを頭の中に繰返して居た——。

讃美歌がすんでお祈りがある、それから照會がすむと其人は壇上に立つた、そしてやさしい聲で初對面の挨拶をした。年は四十にはなつて居まい、つるりと白い面に頭を生下りの所をぐつと剃上げて小綺麗に苅つたパッチリとした二重瞼の愛くるしい瞳、女らしい薄い眉と小さい口とが一層面を優しく高尙に見せた、小さい玉の樣にツラ〱と連つた齒の間から正しく涼しい聲がもれる、まあ柔和い人！ お房は頰がほてる樣で胸の邊りが波立つのを覺えた。心もち上向ひた優しい瞳—何人も何んな罪をも許すといふ樣な—恰然後のキリストの畫像のに違はない樣な—を、ちよいちよい頭を上げて上目で見た、そしてその瞳の此方にむく時そつと目をおとした、こんな人にいつも敎をうけて居る人はどんなに幸福だろう！。 眞白いカラーに濃い紫がかつたネクタイ、小柄な體に食合つたフロックまで上品で實際よいと思はれた、何となしに尊い人の樣で、そしてまた慕はしい懐しい樣な氣がした、揭示してある「愛の解説槇山牧師」と幾度も口の中で繰返した、講義がすんで歸るとき云ひがたい離愁？を感じた、淋しい何か手の中の物をもぎとられた時のやう呆然として物足りない云ひ樣のない淋しさがひし〱と身にせまつた。歸るときもその面影が目にちら〱して消えぬ馬鹿な！ 心で冷笑して見たが、やはり胸がやるせない、懐しい！ けれどそれは單に尊敬すべき人何時までも溫顏に接して居たいと云ふので、此樣なことは憧憬の强いお房にはよくある、一寸小説を讀むにしても雜誌を見ても作中の人物に又は作者に、たまらなく懐しくなつて强い印象を殘す、恰度けふはそれより目前に接しただけにより深く强いのだ。

何の刺激もない太平な山の狹い置忘られた樣な町—東都の或詩人はかういつた：：の娘心はこんな事にでも何かのどよめきを欲してやまない若い血を涙立せるのがせめてもの心やりである。

紅や紫に白く染ぬいて、何々君へとかゝれた旗が幾本もはた〱と入口に輕くゆれて居る劇場の角にくると始めの太鼓が浮調子に今のお房の心をそゝり立てる

樣に響いた、けれど「えゝお二人樣で——二枚」木戸の若衆の聲をきいてもいつも程入つて見たいなアと云ふ氣が出なかつた、面の黒い職工や辨當がらを持つた女工が黄昏近い町を急ぐ、お房も氣がついた樣にさつさと足早に歩き出した。

そこからお房の宅へは間もない、常に見なれた町をゆくと熱してた感情がだん／＼常に歸つてくる。と今までのことがあまりはしたない樣で自分ながら耻入つた。と同時にかうした心——何に對しても闘りのない路傍のものに向ふてもやるせない憧れをもつ心を染々と我乍ら懷しく思つた、そして昵と靜かな所で讀書でもするのを樂んで居た身が何か刺激をうけたい變つた事があつて欲しいと華かな所を慕ふ、かうした今頃の自分の心を歌でも詩でも何でもよい、只何かに殘して置きたいと思つた、こんな事を思ひながら、下ばかり見て歩んで居た足はもう自分の宅の前にきて居た。（天賞）

○暗夜

横濱　月草女

まだくど／＼と何か云つて居る。お幸はもう堪らなくなつて外へ出た。星一つない暗黒な魔の樣な空、我家のみ、赤い街燈の光り、うす白い牛乳受函も凡て淋しかつた。迷つた螢がチラ／＼と目の前を飛ぶ、初夏の夜の風は當度もなしに歩いて行く彼女の泣きぬれた頰にひや／＼とあたつた。

お幸は拭いても／＼出て來る涙を拭ひながら、胸を抱いてとぼり／＼と行く内に何時とは知らず、物暗い停車場の前に來て居た。

汽車が着く迄には未だ間があるらしい、いつも威勢よく並んで居る客待ちの車夫の影もなく、待合室とは名許りの硝子戸張りの室の中にも人の子一人もみえない。只うす暗い瓦斯燈の下に煙草を賣る男がぽつつり賣上高を勘定して居る、名も知られぬ此小さな驛は世から忘られた樣にしよんぼりと、とぼつて見えた。

お幸はいつも行く線路の傍に只一本枝をひろげた松の木の幹に身體を凭せ掛けて今更の樣に自分を振返つて見た。

大きく取つた前髪に黒地に紅の格子を染めたリボンも若々しい、水に寫生模樣のなでしてと、紫苑をあしらつた思ひ切り大柄な浴衣、紅入り友染の帶に上方の風を眞似て高くした背負ひ揚げ姿もけば／＼しい。これ



（地賞）初夏　赤坂　中村弘子

でいつもなら銀扇をもつて、
「さ、右の足をあげなはれ」などゝ云はれて御稽古をするのである。それでなくとも物珍らしい片田舍に派出づくりのお幸の姿は、尙の事、目にとまつて、今ぢや町のどこでも知らぬものはない、どこを歩いても、「あれは柳瀨の孃さんだつせ」と振向かれる、それが厭で、都に住む內は兎に角、何だつて私は今、這麼風をしなくちや成らないのか、思ふと辛くて成らなかつた。

又父親は何かクド〳〵と怒つて居る、おまけに病上りと來てゐるので、何かにつけて腹許り立てゝ居る、それを又氣の小さい義母はオド〳〵して長火鉢の灰をかきながらしく〳〵と泣くのだつた。

「お幸さん、私は到底駄目やさかい、別れても父さんの好きな彼の『秋の夜』許りはよう覺えとつてな、いつも舞うて上げとくなはれ」と聲をのみ〳〵やつと云ひ終つて疊の上に突伏してしまう。そのゆら〳〵とゆれる奇麗な襟足を見ると氣の毒で、何か安心させる樣な事を云つてあげたいと思ひつゝも言葉が出ない。

「まあ母樣、何を仰るんです、ほんとにいやな父樣だ父樣さへ默つて居れば、何の苦もない家庭だのに」わざと奧座敷には聞えよがしに斯う云つた。

「さ、機嫌をなほして復習つて頂きませうね、東京へ歸校ると忘れちまひますから」無理に三味線を持たせて引立たせるが、何時もの冴えた聲は出ないで、ポツン〳〵と其音までが、うすら悲しく聞える。日頃端歌自慢の父はわざと當附けらしく「何々式呼吸法」などゝ難かしい本を持出して來て洋燈の下で、聲をたてゝ讀み出す‥‥。

其時、私は堪りかねて扇子を投げだしたなり默つて斯うして飛び出して來たのだつた。

自分は一體此夏休みを何の爲に、こんな所に來たのだろう。

一つには新らしい義母の柔かい情にも觸れたかつたのには相違ない、けれども、心底を探つて見れば、今迄孤獨の淋しさにいら〳〵して內部の苦悶におそはれて居た父親が、ヒステリカルな女に依てどんなに柔かなふつくらした心持を注ぎ込まれて、すこしは餘裕のある生活を送つて居るかゞ知りたかつたのである。

父親は依然父親だつた。

之れに加へて、都から這麼片田舍に引込んだ不平、世の惡評に對する反抗心は尙重なつて、何にも知らな

い妻の上に負はされるのであつた。慰安を求めに來た私は却つて派出な裝ひをして、華やかな笑ひを以て、わづかに二人をつなぎ止める色彩となつて終つたのだ。あゝ暗い家、歸りたくない。

彼のしめつた赤い燈の下には入りたくない、今夜一夜を外で、どうして明さう、あてどもなしにこんな事を考へて又ふら／＼と歩きかけた。

「あれ幸さん、こゝにお出でやしたのか、もう歸りなはれ、な、どないになつたかて、私はもう貴女を忘れやしまへん」柔らかな手はお幸のやせた肩を引抱へて又しく／＼と泣くのだつた。（地賞）

○惡夢

近江　わかば

——はつと思ふと眼が醒めた。お房は掛布團が輕く搖れる位にせい／＼呼吸をしてゐた。夢だと云ふ意識がハッキリと頭腦に浮ぶと、思はずホッとしたがまだ激しく動悸がしてゐた。そつと乳の下に手を遣つて見ると赤い血の狂亂してゐるのを思はせるやうに、たく／＼と心臟は激しく皷動してゐる。此陽氣にスッポリと頭まで布團を引被つてゐたので、顔中がねた／＼と汗に汚れて心地が惡い。此熱した頬を早く冷やかな空氣に觸れて、毛穴に染み入るやうな爽やかな感覺を味ひたい。もう何時だらうと、ふと思つた。眼を上げて窓を仰ぎたいが、いつも惡夢の後に經驗する恐怖に輕く胸が顫へてゐるので、暗い室の沈澱んだ空氣に頬を觸れるのが、魔物に撫でられるやうな氣持がして薄氣味が惡い。がお房は思ひ切つて布團の中から首を出して見た。もうスッカリ夜が明け離れて居ると見えて、曉の白い光が、雨戸の隙間から糸を引いたやうに、幾筋も射し込んでゐる。疊の目が數へられる位に室の中は、ぼつと薄明るかつた。勝手の方からはコト／＼と俎板を刻むらしい音がして、味噌汁の甘いやうな香が、ぷんと漾つてくる。もう朝だ！と思ふと、お房はふいと嬉しいやうな、ホッとした樣な感じがした。此儘斯んな押へ附けられる樣な夜が續けば堪らないと思つたのである。「だが朝夢は正夢だと云ふ……」お房はふと斯んなことを思ふと、又絞め附けられるやうな胸苦しさを覺えた。もし男が心變りをしたんぢやあるまいか、そうぢやない、其麼男ぢやないと思ふけれども、それでも……お房は今夢に見た美しい女が、白い柔かな手で

我は顏に男の手を取つて、につと勝ち誇つたやうに笑つてゐる小憎らしい樣子がまざ〳〵と眼に浮ぶ。今の厭な夢が燒き附けられたやうに、頭腦から離れない。お房は十重二十重の荒繩に縛られて、さん〴〵に責め苛まれてゐるやうに胸苦しい――

お房は布團をはね退けると、驅けるやうに緣へ出て雨戸を引開けた。明るい外光や爽やかな空氣が、惡魔を拂ふ祈禱のやうに、今の自分の此胸苦しい氣持を救つてくれると思つたので。――もう日は高く登つてゐた。庭の木の葉が夏らしい綠色に輝いてゐる。お房は今時分、ガラ〳〵と戸を繰つてゐるのが氣恥かしいやうな氣がした。コバルトに澄んだ空には處々薄い乳色の雲が流れてゐる。じつと其れを見つめてゐると、其乳色が漸々薄くなつて終には其濃い碧色の中に消えて了ひさうな氣がする、一體に邊りの空氣が、しつとりと落ついて水色に見えるのは、庭に青葉の多い故だろう。座布團も敷かずにぴたりと緣に横坐りに坐ると、冷りとした堅い板の冷たさが、熱した足に染み通るやうに心地よい。お房は何だかムシヤクシヤして頭腦の中を、スッカリと掃き出して了つたやうなサッパリとした氣持で、もう厭な夢の事も氣にかゝらなかつた。

お房は足を爪立てゝ棚の楊子を取ると、其れを咬へながら、庭下駄を突掛けて裏庭に出た。紫色の莖の上に生き〳〵した圓い葉を擴げた茄子や、蔓の伸びかゝつた瓜畑をくる〳〵と廻つて花壇の側に出た。斯うして毎朝楊子を咬へながら畑を見廻るのが、この頃のお房の日課の一つのやうになつてゐる。雛芥子が金色を含んだ朝の光線の中に、眞紅な今にも燃え上りさうな色に咲いてゐる。お房は何氣なく其れを挘しつては足下に捨てゝゐたが、ふと「血のやうな色だ」とそんなことを思ふと、又曉方の夢を思ひ出してザッと頸筋から冷水を浴せられたやうにぞつとした。

――「お前は不實な奴だ薄情な女だ」と男に襟髮を捕られたかと思ふと、男の顏は見る〳〵物凄くなつて、芝居で見る紅隈を取つた惡者のやうな顏に變つた。懸命の力をふるつて踠いて叫ばうとしても、ピタリと蓋をされたやうに聲が出ない。咽喉までくるとスッとかすつて了ふ。と思ふと、赤い絹絲を咬へたやうに、粘つた血潮がたら〳〵と唇を洩れる。口が利けないので自分が只ほろ〳〵と泣いて居た。――と見たこともない樣な美くしい女が、浮くやうに現れて、「ほゝ」と笑ひ

ながら男の手を取つたかと思ふと、急に男は平常の優しい顔に變つて、「はゝゝ」と大きく笑ひながら何處かへ二人の姿は消えて了つた。其後で自分は子供のやうに母親の膝に抱かれてサメぐ＼と泣き臥してゐた。ーーー斯うしたいきさつが、夢とは思はれないほど、ハッキリとお房の頭腦に彫り附けられてゐる。それにしても何故斯んな夢を見たらう。男の心を疑ふの何のと云ふことは少しもないのに、それとも自分が病氣でもするんぢやなからうか、そして夢で見たやうに血を吐いて死ぬーーそんな蟲の知らせぢやないだらうか。それとも又男が旅先で、夢で見たやうなあんな美しいいゝ女でも出來たんぢやあるまいか。さう思ふと、男が旅立つてから一二度ハガキを寄越したばかりなのも氣にかゝつてくる、商用で忙しい爲だとばかり思つてゐたのだが、ーーそれで男は自分が邪魔になるので、何處か遠い野の果てへでも連れていつて殺して了ふーー妄想は其れから其れへと擴がつていつて果しがないーー。



（人賞）　藝を知らぬ乞食　　氷室草子

お房はもう立つても居ても居られなくなつた。此儘

氣が狂つて了ふのぢやないかと思つた。

「何うしたらいゝだらう、どうしたら此疲れた心が休まるだらう」お房はもうジツとしてゐられなくなつて御飯も箸を取つたばかりで止して家の者にも默つて逃がれるやうに家を出た。何處へ行かう、何處へも行く處はない。只斯うして白晝の明るい町を歩いてゐるのが可厭だつた。何處か遠い山の中へでも行きたい、靜かなまだ人の足跡の印せないやうな山の中へでも――

「觀音樣へお參詣して來よう」ふと斯う思ふとお房は救はれたやうな氣がして來た。今自分には大厄がふりかゝつてゐる、觀音樣がそれを救つて下さる、別に信仰も何もしないのに、何故だかそんな氣がするのだつた。

町はづれの處々ずりかゝつた石段を登つて行くと、少し小高い岡の上へ出る。櫻の名所で、今は瑞々した若葉の間から碧く光つた湖や、なだらかな曲線を描いた遠山の繪のやうに眼の前に擴げられる。日曜と見えて二三人の兵士が崖が突出した床几の上に、ごろ〳〵晝寢してゐた。お房はそつと御堂の上へ上つた。香の匂ひの籠つた濕つた空氣が一種敬虔の念を起さしめる賽錢を投げるとどうしたはづみか、カチリと靜かな堂内に反響した銅貨が足下に跳ね返つて來た。お房は忍ぶ樣に其處を出たが「觀音樣も、もう妾を救つては下さらないのだ」淋しい裏坂を下りながら斯う獨言ちたお房は、世にも人にも捨てられ死ぬ他には行場のない人間のやうにも自分が思はれるのだつた。

何處をどう歩いたか自分にも覺えない位だつたが、其日の黄昏お房はぼんやり町はづれの橋の袂に立つてゐた。下の沼のやうな青黒い水は、どつちへ流れてゐるとも分らない程ジツとしてゐる。自分が今身を投げたら――お房はふいとそんなことを思つた。そしたら……明日の朝宇治川か淀川か何處かの杭に、青白い顔に褪せた唇をくひしばつた自分の死骸が引掛かるだらう急報を得た兩親の驚愕――悲哀――其れを聞いた時の男の樣子――町ではパツと噂の花が咲いてそれからそれへと擴がつて行くだらう新聞紙は美しい筆頭で自分の生涯を哀つぽく色彩つてくれる――さうしたシーンを思ひ浮べると、今の自分にはそれが最も適はしい美しい終のやうな氣がしてならぬ。

「オイ姉さん何してるんですイ」聞き馴れない關東訛が耳許で破鐘のやうに響いたのでハツと身を引くと、薄汚れた印袢天を着た土方風の男が

「姉さん死ぬんですかい、死ぬんなら俺と一所に死なうせ」と獸のやうな黒い顔に白い齒を出して、氣味惡るくニタ〳〵笑つてゐる。お房は思はず飛び退くと、無我夢中に後をも見ずに驅け出した。（入賞）

階上の書齋より

葉　舟　生

△この頃はむやみと忙しい。僕はまた東京を發つ事が出來なくつてまごついて居る。それで書もろくに讀まない。友人から寄贈されたのを二三冊見ただけにすぎない。雜誌も沁々讀んで居る氣になれない。

△文章世界（六月號）に出た高村氏のセンチメンタリズムに對する話片は時宜に適した忠告であつた。殊に婦人の人が、必ず讀んで考へる必要のあるものだ。同じ雜誌に出た武者小路氏の斷片も、如何にこの人が眞正直であるかと言ふ事を思はれていゝ。

△今月始めて「靑鞜」を見た。まだ見たゞけだが、頗る意氣軒昂だ。今月の雜誌ではその他にザムボアの「勿忘草」を見た。これには頗る失望した北原氏の詩には自在で、面白い處があるが、三木氏の詩は全く失敗だと思つた。

△その外には、自分は正宗白鳥氏の「毒」と、森川葵村氏の「夜の葉」と、溝口白羊氏選の「若き女の日記」外二三冊の書を受取つた。

△白鳥氏の「毒」については、も少し深く考へて見たく思ふので、今こゝには書かぬ。森川氏の詩の中からは幾多の事を感じさせられたが、中で一番しつかりと心に殘つて居るのは、琴歌の持つて居るリズムであつたそれが氏の言葉の中に溶け入つて、靜かに、なよやかな旋律を起して居た。自分にはこれが快かつた。溝口氏の書は二つの意味から全く違つた感じを胸に起させられた。一つは自分の生活の對象として、一つは現代の或る人々の生活の研究の材料として、僕は後者として面白いものと思つた。前者としては餘り低級であつた。

△德田秋聲氏の「足跡」窪田空穗氏の「空穗歌集」もいづれ正宗氏の作と共に讀過の感を書き度いと思ふ。

△さて選評にうつる。

△波の花の「五分間」、極端な誤字と、無考な當字とには讀んでる方が顔が赤くなる。こんなルーズな心持でものを書かうとするのは無責任極まる。例へば、名古屋停車場と書いて「こゝ」と讀ませたのなどは、ミラクルを行ふ氣かもしれぬ。運用停車場（軍用）、軌道演習（機動）なども「すさまじきもの」だ。△波留濃の「手紙」は私信を讀むに近い感がある。さう云ふ點で人を動かす處もあるが、藝術としては、少しも考察がしてない。△わかばの「惡夢」は面白い處を摑んで居る。たゞ心の動きが、鈍く且つ無焰である爲めに、效果が弱い。△新免さかへの「出發前」は暗さがある。中で幻想を書いた處もいゝ。たゞ少し甘すぎるのと、眞に動いて居ないのとが缺點だ。△春花の「養子娘」は幼い作。△ちづ子の「お文」途中で錯雜してしまつた。も少し落ち付いて書いたらよからうと思ふ。しかもこの作も、たゞあり來りの心持が書いてあるに過ぎぬ。それと、この人も言葉をも少し正格にして、いゝ加減な字を書かぬやうにしてほしいものだ。△宮垣はつ代の「不具の子」型の如き同情小說、この作者が頭の中で勝手に悲しい世界を作つて、それを臆面もなく書いたもの、この人の他の一篇「宴會」の方は、少しは見られる。田舍の學校教師の不作法と、下等とを感じた。△靜香の「商家」は何事もなく書いてあるが、さうむげに下手でもない。この人も字が恐ろしくひどい。退屈を大屈、窮屈

をきゆー屈などは甚だしい。△月草女の「暗夜」は何處かに鋭い心の見え始めたのをとる、△いづみの「小さき思ひ」はくづれて居るが、從來の作よりも張り切つた心が見えた。そこがいゝ。この二人にはも少し原稿を讀みよく書いて下さい。と注文する。△長谷川末女子の「お光」は整つて居る。底にひどく道徳的な平凡な處がある。△露の玉女の「みなし兒」活動寫眞に映される悲哀のやうなもの△禮枝の「公園の女」は細々と書いてある。この人の作が少しよくなつた。も少し根本に培ふ心に成つてほしい。何より好いものを書くのにはそれが大切だ。△村雨女の「暗い家」、この一片を透して、その背景になつて居る人々の生活を見る事が出來ない。恐らくこの小さい一部と、根本になつて居るものとの關係がこの人には明かでなかつた爲めと思ふ。△長谷川英の「芽ざし」の前半には眞に生きた若い女の心を見せられた。珍らしいと思つた程よかつた。しかし後半は申分の無い作りもの、低級の興味であつた。呆然としてしまつた△皐月子の「羽蟲」この筆の達者さには感心する。それと同樣に、この作者の心の古さにも感心する。△一女の「悔い」この作は、前の二つよりもしんみりとして居る。しかし、これから受ける心持は、極めて因襲的な道徳の臭ひである。△葵の花の「兄」この人はやはり根本から目が覺めて來ねばならぬ人だ。△月見草の「雪の夜」には、センチメンタルな作であつた。斯う言ふ程度の作の多い事は、この雜誌の爲めに心ひそかに耻づる。△島田京子の「廓より」、山崎翁鳥の「伯母」二篇は一まとめにして見る。「廓より」は型の如きもの、眞の意味で、少しも新しさの無い作。「伯母」の方には、ともかく熟練した處が見える。△葉蘭の「若き心」まだ考察が足りぬ。しかし面白い作であつた。△矢澤榮子の「川岸の家」自分は新しき心を望んで居る。この作は約十五六年前に見る可き心で書かれた作である。も少し、自分で自分を教育して欲しいものだ。△信子の「町の娘」も、一寸面白い。△津矢子の「呪はれたる人」他愛の無い心をその儘に書いたもの。△明子の「死後」この人も達者である。よく書く點に於ては筆は伸びて居る。しかし、その立つて居る足場が、ずつと淺い處に居る。この人に限らず、要は筆先きの巧みでなく書く人の根本の心にある事を思つてほしい。

△凡て藝術はその本體になつて居る作者と離れてはあるものではない。作者の心が、その作物の價値に對して直接の高下を分つものとなるのである。それ故によい生活をして居る人でなければ、よい藝術は出來る筈は無い。私の言ふよい生活とは、よき理解のある心。豐富な智識、すぐれた趣味を言ふのである。

△自分はこの欄で、或る一人の姉妹に、私信の一端を公にする。私の言ふ抒情の詩と言ふ意味は、反省し、考察した自己の感情と印象とを、直接に述べる事を言つたのである。その形は必ずしも詩である必要もなく散文であつてもいゝ。自分の考へでは、さうする事がその心を豐かにする上に、非常にいゝ道行きだと信じられるからである。

（六月二十四日）

○若き妻（つゞき）

横濱　千鶴子

德島屋と大きく書いてある呉服店の店頭にゆるう日が流れ込んでる、暖簾の側にさがつてる、黑地に大きく赤い松葉模樣のメリンスを美麗しいと見た、赤子に着せたらとも思つた、すると今朝生家の母から大變嬉んで、お前の身も姙娠で安全だから身二つになる迄、是非身體を大切にしろと書いてあるお家流の、長い手紙を思ひ浮べた、女に取つて其程子供が

大切であるかと思ふとしみ〲詰ら無い樣に思へた、小さい女子や男の子が不思議に眼についた、少女は其着物や姿が美術的で、可愛らしいものだと次子は思つた、赤いメリンスの着物を着せて白いボンネツト被らせて、此通りを散歩いたらと其樣なこと想像すると、早く母樣と呼れて見度くなつた。



鸚鵡と女　赤坂　嶺田きよ

「オイ彼方を御覧、男子は良いね、あの活潑で可愛いゝ事、隣家の武さんによく似てるね」

ふと其指點の方向を見ると、海軍服着た男の子が父親と睦しく行くのが眼についた、夫の口から可愛いと云はれると何故か次子は其に反對したい樣である、男の子は夫の愛を女の子以上奪ふかと次子は考へると、男の子は可愛いゝとは見なかつたね

「貴夫、妻と子供とどつちが可愛いゝでせうね」

「僕だつて未だ我子の愛と云ふ事には經驗が無いけれど、或點にいつたら子の方が可愛かも知れないね」

其言葉を文子は眞面目に聞いた。

平常の樣に越前屋や野澤屋の陳列硝子をのぞき見る樣な浮々した氣分にはなれなかつた、廣文堂の横を曲つて羽衣町に入つた。珍らしく文子は辨天樣に參詣する氣になつた。安產でありますやうにと小聲で祈つた、側で自分と同年位の島田髷の娘が手を合してた、ふと自分も未だ若いと思つた、先程の赤子の聲や女の風姿を思ひ浮べた、文子は戰慄とした、今に母となつて最う此樣にうかうか出られないと思ふと、今迄に無く夫が可懷くなつた、文子はひたと夫に寄そつて歩いた。

○公園の女

東京　禮枝

明日變るといふ狂言の下浚の爲に、志喜若は常日よりも早めに樂屋へ入つた。「ホウ志喜若さん御早いお入り」。

木戸の若い者達がかう云つて媚びる樣に挨拶すると、驕慢な鼻の先につつかけて、自分達の部屋へ上つて見ると、未だ誰も來ちやあ居なかつたので、チョット舌をならせて「皆何うしてるんだらう、もう九時だつてのに、間に合やしない」と、こぼし乍ら廣い大部屋の隅から隅までを、あの役者らしい表情をたつぷり含んだ大きな黒い目でぐるりと見渡した。

廢頽と狼藉とを混ぜこぜにして、それをまんべんなくまき散らした樣な樂屋の内に、かう一人で淋しく立つて見ると、ふだん仲間の大勢とごたくたゝごまつて居る時には、思ひもよらぬ、荒れた身邊のかなしみと、つらさ、さうしてあてどない心細さを、しみじみ感じてじつとしちやあ居られない樣な氣になつて、何かにまぎらす爲に急いで自分の鏡臺の前に坐つて見た、鏡臺にかゝつて居た、白粉の指跡がちらもなくついて居る布を、つるりとすべらして取ると、向うにうつる目が目に飛び込んでそれから赤い大きな口先のなだらに折れ曲つた鼻、色艶のあんまりよくない、けれども生地の細かい顏、それ等が順序なくべたべたと映り返された。さうした小道具を、こせつかない大きな輪廓が、ふんわりと包んで居る役者らしい、申分のない顏立を、今更の樣につくづくながめて居た「お早う」とふいに瘦せてチョゲチョゲした顏が、梯子段の上にひよつこり現はれた。「志喜さん大變早いぢやあないか。これでもあたしが一番がけのつもりで來たんだよ」と、からだのわりに太い張りのある聲で云ひ乍ら、志喜若の隣へペタリと坐つて赤い球の簪をぬいて、ゴシゴシ頭の中央を搔いて居た。破れかゝつた樂屋銀杏が、グラグラ動いて後へ引くりかへりさうになつても、かゆいとなつたらかまつちやあ居られないらしく無鐵砲に搔いた。

志喜若は一寸ふりかへつて挨拶したまゝ明日の狂言の書抜を、膝の上に乘せて讀み初めた。

「あゝまた明日から變るんだね、いやんなつちまう、折角覺え切つた時分にやあ、もう次のになつて仕舞ふんだもの、やり切れない」とやせた女はこぼした。「なんだね染吉つさん今更らしくこぼしたつて初まらないぢやあないか。あたし達の生活はこぼしたら、拾ひきれやしないよ」

「ほんとさね、今更云ふもぐちなれど……」と十三夜の聲色を使つてハヽと薄く笑つた。が思ひ出した樣に自分の引出から勘定流の小本を引づり出して「うち合せの處だけを一寸やつて見ようか、關の戸の方をね」と膝を、關兵衛になる志喜若の方へねじ向けた。

「いゝの、はじめるよ」と置いて、せりふを云ひはじめた。（つゞく）



○西の緣にて

大分　赤木花子

明るい灯の光りがぼんやり淡れて隣室に忍び入つた時、見つけ出した自己の姿を、思ふ程寥しいことはありますまい。自己の尊さを忘れ、自らの肉の落ちるをさへ忘れて、強い男の腕にすがりつく女ほどみじめなものはありますまい。

——夜のとばりが啜り乍ら押し寄せて來る夕、私は立つてもゐられない、それかといつてじつとしてもゐられない、やりばのない身體を、心を、硬くなりかけた兩手に犇と抱いて、こんな事を思つてみました。

美しう晴れた空に浮び出た悲しい色の雲が、可愛らしう鳴いて巣に歸る小鳥の群れの頭上に沈滯したまゝ暮れて行きます、たゞうすつぺらに、美しいボンネットを頂いた西洋婦人が氷上を滑るやうに、初夏のすべてのものにくつゝいたまゝくれて行きます。道を行く女の洋傘に照づたけれど、その白い肌にまでは達かなつた恨みを殘して……。

暮れて行く日の光を、私は何日も美しい顔の——白い可愛らしい顎をもつた男の樣だと思ふ。高い、平い山の端に入りかけてにつこり笑へば、町の女も、里の女も、嬉しさうに、悲しさうに、じつと見つめる。それがたまらなく美しい!!!

冬の枯れた梢に、青い夏の梢に、顔を埋めるきれいな入日よ、汝はまた小鳥の戀人でもあるだらうね、明るい一日の一人旅の侘びしさを慰藉して呉れた嬉しさに、汝は小鳥を戀する——しかしこれは危險ではなからうか、たゞゆきずりのかいまみに、その愛らしい姿をみた、美しい鳴き聲をきいた、それだけの淺墓な知己を、輕々して戀するのだもの、私は不安でたまらない。

遠い海の彼方に消えて行つた波を照した夕ぐれの光！私はこれを見るといつも昔を思ふ。いふまい、行ふまい、と必ず叫び乍らも、ともすれば自由に動く私の口や手で、どれだけかの行動、幾つかの言葉を、廣い

天地にとり逃したら、私はその爲に何日も苦しむ、何日も泣き出す。冷めてはゐないけれど、何故か私は此の苦しみにとらはれると、早く寢たくなる、強ひて私はねやう、ねやうとあせればあせるほど、心は亂れる。

美しいけれど、いたましい、いまはしい落日の光が照らしてゐる物皆は、夜露のいとほしき情にいきつかんと、涼しい夕風に吹かれてゐる。私は立つてゐた。（天賞）

しどろもどろの節もあれど、鬼に角これだけに考へる人が九州のはしにあるといふことは奇績だ。（評）

○柑子咲く頃

京都　廣江曉子

暮おそき水無月はいとゞ宵のまたれて、暗がりに花柑子匂ふ南の島が思はれる。

我が訪づれしは睦月の終り、京はなほ晝も朝霜の名殘を物蔭に見る頃であつた。

渡舟は和やかに春のやうな波間を分けて、幾年我が想像の中にある尾道の港を、まだ見ぬ姉の住み給へる向島へと漕がれゆく、海の日のあたゝかさ。

圓き山こゆる程に、細き道めぐる程に、夏橙の樹立は黄金の圓をなして現はれ、午過ぎの日ざしのきらゝかに美しい果實の皮肌を流れて、あたゝかに我が心を誘へど旅と云ふはかなさに、樹の幹と我が影と赤土のやはらかな地上に細々と縺れ合ふのを見遣る眼はいつか涙ぐまれて、切ない胸を抱いて半ばゝ夢見心地にあるいた。

かつて見し黄金の樹々よ、今こそ緑葉を雪ととゞめて白妙に花や咲かう、ひろ〳〵と耀きわたり碧瑠璃の空の下に岡をめぐりて銀の河と流れ、細い路を中にしてみ空の星の悉く地に落ちて香ふかともうたがはれ、はたちぎれ〳〵に、こゆるも儘な垣をうづめて若き女の夢のやうに照り合はう、海にゆく道の家々、小さく低き藍染屋の小窓にも、渡場に近き舟大工の家の軒端にも高い香りは潮のやうに漂うて、晝と云はず夜と云はず人々の胸にしみわたれば、高調な夢の中にといざなはれて、渡守る翁が眉もかゞやかう。

さうでも淋しい島の寺の更けてはひとしほ、浦山に風も鳴らぬ夜であつた、眠くはありませんか、と尋ねはすれど、一時が過ぎても姉はねよとは云はぬ。

母こそちがへ、これが廣き世に只々人同じ血をわか

ちし人かと、眉のあたり、髪のかゝり、立ち居の度につく三つの指すらも、しみぐ\と眺められたもの晝の間對ひ合うては言葉もない、

行くと云ふ御手紙を拝見して私もう嬉しくて御堂へ行つて御父様の御位牌に御禮を申しました、引き寄せて下すつたのですもの、今年はおいくつに、「廿歳に」とほゝ笑めば「私はもう三十です」。

父が胸に流れし放浪の血潮故に、二人より無き同胞の一人は尾道の古き港町に、一人は京に生れて、はた



ブツク　神田　萩山　はる

ちの今日迄姉の顔を知らなかつた、まして姉は如何なる人の子かと云ふ事すら今宵迄知らなかつたと云ふ、明日は打連れてまだ見ぬ父の故郷を叔母を從兄を、福山在の山ふところに訪うと約した。

尾道はさらでも低き歡樂の港、沖の島により漕ぎ寄る船は絃歌の中にむかへられて、詫しい夢の明けがたは又遣る瀬ない歌に追はれてこぎかへる、いやしい家にもらはれて紅燈の下に髪のびながら、長ずる程に淺間しい周圍にそむいてやう〳〵に身を全うした姉の過去と、十四の

春に父を失うてからは貧しい中に老ひし母とはかない針先の業に便りない命をつないで、二十歳の今日になりし私と、語れば互ひにつきせぬものを心にそまぬ榮華の世より、聖き尊き悲痛の境に泣かんとは何時からか知らず我が胸にひゞけし聲である、逢うて見れば姉の胸にも同じひゞきの通へるを知る、その體に錦まとへとはいのるまい、汚れざる心を一すぢに信ずる道に行きませと云ふ、初戀をつらぬきをほせし姉の眼の中には父に似て火のやうなひらめきがあつた。八重紅梅の花咲く日、別れては又何時逢ふとも知れぬと云へど私は歸つたのであつた、二人の髪をてらしたにぶい洋燈の灯よ、今宵もあの窓の下に姉の子の寢顔をてらすやら。

　門前に林をなした夏燈の花さく頃は淡い光りをしたふて野から集ふ夏蟲の羽ぶるひもかをると聞きしを。

（地賞）

「よ」をよく使ふ所ははやぶさに似てゐるけれど、閲歴の豐富な點に於てはずつとはやぶやさを抜いてゐる、殘念なのはこれを回顧の文とせずに姉を尋ねて行つた一夜を現在に置いて書いてほしかつた、芳烈無類なる橘の香は長く人を酔はしむるに足りやう、けれど癖が有る才人才にわざはひされずんば佳。（評）

○まづしさ

丹後　譽田順子

どうしたはづみか、絲屑を、噛み、かみ、ポッタリ投げた瞳に、ふと、自分の前の机の引出の銀色の、金具の中に、私の、今解いてゐる、紅絹の裏が、うつつてゐるのが、寶玉か何かの樣に美しく見出された。自分の顔も、ボッとふくらんで、はまつてゐる。

　私は、妙な處に美しいものがある、など思ふて暫く眺めてゐた。けれど、それきり何の興も湧いて來ない。もう何をみても興を覺え無い程、馬鹿になつたのかな!。とかう思ふと、又ぐつたりおなかを折つて、のしかゝる樣に机にすがつた。

　何をする氣もしやしない。食ひたくもない、ねたくも無い、男とふざけるのももう澤山だ。かう思ふと今朝何か、ブリ／＼して出て行つた男の顔を思ひ出した。何樣してゐるんだろう、プリ／＼して出て行つてももぐりこむ馴染の女の無いのが淋しくは無いかしら。野を歩いてるのか、街をぶらついてゐるのか、もう歸るんだらう。今歸らなくつても夜になればきつと歸るのだ。かう思つても、男が、をこつて部屋中取亂らかし

た、新聞だの雑誌だの着物だの、帯だの、取片づける氣も起らない。たゞ、こんな女と棲はなくちやならない樣にした男其物が、如何にも可愛相でもあり氣の毒でもあり馬鹿らしくもある。男自身もきつとそんな事を思ふて涙ぐんでゐるであらう。私だつて同じ事だ。逢ひたくて逢ひに來たんでも、男が欲しくつて追うて來たんでも、何んでも無い。來なければ、濟まなくなつてやつて來たのである。あゝ、もう二年前になるのだ。泥棒をして迄も男に逢はうとして、夜の神戸に上らうとしたのは！。父の貯金の通帳を引出した事もある。質屋へ行つた事もある。お七の樣な物狂しい胸を抱いて私はたゞ、金の無い爲に、男に逢ひに行く金の無い爲に、あせりに、あせつて、苦しい縄で、自身を、しばつてゐたのである。たゞ、そんな時もあつたのだ。それはもう二年前の事なのだ。もう逢ひに行く事は忘れて忘れて思ひもしない時に、ボカンと逢はねばならなくなつて逢つてしまつた。夫婦になつた。ちやんと盃とか云ふものさして貰つたのであつた。これ程詰らない事があるもんか、阿呆らしくつて話す氣にも書く氣にもなれやしない。男だつてさうだろう、さめきつた二十女を妻君にするには男はまだ、まだ、若いのだ、可愛想に——。



雛　朝鮮　照葉

　隣の妻君が、何かゴッゴッ刻んでる音がする。今朝じやが薯を買つてたから、大方あれだらう、自分も、買へばよかつたのに——。

　机の端にこぼれた茶に半分程濡れて、原稿紙の破片が、ひつついてゐる。「まづしさを嘆かぬ妻のいぢらし

さ言葉すくなに今朝も物を縫へり。」となぐり書いてある。あゝ私は、貧しさなど、嘆く暇は無いんだ。

紙入をはたくと、五十錢銀貨が、落ちた。後は銅錢ばかり貧しくでちやついてゐる。（入賞）

自分はこの君のいへる男――碎けていへば順子さんの旦那樣を知つてゐるし、二年前のさわぎの事も知つてゐる、これだけこの評をかくに困る。（評）

○柘榴

伯耆　ふみ子

緋鯉が、ふはり、ふはり、鰭を動かして、扇形の泉水の中を、醉ふたやうに泳いで居る日であつた。

杉の若芽が不規律に生ひ茂つた生垣にとりまかれた庭は、楓の軟い綠の葉や、堅い葉の濃い綠の椿や山茶花や、取り混ぜて庭木が欝蒼としてうす暗かつた、ダークな綠の蔭に、柘榴の赤い花のみが、美男の前に額づいた少女の樣に、可愛く咲いて居た。

明かるべき子供心にも、兄さんの遊蕩――一家の不和――嫂樣の涙で瞼のはれて居る顏――

こんなことを思ひながら、赤い花の柘榴の木の下に、獨りしやがんでホロリく、涙を赤い前だれの上に落して居た。

と築山の向うの離室で、はげしい叱責の聲が洩れた。續いて、すゝりなきのかなしい聲もした。懲歴ことに神經過敏となつて居た妾の心は、蒼く血相の變つた兄さんの顏と、いたましく泣きくづれて居らつしやる嫂樣の顏を、直ぐ思ひ浮べて、胸の動悸が俄かに打ち出して、ぶるく身が慄ふのであつた。

やがて、離室の二階の障子が、スーツと開いて、ぼうつと現はれた顏は……上氣した櫻色の丸顏の嫂樣の顏だつた。まぶたが赤くなつて、小い瞳に見えた。細くて長い弓張月のやうな眉と、漆黑の銀杏がらこに、眞赤い鹿の子絞りの手柄と、朱色の前髱が、可愛くうつつて、白いうなじをうつむけて深い物思ひに沈んで居らつしやる、十七の若い嫂樣の顏は、ちやうど浮世繪に見る女の顏そつくりだつた。

妾は、いつまでも、いつまでも、妾は此の嫂樣の顏を見つめて居た。

柘榴の花は散つた。青い小い實が出來て、日にあひ雨に濡れ、風にもまれて、黄褐な皮が開いて、蜂の巣の樣に重なつた赤い實が、現はれる頃、嫂樣の姿は顏は、妾の家では見ることが出來なかつた。妾はやつぱり、毎日のやうに柘榴の木の下で、浮世繪のやうな嫂樣の顏を、慕つて泣いたけれど……

住所姓名を書いてないから當然沒書にすべき筈なれど、今度だけ助命する、少女を乙女と書いたのもいけません。待合の女房をおカミといふからとてゴッドと呼ぶ者は無いでせう、乙女は人間のことではありませんよ、が此一文は珍らしく美しい出來です。（評）

○樂屋にて

橫濱　彩羽

それは華かなるアリトレスウルームとしては、あまりに靜かで御座いました。然れど、流石空氣は紫、紅に色彩られて、不思議な程肌ざはりのいゝ、和らかき針を通して流れ込みました。

ずらりと鏡臺の前に坐つてる皆さんは、何となく、いたくくしく見えたかね子さんが時々美しい白い齒をみせて笑つて見る。赤い友禪に達卷した律子さんが「今日は……あんまり御無沙汰したから來ましたのよ」。やせぎすなくつきりと、透き通つた程白い浪子さんとドアーの外にあらはれた。そして私を見てかろく會釋した。口元にたゝへた笑は、わざとらしく見えた。午前の新しい日光は、此高い建物の窓に映えて、白粉の香がかろく漂ひ出ました。

虚榮の塊とたゝかれても、依然として舞臺にお立ちになります皆様を見て「どうせ心の腐つた女だもの」と、おつしやる方も御座いましやうがたしかに、其内幕には驚くべきツルーがひそんで居ります。

嚴格なる家庭に養なはれ、シエターと云ふものに、足踏した事もなく、何の素養もなくして只藝術を、愛するの念を持ちて御入りになつた方もありましやう。一週間と稽古せず舊劇新劇共に、舞臺に花を咲かせる皆様は、誠に御心強う御座います。それを〱長き間お稽古遊ばすときく須磨子様のみを、或一方からみて第一流のアクトレスと、おつしやるのも、あまりだと存じます。人形の家のノラ故郷のマグダからみた須磨子様は、誠に慕しきヂエニアスアクトレスだと私は存じましたが……。アクトレスと云ふ言葉は蔦藝に達して優であつてこそ……。かく子さんの樣な方。さげ髮にふるへるリボンのまだ〱何も知らない自分の影に、思ふさへをこがましき事を……失禮御免遊ばして……。

これ藝術家の嫉妬のみ。第一稽古を積んだ松井須磨子さんばかりを人がほめるのはあんまりだとは無理でせう、村田かく子さんよりも森律子さんよりも事實いゝのだから仕方が無い。（評）



新婚　麻布　上田菊枝子

○月の夜に

備前　勿忘草

「君今年はなア、必ず大雷が鳴るぜ」「ほんまかエ、君、いゝ加減なことを云つてるんだらう」

「ナニいゝ加減なもんかあのなア――とグッとつばを飲み込んで――梅の花が下へ向いて、咲いた年にはキッと大雷が鳴るんだよ」

「フゝン君は年寄の子ほどあつて、仲々常識に富んでゐるな、全く天文學者だ、ハツハ、ゝ」と嘲るやうに笑ふ

「ナニ馬鹿にするないほんまサ」と一人は肩を聳かした折柄、けたたましい音を立てゝ、一臺の自動車が通つたあとは只、靜寂たる夜氣に立ち返つた。

私は、思はず肩に袖打ち掛けながら空を仰いだ。

鏡の如く澄み渡つた大空に今し十五夜の月は煌々と沖天に懸つてる。

兄さんと、私は前後して、やつと河原へ降りた。白い砂原の上に、をかしな形した松を見る、恰度疲れし旅人の憩へるやうな風情である。

七擒八縱

張三

法師が一杯に捏ね廻したあとだから、ろくに來はしまいと思つたらどうして投書は月毎に增すばかりだ、結構は結構だが、住所姓名を書かぬのが十中六七にわたるのは不思議である、狀袋には書いてあるだらうけれど、それは私共の知らぬ事だ、以後斷然沒書にする。第一にこれを斷つておいて、さて見初めよう。▲母、茨城、翠松子、「退屈さに目をやつた額のガラス板に赤い影をみとめた、庭のさつきが咲いたのだつた」▲窓に凭れて、尾張、うつせみ、「櫻蟲の蛾だらう、鼠色の翅に黑と白の斑のあるうす汚ない蛾が動かうともせず枯れかけた枝に止つておる、そとつツついたら？▲巫子、金澤、紅子、美しき幼き思出の一、イヤミが無いだけも快い、▲亡兄の手紙、九戸、海棠、溺愛なる所謂妹に所謂兄の書いた文。▲出發の朝、秩父、桂の葉、昔母の懷に安らけき夢を結んだ末の子は丈のびて今母を凌ぐこと二寸母を抱くやうな大女となつて了つた▲土鍋、福岡、孔雀。お米だのおした地だの持寄つて土鍋で煮たきした少さい時、あゝ其夸りよ▲行く日、大分、みどり。落ち行く日の炎の中に我は今くれて行くと叫ぶ聲がした。おてんと樣が口をきいたのでせうか。▲戀さめ、淺草、「戀を戀して人を戀することのできない自分、絕えず僞に苦を感じてゐた我戀、泣くべき時にすら笑ふことを知れる私がどうしてお七になれませう」どつちがウソか知らないが私の戀を受けて下さい苦しいんですよ僕のハートの響が聞えないのですかなど、言つて來る馬鹿野郎にはよろしく肱鐵砲を向けることゝ▲執着、京、白菫、蛇の如く纏はりつく多くの男子を罵つて意氣昂れる人有り、「僕は一生を貴女の爲に誤られたもう理想もへつたくれも無い、此頃一杯三錢のコップ酒ものみなれました女も買ふ、と愚なる男よ、」然り三錢のヤス酒に憂をやる位の男ならおさんどんが釣合ひますね▲不得要領、備前、勿忘草、小說を借りて見たらうと先生に責められた記事也▲二年ぶり、高輪、もり役者らしい人達に隣つて本鄕座を見た、それつきり▲秋の女、戸島周子、破鏡の嘆而巳▲青葉の日、靜岡、水の花、土藏の廂から羽蟻の飛出すのを見つけた所は大手柄だが、あとは何のことか分らぬ▲切れぬ緣、本所、かすみ。お安くない散步の記です、いくら法師でも追付きまい▲藥師堂へ栃木、里の花、子供等をつれて藥師樣へ行つた先生の記、お骨が折れます▲友に、多摩、芳子。江の島の棧橋を渡る時お婆さんが浪を見てなむと言ふのですもの、今が盛の私でさへとあるが、何が盛りなのか▲呼子賣、芝、石井まこと、はじめて上京して何にも驚きはせぬが柳の下の呼子賣が可愛くいぢらしく戀しくなつた、「呼子賣とは報知をかゝへてゐる子の事だとは案外ならずや▲友へ、金澤、淸岡千草女史、學校からは呪はれ友からは棄てられて歸國する、何の面目ありて父母に見え村人にあはう、ひさ子樣泣いて頂戴▲思出、土佐、橋田紫蘖。螢を捕つてくれた姉さんはかへる道で、この世の名殘世の名殘死に行く身を譬ふればとうたつた、蟬が鳴いて梢を離るゝ花の如く姉さんは夢の國に去つた▲田舍少女、下妻、大久保芳子。下妻は夜雨の生れた處でせう、私も三四度たづねたこともあるから筑波山のケントウ位は知つてる積りだが、下妻が山又山の中に在るとは少し意外ですね、尤夜雨も中々ホラ吹きで、ゆるき流れに花散る小磯邊堤の櫻川なんて歌つたけれど、櫻川に花なんか一本も無かつた、尤筑波山だけには降參した、海拔三萬尺は確にある私は中途で足が棒になつちまつて餘つぽど白瀧へ入水しようかと思つた▲かたり、和泉、西村菊、許嫁の君が東京からいらしつたのかと思つたら育兒院のしやぼん賣だつた、三十四錢で買つたのが六七錢の物だとは知らなかつた。あれ丈の風采があつてあれだけ口が廻るのだに、なぜ慈善の名の下にかたりなんかするだらう▲先生、平井、からさき。星が岡の

誌友會に詩を朗吟した幼い君がもう先生になつた▲死のさかひ、城南、鈴枝も一息、▲友に、しづ子。小さきハートのなやみは若き乙女の膀であるから紅の血を紅の人にお求めなさい、而して盛んに泣き大いにお笑ひなさいと勸めてゐる、浮氣をしろと言ふ者も無いもんだ、ハートのなやみは乙女の腔(また)だといふのもチト▲雨のサンデー、澁谷、小林和子。意外の意外が寫つた時活辯先生私は少々こゑわづらひを致してをりますからと言つたのでお腹が痛くなるほど笑つた」こゑがこえか、それともこひか、活辯先生のこひわづらひなら三十錢位で治るでせう▲自働車、赤坂、春江。自働車が水菓子屋の店先を通つてさつと夏みかんや林檎やばなゝや苺やの上へ泥をはねかして過ぎ去つた、それ吉ツ番號を見ろと主人の目は光つた」１番なら岩崎のだ２番なら三井、どつちにしても損害はとれますね▲病、千住、白妙女。自分の病氣の爲に身代が傾くのをなげいたもの、天有不時風雲人有不測災禍、かなしむ勿れ▲指、栃木、吉屋信子。故有りて評せず▲一葉さん、姫路、九十子。男と別れうとしてる女に、一夜來よわが愛するユダヤの女の油繪の下であなたの爲に語りたいことがある、と呼出しをかけたもの、女が女に金線の共鳴とやらを求めてゐるのはをかしい▲嬉しき人心、はりま、うすみどり。兄の教子だつた人がばらを持つて來た、刺ある花は佛さまへ上るものではないと言ふけれど、人の心のあつきに泣かれる▲別れた人へ、姥捨、千夜。眩惑するほどつき纏つて、花よりも美しいの、花の間から透いて見える顔がいゝの、全くチャームされるよなんて言ふの、丁さんが無かつたらきつと迷はされるかも知れません」迷はされるかも知れないと斷つてゐるだけ面白い、丁君たるもの氣が氣ではあるまい▲結婚、仙臺、忍草。井村さんが伏見の娘と結婚するのだよと笑ふ、井村さんも男らしく無いわ苟も赤門出がと私いふと、章さん僕だつて貰ふよ金はいゝからなア、あら憎らしい、アハヽしかし二つ貰ふと慾が深いと言はれるから金だけ貰つて娘はかへすよだつて▲黄昏時に、不冬缺、鐵道院の娯樂室にも赤々と灯は輝いて人影がチラチラする、じつと見てゐると若い男の笑聲がどつと頭の上に起つた驚いて見上た窓に金釦の人が見下してゐた▲たけなが、靜岡、すが子。人形では物たりなくて友の髮を赤い櫛で逆にとかいては痛いといつて逃られたこともあるあゝ私は母となれる女ではない、處女のまゝ消ゆる淸さを思ひ上りもするが、獨り逝く寂しさも悲しまれる。

秋武内るい

▲さめかけて、越後、木村つね子。「馬鹿でもよう御座んす不孝者でも冷血でも無神經ですつて今更そんな事を被仰らずとも無神經は私の看板ですよ――看板なんですよ無神經でなくつてどうして此境遇に今の今迄たつた一人の母のために母のために？あゝそれも女心のあさはかさ今となつて過去は云はぬ云はぬけれども？母樣さへさう被仰る樣なら私は疾に――何んと云はれても聞えませぬ私の身體は冷たい冷たいむくろ？むくろなんですものとは云へ此まゝ沈みゆく魂を冷えゆく血潮をじつと見て居ることもなし得ず悶え悶えて――」十四歳半の人がこれではこまる。▲南國より、ゆり香、漂泊したい、彼の巡禮の子等に交りて」漂泊もヤスクなりました▲わが叫び、栃木しのぶ。空々漠々▲女工、木曾、月見草。女工は哀れなものとだけでは駄目▲孤、京ばし、白蘭。婆や母さんの死くなつたのは何日だつたのと聞き出したのには驚いた、七つか八つなら知らぬことと▲蜘、近江、瑠璃香。御飯の時お茶碗の底に蜘がへし潰されたやうになつて入つてゐたのでぐつ〳〵と突つかける御飯をまさか吐くわけにもいかず、喰べは喰べたがと書出してあるから、これは花嫁で姑と一緒にたべてるのだなと思つたら何の事だ、蜘に最大最上の同情を寄せて無慮千九百字足らずの文が出來てゐる。私は今晩奥さんに一本おねだれしなきやお箸がとれさうもない。

▲「いづこよりいづこへ行くか大空の白雲のごと君と別れん」明日は島を去らんとして行李を整理したらなつかしき人のうたが出た、あゝこの小さな紙片(渚の女)下らぬ歌ぢやありませんか、ちぎれ〳〵のよこ雲見ればさまと別れもあの如く、昔からある。

▲なつかしい南の島に御靜養なさる君よ！その後の御經過は如何？御近況をもらし給はり度日毎にまちわぶる此身あるをはやお忘れたまはりしか過日のお玉章に不治の病なれば此身をよになきものと思召し身も心も健全なる人に嫁げとあつて私は泣きましたよ涙あるかぎり……（紫色女）涙あるかぎり泣いたといふのはよいが、新聞の廣告などにも肺病全治法や肺病患者の奇藥があるんですもの、何卒悲觀など遊ばさずに……と書いてあるのが滑稽だ、田村さん僕は肺病だ天なる哉命なるかな到底助からん。へいさうですかお氣の毒ねといつたやうなかたちだ」同志ならも少し熱がありさうなものだ▲何だか今すぐ白い鳥が私を迎へに來るやうですわ白い砂の長く〳〵續いた海に、浪は喜んで私を迎へてくれます海！海へ私は行きます、さらば!!!（岩崎千代子）弄文の一▲六月日記、牛込、花山院貴美子。花山院といふ姓にまづおどかされる、松平の姫さま本家のあつ麿さまプランタンカフエー、エプロンの君、エス、そして毎日ＷＣのお掃除をするのだからウソのやうです▲西洋人形、羽前、長澤みや。日がヂリ〳〵あつくなるにつれて私のからだは次第にぐたりとして骨の無い蛤のやうになつて」骨のない蛤とわざ〳〵言つたのを見ると骨の有る蛸入道もゐるのでせう▲田舍少女の一日、鹿兒島みち枝、かがんでゐれば麥の芒で目を突く、からだ中がハシカイ、急げば鎌はいつも狂ふ、汗はぽた〳〵おちる、麥は土塊のついたまゝ拔ける麥は拔くものとは知らなかつた、われ〳〵都會人は災なる哉。▲憧るゝ微笑、福岡、野見山輝。ある店を通るといつも微笑して挨拶する人がある、男とも女とも無い、貴樣キサマとあるが九州では敬語と見える▲戀の蠅、深川、矢澤榮子。蠅の交尾をうつす▲短夜、周防、財間濃生、經木眞田を編む記▲半時間、神戸、小夜。街頭の一角に立つて寫生をこゝろむ、手法巧也▲笑ひ、酒田、蓼子。寺の孃さん交り三人して牧師の許へ行く途中ハイ的を訪ねると湯から飛出してふんどし一ツで話しをした。皆くす〳〵と笑つた、何で笑つたんだか門外漢にはわかりません▲わが心、渡島、安子。家の爲人の爲に定められた人を癡人となりし故にすてゝ外面のみ初戀を裝うて人妻たらんとする今日！▲暗影、上田、佐藤、幸。穴の明かねい錢はようではずかと安チャンが吐鳴つてるいつか天理教會の小供の草履を持て來て父親に叱られてベソかいてた顏を思ひ出す▲はつなり、陸前かよ、母樣が今年は初生だから大きくなつたら叺に入れてあゝ重いあゝ重いと背負て歩くと來年はうんとなるといつたので、それは淸ちやんにさせることにきめる、一つ生えても二斗五升入の叺に入れてあゝ重いあゝ重いといふんだねとをかしがる▲停車場まで、龜岡、貴世花。一足先にと祖母樣の出なすつた後急いで着物を着て姿見の前に立つ、淡くはいた白粉をはれださうとて青軸の紅筆に唇を彩れば理性的な面が濕味を帶びてほんのりとうつる「いつてまゐります」と輕く母樣に御挨拶をして家を出ると冷い朝の氣がセルの衿元にひた〳〵としみこんで來る、形原神社を橫ぎつて靴屋の角を廻るともうそこになつかしい母校が見える、新綠のみづ〳〵しい色に守られて聳え立つ白堊のビルディング!!!ふうはりと垂れたカーテン一重に世を隔ててお前は短い歡樂の日をあたへてくれた▲胸、浦賀、豐女。「感心〳〵とか君あれが純下町式かね――などと云ふ聲後に聞き流して二尺の袖のゆれる度に袂の中で、瓜がかち合ふ拜殿の前にぬかづひて合掌するいつものおいのり若い少女の此姿人は何と見るでしやう――うつむき加減に段をふむつま下一寸つまんであちひ〳〵橫じまのねずと黑のはでなモスのかるい裾をさばく、白い足には神代杉のはき物今云はれた事が胸に浮ぶたゞ一重に弟の成功をいのる私の心、せまい小さい氣のこの町の人は社の鈴の下紐につかまつて降りる私の姿をあだな、みだらな氣でひがんで見るのですもの私はかうして、琴のけいこに來るのさへはゞかつて參詣するのさへ氣をおいて、やつぱり私は下町の娘、うか〳〵と三絃におどりに日を送る者だつた。」美しき人らしい▲鏡、橫濱、島田京子。獨りぼつちなのが悲しい、夜中目をさまして自分以外に何者もゐぬ蚊帳の中！獸でもいゝ生有る者がほしい、母は戀しいけれどすでに幽明をへだてた男！男！青い顏白い顏印象が纒らぬ。ふと、枕元の鏡に自分の顏の映るのを見た、鏡の中に私があつた。私の外に私は幾人もある、私と同じ瞳が青く光る」

詩

河井醉茗選

○五月の詩

神戸市　足立　春子

吾を疑ふもの
近づかず
吾を嘲罵もの
遠く去れり
心地よき一日
ことに
夕暗はよし
バネ入りの睡椅子の上に横はり
すゝり泣く大空を見やりてあれば
吾心おだやかに
黄なる夢路を
暫し逍遙ふ……

細雨は靜かに
眞白なる卯の花と
うす蒼き夜の瞳にふるへつゝ
平らなる胸底に
うれしくもしみ入り
花の香の
おとなしう漂へば
五月の闇のなつかしき。……(地賞)

言葉少なに、充實した感じを表はしてゐる。女性通有の短所を此處まで破つて來た努力は多とせねばならぬ。(評)

○黑きけむり

橫須賀　美　範　子

打ち下されし槌の下より
顫ひ出づる鐵板のなげき
そを他所心なる職工の青じろき顔に
カンテラの焔より逃れたる油煙は小
蛇となり
執念深い魔女のよに――ゆらぎては
彼の顔にまつはるよ
一日を閉されし闇き工場の一隅――
自暴自棄に打ち下しては打ち下す槌
と腕のふるひ……と……
彼の黑き顔より來るかなしみ
『休憩』の笛なりひゞくとき
沈默のうちに投げ出す槌の上よりも
るゝ黑き吐息は
烟の如く工場の空に舞ふ(人賞)

強ち材料が變つてゐるばかりでなく、或るものを摑まうとする努力が見える。(評)

○林

栃木縣　東　雲　女

緋衣の僧

麗かな初夏の日の晝と晝とを
觸れ合ふてるしんみりとした林――
紅白青の花はぼんやりと夢みてゐる
その裡をさまよふ僧の緋衣を着た
淋しきスタイル………
オヽなつかしの木蔭の花よ
お前は思ふ存分に日の光を受けた
いと願ふてゐるの――首垂れて力
なげに――

鳥

何故この林の中で鳥が啼かないの
だらう、森として靈もしづかに

あゝ小鳥はきつと緋衣の僧を怖れて
啼かないのだらう
鳥も花も草も木もみんな現世の
ものならぬ幻のよのものなるに
ひとり僧のみは鐘樓傾きて
法敎頽れたる下界を捨てゝ客と
なつたのだ
さらば何故鳥はなかないのか——
何故花は疲れたのか——
僧語らず鳥啼かず——
花つかれたる靜寂の幽森……
夢の世か—幻の世か——はたこの世なるか——

個性の表現といふことを重んずる人らしいが其上で能く詩と云ふものが分つてほしい(評)

○逢ひに來る影

豐後　吉田夕草子

夏淺き日の暮れ方よ!!!

涼しきなやみ切にして
心は影をさし招く——
哀しき愛に誘はれて
あれ、あの影は逢ひに來る………

あつまる暮れの美はしさ
輕く流るゝ涼風に
あの山越えて、山越えて
河いくつ越え海こえて?

やさしき影は現はるゝ——
みちて動かぬ寂しさに
縋みの味もいと深く!
偲びねに泣く汝が胸に
暮れの悲哀は押し逼る!!!

涼しきなやみ切にして
あつまる暮れの美くしさ

汝が肉體の靜けさに——
凝れる汝れが窓の血に——
——吾が靈肉は溺れゆく——
……………………
凝視る暮れのはかなさに——
心は影をさし招く——
哀しき愛に誘はれて
………あれあの影は逢ひに來る——

ロマンチックな考は分つてゐる、けれど浮氣でいけない、誠心誠意で物を言つてゐない、詩を作つて居ない、戯談なら戯談で可いが、眞面目な思想を輕はづみな戯談のやうにして了ふのは作者の爲に取らない。(評)

○幻の聲

在北米　卯の花

音もなく更けゆく夜半の靜けさ
壁の隙から漏れて來る冷い風よ
私の眠顔を撫でる冷い手で
窶れた私が夢を掠めて行く

かゝる時私は昔は昔を追懐でゝ
やはらかな絹檳の戀しく
それかあらぬか心の獻歎は波打ち
又してもぬらすペエローカバーを

眠れる瞳にうつれる迷宮のステーヂには種々の
形せる
幻の群とわが靈との覺束なき角鬪
か弱き此の手で掻き消されようか

何所からか此の疲頽の胸に來たる數知れぬ多く
の亡靈のさゞめき
鋭いチスの頭をハンマーで打つ音心臟の血潮の
狂ひ流れる音とが
胸のどこかにひそみなく

かくてわれは此のまゝ眞の夢路を?、此の凡て
のうごめきと、音は、私が生涯を破るそれか?

ごつ〳〵してゐて詩歌らしい柔かさがない。(評)

○黄昏の歌

德島縣　山ざくら

晩春の色褪せたる黄昏の空より、
ア、日は落ちる。日は落ちる。

怖ろしきたわれ男の接吻に疲れたる吐息の樣に
薄明りの空に啼立つ青鷺の柔かき胸毛の顫への
樣に、
はた暖き慈母の灯を慕ひ行く白痴の瞳の樣に、
光澤の失せたる乳銀色の光は、
幾條となくなやましげに、
震へつゝ降還ぐ。

平坦なる白き石塊の一物もなき緑の草の上を、
靜かに踏めは、
美しき露の光は水銀の王の樣に、
するゝと轉ぶ。
たゞ一人わが若き日のローマンスに醉うた心に、
慕ひよる仄かなる歎を聞けど

……、
はぐれし魂はひそびやかに薄笑ひを齎せる。

かくて草のまはりに、
鶯色の毛蟲の重き眼瞼を閉ぢたれば、
夢の樣に煙る砂丘の溫みに、
白き鷗の群は空に輝き渡り、
緑の樹蔭を縫ふ緩かな白金の水の面に、
白き月は寂しくも差覗ける。

靜かにも暮れはてし廣い野原。
地平の底に雲は音もなく歩み
彼方の丘——家や——杜は、
華やかなビーロドの如な闇の翼に抱かれて
死の如き硬き沈默は嚴かに萬象に投出されたり。

小曲

哀れ小鳥は終日森に啼きぬ、

わが若き日の闇に追はれ行くやるせなき夢の如くに。

賑やかな作だが、それだけで一向取りとめたところがない、詩は情緒の表現だ、自然の描寫ではない。(評)



○毒だみ草　横濱市　直子

白い花がかすりの樣に
流行のボネット形をして
咲いてゐる——

風鈴　長野縣　秋丘こずゑ

そつとかゞんで摘んでみたら
華奢な私の手にまでも
苦い香を吐いた。
其の名を聞いたら
「毒だみ草よ」と人は云つた、
心臓形の葉の中に
女の心の惡臭を貯へて
そ知らぬ顔して摘んだ時
華奢な女の白い手に
苦い香を吐きかけた。

もう少し考へがほしい。（評）

○赤きふくらみ

山城　木の花

いちごの如き小さき
赤きふくらみ——。

二本の長き細きくちびるは
やはき眞白き腕に
さゝるだるきしびれ……。

小さき蟲はにくき
うなりを殘し
目わたりてにげゆく。

一滴の血のしたゝり
後のいとわるき痛痒
すはれける血のかなしみ
夕燒雲の如き色の
赤きふくらみ——。

いつ迄もこの胸に強い
いたみを殘すつもりか、
靜かなる呼吸して
又も、よくもうなりくる
にくい蚊よ
赤きふくらみ——。

官能を歌はうとしたものらしいが、蚊にさゝれたと云ふ事實の方が眼につきすぎて何うかすると滑稽に終りさうだ。（評）

○森

加賀　村田糸子

思ひのまゝに淺緑の色をひろごらせる新緑の森よ、
限りないよろこびを湛えしなつかしき新緑の森よ、
なつかしく……戀しく……よろこばしく……うれしく……
只もう〳〵若々しい色が限なく浮んでゐる、
自分の胸には眞紅の血汐が……彼の森の青葉のもえたつやうにみなぎつて居る、
たへがたく……おさへがたく……
色々の思ひが一緒になつて……
狂せんばかりに胸に押よせて來る、
吁……此青葉の誇の絶頂よ、
胸の狂の極度よ……。

○病みて

信濃　世良田優子

しと〳〵と小笹にふる雨が——
遠い國から來る泣く音の樣に——
私の夢に入つて意識が無くならうとした時、
ふいに怖ろしく神經が高鳴りて、
ぶる〳〵と夢はぱつちりさめた、
まあ此汗——
冷え〳〵と又なま温くつていやらしい——
小笹の雨はザーツと耳の側でおそろしい音して
神經が痛む——
なぜ私の神經はこんなにふるへるのだらう、
何か魔でもそこらに、にらんで居るのでなからうか——何か呪ふ者でも有るのだらうか——
あれ〳〵天井の暗がりにおゝ怖ろしい眼して——
あれ〳〵ニツト笑つた、とつぷり布團をかぶると又うと〳〵夢に落ちてゆく——
恐ろしい神經の波動よ——

○雨の日に

廣島　代湖田芳子

チ、、、と時のさゝやき、
哀れほのかにも床下に蚯蚓なける、…………
天地の悲しき色彩の葛藤のなやみに。
小針の指の痛み……
血より髄より淡き悲しさの湧く。
チ、、、と時のさゝやき。

○緑の炎

越後　星野ぐり子

明方の一時、
萬象を包みし濃霧の散じて
底深き青き空に

緑衣の山の圓き姿
晴れやかにうつろへば
頂きのとき色雲より
まろび出でたり紅き日の
かくて靜々と山の端を
離れつゝ、打續く桑園に
强き光を投げかくれば
キラ〳〵と
露をあび——葉面に
緑の炎ぞ燃ゆる美しさ、

○六月の午後

京都 森本俊子

蠻人が弓射るがごと、
强烈に眞夏の日は輝く。
白き明き六月の
午後の苦しみ。
すい〳〵と延た樹立の青葉に、
妹の紅いリボンに、
ぢり〳〵と。
眞夏の光は流る。
黄な塵の渦に咽んだ、
自動車の轉がり行く、
噴水の多い、
六月の午後の公園。

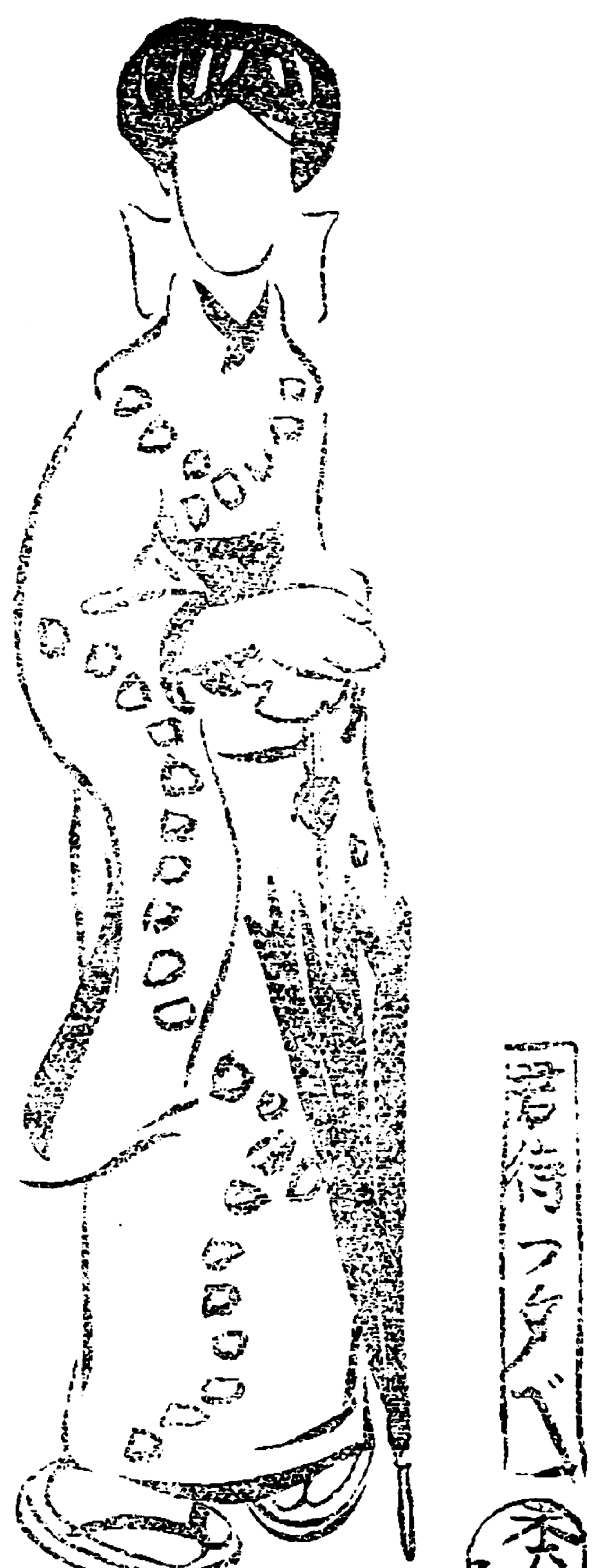
○六月の宵

牛込 北原雪子

絹ハンケチをキツとかみきつて、
赤い手絡を邪慳にもぎとつて、
思ふさま泣かまほしけれ。
うら若い人妻の心に悲しくも
なつかしく暮れた六月の宵なれば……………

○いちご

東京 草香


君待つ夕 橫濱 臼井ひで子

ころ〳〵と紅いいちごの
つゝましやかに青い蔕
ためらいながら摘み落し
薄手の白い皿の上
水の中からころがせば
まだ戀知らぬ妹の
瞳のやうな輝きに
紅く染つた指と爪
何やら佗し指の先、

○試作の小曲

澁谷 月見草

たゆだげなる、あかるさの
五月シーズンの香はたゞよふ、
觀樂の夢のなかなるおもかげの
若人、——匂ふか、かなしいちはつの花、

○

水無月初めの黎明時、
墓地ゆけば、
なにかはなしに心の戰慄、
ペン〳〵草の實のやうな、かなしみごゝろ、

○

逝く春のあかるき空にうちなやむ
血の色したる屠牛場の旗
みつむればほの紅くのぼせしこゝろ、
なめらかにも涙いできぬ、

誌友評論（一〇）

▲信濃（下）

一記者

◎太田喜志子の名は詩に依つて現れた、詩より小品文に移つた喜志子は、此後何に移るか、彼女の將來は未知數である。

◎喜志子は信濃と云つても南に偏した木曾は奈良井河の畔に生れ、其風丰、其氣質、双つとも山岳國の婦人たることを示してゐる。

◎彼女は直ちに感情を現はす女ではない、其點に於て邦枝子よりは重みのある如く思はれる、思慮の深い女理智に明るい女と云ふことが出來る、然れど感情の動き難い女性は、屢一徹に奔り、冷酷に陷り、彼女自ら自分の力に脊負ひ投げされる恐れがある。

◎喜志子の詩は、整つたものだつた、燃ゆる詩でなくして、輝く詩であつた、作れば必ず一個の中心を握つてゐた、容易に作らなかつただけ、常に作物に對する自重心が高かつた。

◎文に移つて後の喜志子は、屢動搖して居るし、今なほ過渡期にある彼女の爲に、斷定的批評は避けたいと思ふが、尤も新しい一篇を取て、聊か彼女の藝術的天分を窺つてみよう。

◎新しい一篇とは何ぞ、前號に出た『浴室の若葉』を云ふのだ。

◎『浴室の若葉』は先づ女性の作として、其題材の取り方が如何にも大膽だ。習俗に囚はれたる世の多くの婦女子は斯の如き作物を讀んで、或は自らを侮辱せられたるかの如く感ずる一種の誤解が起りはすまいかと危ぶまれたに拘はらず、記者が之を最上位に推擧したのは全く其藝術に對する態度を尊重したからだ。

◎世間一般の道德眼からは、禽獸視せらるゝ或る階級の女の生活、それを理解することの出來たのは作者の幸ひであつた、禽獸として同情する人は澤山あるだらうが、矢張之も人間の生活の一面として是非善惡の判斷以外に立ち、充實したる觀察の下に、自然現象の如く描寫し得たのは作者の功であつた。

◎作者が彼の如き境に接し、之を見、之を聞くことの

出來たのは、偶然の幸ひであつたらう、それも彼の作を成した一つの動機には違ひない。

◎今、吾人は藝術として何んな形のものを彼女に望んで好いか分らぬが、何か知ら望むことが出來ると云ふことを證據立てられたのを、賴母しく思ふ。

◎知らず、彼女自身は何んな道を取らうとするであらうか、其答には有力なる一つの事實がある、曰く、彼女の結婚！

◎彼女も亦一個の女としては、其身の落ちつき場所に惑へる一人であつた、吾人は屢或る消息を聞いた、彼女の爲に或は傷み、或は掛念した、遂に最後の消息を聞くに到つて、惑へる彼女が決心の果、嚴として自己を護るに勇斷なるを稱贊せずには居られなかつた。

◎喜志子は若山牧水氏と結婚した。

◎此事實は吾人に如何なる意味を語るであらう、人間の生活の未來を豫測することは困難だが、少くも現在に於て此の如き事實は、吾等の生活の上に非常に心强い感じを與へる。

◎文士の生活、就中放縱の聞えある牧水氏の生活を知つて、其家庭の負擔を敢て自ら試みようとする喜志子の意志には、決然たるものあることは、晶玉の中の木の葉を見るよりも明かである、此決心あるため恐るゝ處は他日の反撥である。

◎言ふ所を行ひ、行ふ所を言はんとする彼女が今後の生活の新しさは、最早多言を要するまでもない、只躓かずに進めと云ふ一語を以て、平凡なるはなむけとしたい。

◎邦枝子を言ひ、優梨子を言ひ、喜志子を言つても、猶ほ信濃には幾多の人才が遺されてある、吾人は其一人として百瀨美水を擧げたい。

◎百瀨美水は女に似合はぬ不思議な才を抱いてゐる、凡ての女は自分自身のことを書くと、血あり淚ある熱誠な文章を作るが、自分とは直接の交渉のない、山とか、海とかを描寫すると、實に拙劣、平凡、其觀察のあらいこと、不用意なこと、文字の智識に乏しいことを忌憚なく發露する。之が又女の通有性であるのだ。

◎處が獨り美水女だけが、自然を描すことが巧い、男ならば不思議はないのだが、女にして自然を描すことが上手で、而かも殆んど女性といふことの見えない作物さへあるに至つては、記者も亦一片の疑惑を挾まざるを得なかつた。

◎で、一度は紙上にもそんな事を書いたやうだ、併し

疑ひは疑ひに過ぎなかつた、事實確かに女だといふことを證明された人がある、果して女とすれば、美水は不思議な才を抱いてゐる。

◎毎號散文の自然欄に於て、優勝なる作物を發表するは勿論、最近の『奈良井河の畔』の如きも、全く文章としては獨創の價値もあり、個性の權威を備へてゐる只如何にも初心らしい筆づかひは免れないが、之れ頓て其作物の純なることを證明してゐる。

◎美水は文字の智識に乏しい、天然を描くにも、幾多の粧飾的文字を使つて、天然を誇張するのではない、印象其まゝを乏しい文字に表はして來る時、却つて彼女の眞の才が閃き、眞の心が映つて來る、敍景文として云へば新しい敍景文だ、舊い型には少しも囚はれてゐない、彼女の生命は其處に在る。

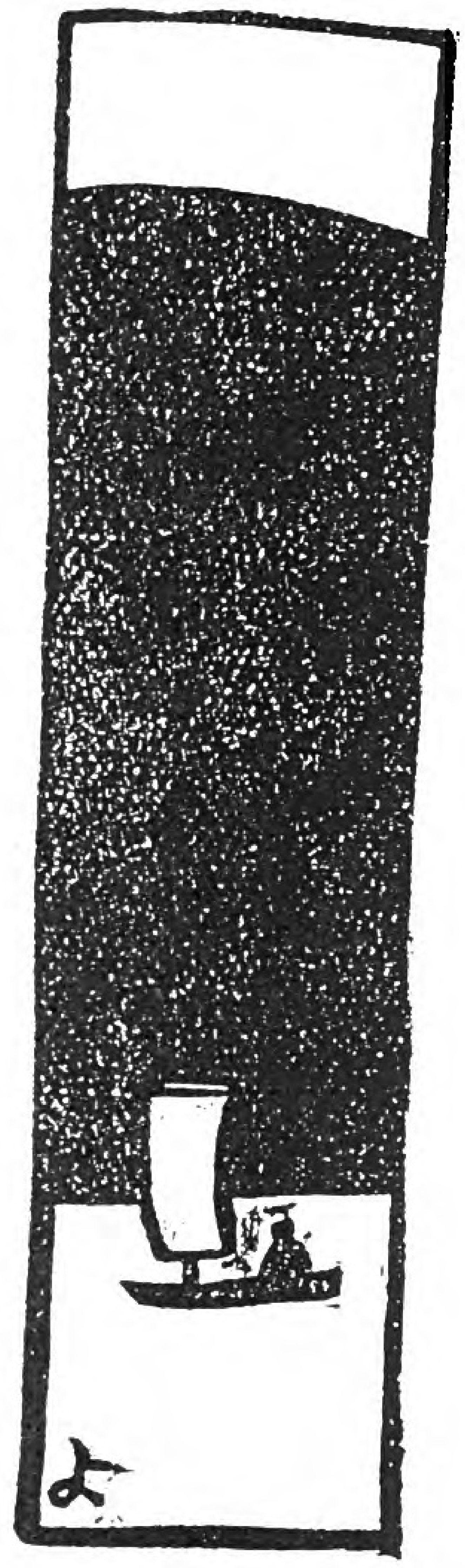
◎只吾人は、彼女の周圍も、彼女の經驗も限りがあるから、或る期を劃して其才能の働きが止まりはしないかといふことを憂へてゐる、今は水の出花のやうに其才能が湧出して來るが、頓て平板なる女性に歸りはしないかと云ふことを憂へてゐる、之を禦ぐには只作者の自覺に俟つ外はない。

◎世良田、長谷川、樋口の三君の中では、世良田優子尤も振ふ、主として小説を作るが、近頃は散文も書くやうだ、小説と云つても散文と云つても、其人の力量次第で、選び方に異議も挾まれないが、優子は矢張小説の方が好いやうだ。

◎小説の中でも、未だ是れと云つて、吾人の胸に深く殘るやうな作物には接しないが、他の多くの一時的投書家に比べて、確に精力もあれば、個性の表現にも思ひを致してゐる、かいなでの人とは異つて見える。

◎長谷川未女子も、熱心なる作家の一人だ、作る態度も忠實らしく見えてゐる、けれども矢張これといふ立派な作が出來ない、所謂誌友中の錚々たる人と、僅に二歩か三歩の相違だけだが、そこがむづかしいものと見える、大いに奮發して貰ひたい。

◎以上、信濃の誌友に就いて、かなり多くを語つた、それだけ信濃は有望なのだ、なほ吾人は今後幾年かの後に於ても、語ることの愈よ多からんことを希望してゐる、今評論した人は僅に數名に過ぎない、未だ現れない人として、單に文や歌の投書家として信濃から來る原稿も少くないのだが、今一々それ等に就いては語らない、時を待つて語ることゝしよう。



自然（散文） 編輯局選

○草野にて

信濃 美水

雲が幾重にも空を覆ふて、朝から少しも日光を見ない、雨が降りそうでゐて降らない、夏とも思はれない涼しい日である、麥の花粉を送るそよ風が、吹いてはやみ、又ふく、四方を繞らしてゐる山々が鮮かにみゆる。

私は草苅鎌を握つて草叢をかきわけた、夏草のいろいろが入り亂れて思ひのまゝにしげつてゐる。薊やばらやその他のとげ草のない處を選んで、私はさら〳〵と草を苅つた、何かしら濃紫の大きい花がかたまつてそここゝに咲いてゐた、優しい撫子や桔梗も交つて生えてゐた、それを苅る時は、何となく惜まれた。

蝶々のやうな形の小さい黄ろい花が、短かい茭草の處にこぼれたように咲いてゐた。卯の花の蕾はまだ小さい、野ばらの蕾もまだ堅い。とげ苺の桃色の小さい花が藪の蔭や、蔓草に交つて到る處に咲いてゐた、そのあたりきりぎりすに似た聲で、とぎれ、とぎれ、蟲が鳴いてゐた、私は、どうかしてその姿をみようと思つたけれど、見る事が出來なかつた、古い枝垂櫻の下へきて、やゑむぐらのしげつたのを苅つてゐると、風に櫻の葉がさら〳〵と鳴る、雲のように咲いて「美し」と眺めた櫻の花が、はや、黒く熟した實になつて、葉がくれにちら〳〵みえてゐた、枝をたわめて、私はそれをとつた、食べてみたが苦い、懐にあつた白紙を擴げて黒い一滴を落してふつと吹くと、紅に、血潮のやう、みてゐるまにそれが紫色に變つてしまつた。

ちがやの穗が出てふんわりと花が咲いて、赤紫色をしてゐる、私はそれを苅つたゝめに、草で恥かしい位手を切つてしまつた。

何となくあたりが靜になつてきた。日が入つたらしい、私は、紫の花を一掴みとつて軟かいよもぎのしげつた上へ一休みした、今迄、草の中に隱れてゐた「螢の母」は急に騷ぎ出した、螢の母は其名のように、優しい愛らしい何かの成蟲で、微かな翅音を立てゝ黄昏

どきに草野をとびまわる、幼い時、門のあたりで捕へて「螢の母」の唄をうたつて遊んだ時分のことを憶ひながら私は、一摑み捕へて上へ投げると、パッと散らばつてとんで行つてしまつた。（魁賞）

嘗て此作者は男性でなからうかと疑つてみた處が或る、確かな人から女性であると云ふことを傳聞した、「奈良井河の畔」などは殆んど女性と認められない作だが、此作は又女性らしい、果して女性とすれば、選者は改めて此作者に敬服を禁じ得ない、自然を描寫することに於て匹儔がないのみならず、文章にも閃めくやうな才があつて温乎たる珠のやうだ、希くば其成長を見ん。（評）

○家と森

森の女

煎つた霰のやうな花が大かた散つてしまつてへいたばかりの小さな實が雫のする若葉の蔭に無數にかくれてゐる、柿の木！こんなものまで庭木にしておく庭には一摑み投げられたやうな夏菊が棚も作つてやらない葡萄の木を邪魔にしながら、雨に打たれては一つ一つに搖れてゐるほか、自分の心を彩るやうなものはない。半分痛む頭をおさへ出た緣側はどつちの端へ行つて立つても展開した眺望を與へてくれない。高い山が兩方から裾を敷き込んでゐるやうな窮屈な屋敷！なぜこんな處へ建てたのだらうと言つては叔母さんが三代前の祖先を罵るのも當然だと思つた。梅雨と離れがたい栗の花が咲き亂れて、椽の表面へ青白い汚點を作つてゐる寂さがそこらの桑を切つたり、麥を刈つたりしたゝめに、目立つてきたに過ぎない。昨日も今日も灰色の雲からむらに降る雨はいつ晴れやうあてもない。こんなところへ都の人が尋ねて來たらどんなに失望するだらう。

「汽車に乘て行けば苦はありません」再び葉書を繰り返した自分はこんな一言に心の動いたのを自笑した。自分には夢の話の實現された例は今迄に一つも無い。

どこへ行くともなしに門口を出た自分はいつか產土の森へきてしまつた。

華やかな街を行くことの出來ない身の悲さを抱いて熊笹をわけて上つた。新しい小さなお宮は棺を蔽うてゐるものゝやうに寂しい。神といふ權威を忘れてゐても何となく心がおびえる。亞鉛の屋根へこつんとあたつた赤い櫻んぼが平らな境內へころがり落ちた。錆びた眞鍮の鈴を傾けて牛の尾のやうに下がつてゐる紅白黃の汚れた布繩、それに觸る勇氣も無い、幾丈の高さの杉がまはりぢゆうに突立つてゐる。おそろしいほど霧が深い。自分はあまりむだな足駄の跡をつけたのが

悪いやうな氣がして急いで華表のある方の三十ばかりの石段を下りた。はてしもなく下りたいと思つた足はいつか平らな砂利道に出てしまつた。（入賞）

注意して書いてある、少しも投げやりのところはないがそれだけに窮屈な感じのする文だ（評）

○金糸雀

埼玉　碁草

手製であるからと斷わる迄もない網の目の大きいのや小さいのゝ美事に揃つて居ないのと、箱の板の荒削りの不細工さで、それでも我が可愛といふ鳥の爲には何物にも變へ難い金殿玉樓である、其網の目の大きそうな處へ、サイダーの壜の蓋いキルクを取去つて、其中へ菜種の粒を剝いて、入れて無理やりに押込んで遣ると金糸雀は遠〱の方から怪訝そうに黒い丸い可愛い眼を見張つて、首を傾げ〱頻に私の手元を見て居がた手を引くと急いで止り木を下りて來て諧諧げた身振して首を振り〱喰べ始めた、食に飽きるとふわ〱した黄金色の柔かそうな喉から金の鈴を振る樣な聲で歌ひ始める、そうして疲れると喰べる、喰べては又歌ふ、思ふ事無き小鳥のライフの心安さよ！



石　工　　金澤市　　歌の宵　女

うつとりと椽の柱を楯に斜に腰を掛けた私の膝には早稲田文學が上つて居たハラ〱と始めからページを繰りて見たが何處と云つて見るのも億劫なので又伏せて脇へ押遣つた、夫れは何日であつたか電車の中でページの終りまで讀み切つて紙を繰うとして、不圖隣の人がぢつと見入つて居るのに氣が付いて夫れとなしに隣の人の讀切るのを持つた時の心持、そうしたもどかしい樣な、遣る瀬ない樣な氣分が此頃は續く、何となくだるいからだをゴロつと手枕して椽に横になると眞正面

物置の屋根が日に反射してキラ〳〵光つて居る、夫れをぢつと見つめて居ると段々遠くなる様な、近くなる様な、又は屋根丈浮き出す様なまるでパノラマでも見てる様で面白い、其中に屋根の周圍丈が空よりもずつと明るい色にぼかされて屋根の面は銀色に輝いて來た、とハラ〳〵と熱い泪がこぼれて目がキリ〳〵痛んで來たのでつぶつて仕舞つてネルの袖で濡れた睫毛を拭ふて、何度も〳〵しばたゝきながらそつと目を開いて見たら屋根にも空にももう元の輝きは無かつた、惜しい事をした、一面銀色に見えた屋根はもう雨露にも耐へ得ぬ程にいたんで居た、茅を押へに横に渡した竹はさながら病みほうけた人の骨の様に痛々しく現れて、雨の降る度に流れる習慣のついた處は深く〳〵溝の様な落ち窪んで其處には青苔が密生して居る、森へ行つては私達が小さい時分によく髪を結ふて遊んだ何と云ふ草だか知らないが柔くて細長い那麼のがもく〳〵と處々に生へて居る、茅の匂ひのしそうな新しい切口のきちんと揃つた黄色い屋根もいゝが黒く朽ち掛つた恁麼のゝ方がはるかに趣味があると思ふ不圖恁麼屋根が波の様に重り重つた合間からニヨキ〳〵と帆柱の様に棒が突立つて、其所に銀杏の葉の格好に網の干してあつた海の國を思つた、燒き付けた様に胸に殘る海の國の印象！油を流した様に靜寂な紺青の海の面から、懐しい磯の匂ひを含んだ風が渡つて來て、靜かな海の裳裾は岸に當つては白く蹤へる、懐しい海よ西南の空よ、何時か起上つて力を入れて腕を組み合した左の手に濃い椽の影は落ちて、私の手は青白かつた。

此君は筆が能く動くのに任して書きすぎると云ふ風がある、考へをあつちこつち引つ張り廻して、分らぬことにして了ふ癖がある、此癖をなほしてしまはねと眞に名文は出來ない、あなたには何か書けると期待してゐるだけに毎も惜しいやうに思ふ。（評）

○杜鵑鳴く頃

越後　星野くり子

今日も雨が降つてゐる、細い霧の様な雨が音もなく降續く此雨の降り出しは三日前裏の森で杜鵑の鳴き初めた日からである、日増に濃緑に成つて行く山の頂からは、絶えず霧が立昇る、後から後からと空と下界との堺目のない様に、じつと見つめた疲れた瞳を庭に注ぐと楓の木にからんだ蔓草に薄紫の大輪の花が三つばかり咲いてある、あゝ最う一年に成つたのだ、自分が養女として此家に來てから、其時も此花が眞盛であつた。

突然こんな事が思ひ出されて赤い表紙の昨年の日記を取り出した讀んで見ると白き野ばらの咲く河畔の家にて瀨鳴りの音のみ聞き馴れし身は筧の水音と夜すがら鳴く杜鵑の聲に安眠を得ずと書いてある、其次二三頁繰ると今日は山に行きて馬蹄躅を折り來り皆捨つとある、そうだ矢張こんな雨の日であつた。

こゝに來てから初めて聞いた杜鵑の姿をどうかして見たいと思つて畔道傳ひに森まで行くと濕氣を含んだ空氣がひた〳〵と自分を取りまいた中は餘り日光に當らないのと長雨續きで、ヒヨロ長く成つた雜草が一ぱいに繁つてあつたが、周圍には雨に濡れて狂はしい程赤い躑躅が咲いて居る。芽のほぐれたばかりの可愛い蔦がひつたりと幹を取り圍んでゐる杉の上で悲しげに、やきず鳴いてゐる、重り合つた葉の間を透して見たが見えなかつた。と、奥の方でカツホーンと森の木靈の呼び出した様に鳴き出した、嫌な鳥!! 此雨の降る中を、杜鵑の姿を見たいなどゝ云つてる私を馬鹿にする様な……あざける様な鳴きかたをする、が一聲で止んで終つた、ぱつたりと……

歸り際に躑躅を幾本か手折つて見ると、並より大きな鮮やかな花である、澤山抱へて小川のそばまでくると、傘さして遊んで居た子守が、馬躑躅を馬躑躅をと云ふから、聞いて見たら、食べる事が出來ないので折る人がないと云つた。道理で里近い處に澤山あつた、と思つたが玆の子は躑躅の花まで食べるのかと驚いて仕舞つた、こんな美しい花に變んな名をつけたもんだと思つたが、名をきいたら妙な氣に成つて皆小川に流してしまつてやつた、それからそれへと考へると、つく〴〵變化のない單純な山間が倦いてしまふ、今も山には其の花が咲いてある、つまらぬ手柄ではあるが此家の子と成りし時の思出として何時も杜鵑の鳴く頃は

思はれるであらうか　あゝ日光が戀しい、活々した水色の空が戀しい今日も雨で暮れるのか……
杜鵑を澤山さうに云ふのを、羨しがる人もあらう此文の特色はそこだが其處に全力を入れてないのが惜しい（評）

○田舍町の朝

信濃　長谷川　未女子

あんな芥子粒の様な種からどうして蠶なんて云ふ蟲が出るのか知ら？と思はせる様な種から掃き立てられて籠に入れられた蠶も晩春から初夏にかけてだん／＼大きく成つて來る始めは塵の様に見えて居たものが、五月の下旬にはもうサクリ／＼と音をさせて桑を食べる位になる、其頃になると桑を運ぶ者がよく私の町を通る。

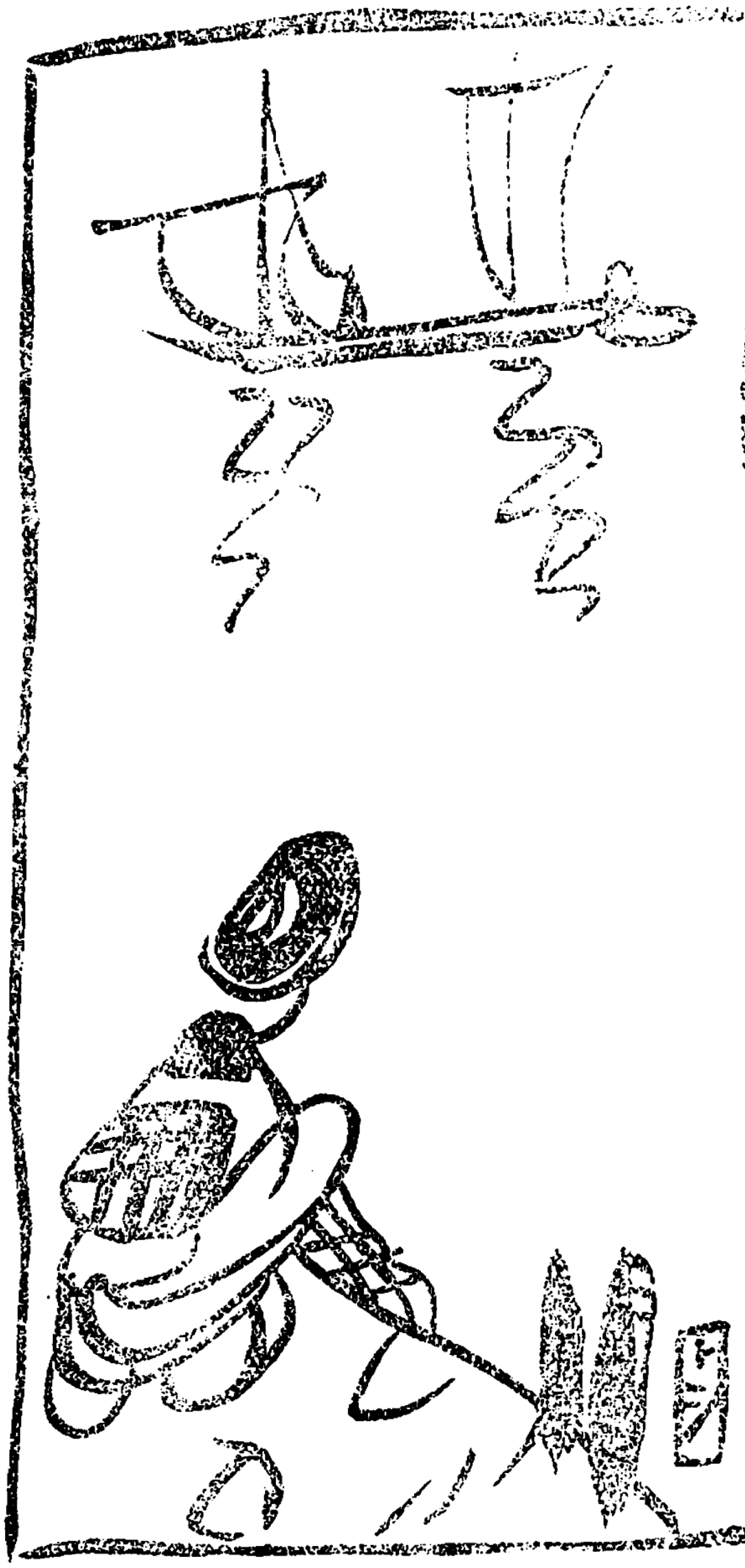
朝など未だ星が薄白く光てゐる頃戸を開けると何處の商家も軒を並べて深かく眠てゐる、そして朝靄が一面にあたりに立罩めて只一通りの町丈を殘してあとはすつかり隱して仕舞てゐるまるで白い雲の中に一並びの家と一本の道とをポツンと置たかのやうなので少し離れて居る所はボンヤリとして見える。

そんな景色の中に立て未だ誰も汚さない本當に新しい。空氣を一杯に吸ひ込むと痛い程頭に胸に浸みるけれど夫がぢき何とも云ふ事の出來ぬスガ／＼しい氣分になつて來る。

そんな時分桑を積だ車はもう通はるのである。

生き／＼した緑色の葉を山の様につけた荷車を引いて紺の法布着た人が町の曲り角から其靄を分けるやうにしてツイと一臺現はれたと思ふと其後からも／＼夫は幾臺か續て來る、端歌でも唄ひながら來るのが折々夫らしい節廻しが静な空氣をゆすつて傳て來る時には鈴をつけた馬をひいて來るのもあるが、夫が其場合何とも云へない好い感じを起す事で私は自分の兄弟でゞも有るやうに其人達の近づくのを待つので有る。

そうして待つた人も勿論見た事もなく名も知らぬではあるけれどそんな朝ばかりは何となくなつかしい感じがされてどつちからとはなしに軽い笑みを見せて通て行くのだ、そしてもうまはりの家などは瞳には入らない只白い靄と白い雲と白い道とが眼路を行かうとするばかり其處をチリンチリンといふ鈴の音や澄だ人の聲が遠ざかつて行くのを聞いてゐると神代の昔に返つてたゞ一人取り殘されたやうな寂しい心地に



ながれ　　久留米　中島敏子

なつて白い道に二本の轍の跡を殘して行く綠色の車が遠く霧に隱れて行くのと見送るのである。

桑の葉の車はおもしろいが背景が生きてゐない(評)

○煤　煙

横濱　山崎都鳥

夕方になると雨が來る、前の如な淡墨の空合になる、沈滯した重っ苦しい朦朧を大宇宙に築いた如だ、かうした大空を私はよく眺める、灰色の街と誰れかゞ言つたこの押しつぶした如な低い家々鈍い光線を吸收した甍が蹲踞つてる、その參差たる屋根の後から黒い二條の煙突が縱に線を引いてゐる、

聳立したその煙突からどく／＼と眞黒な煙を吐く、後からも／＼もく／＼と昇る

始めの煙は素直な煤煙が香の煙の如に徐に昇ると、次第に渦の如な濃いのが續れて出る、逃げる奴を追ひ縋つて走る、やがて秩序が亂れて、風に煽られて横樣に倒れる、そして濕ぽつたい空氣を這つて流れる、

音も無い

やがて接觸した二條の煤煙が小爭鬪を開始する、一條の先鋒が一條の後軍を衝く、錯雜に入り亂れて接戰する、風が强く吹くと、譯もなく二流共擬に殺倒されて逃る、追ふ、低く沈んで煙突へしがみ附く、そして流れる、でもやがて怯めずに元の勢に盛り返して接戰する、不斷煙突は黒團を吐く、それが輪を作つてくる／＼と廻りながら流れる、

煙の末端が縺れて抱き合ふ、そして、曲線を蜿らせて長く横はる黒い川——宛ら怒濤、奔浪が灘の如に狂つてゐる如だ、やがて空の色も銀をいぶした如にくすんで行く、煤煙は尙膨脹して擴圓する、煙突の輪廓も鮮でなくなつた、

黒い幟が流れる、恁うも言つて見たい、

闇黒魔が「光」を奪つて夜の世界に化して行く、

板硝子を何枚か重ねて行く如に空の色が變じて行く、風の落ちた刹那風見の矢が停つて動かなくなつた、煙は空を衝いて毒々と昇る、山火事を遠くから見る如だ、黒い大河？が漲るそして空域を浸す、一角は煤煙に拖擁されて了つた、

大地から、樹や、窗から黒い闇を吐く、

灰色の町は煙の布で覆はれた、

黒い河は黒い海となつた、地平線を正しく區截る事は出來なくなつた家々には爛れた赤い灯が見える、雲も煤煙も失せて了つた、いや隱蔽されて終つた、そして夜の色の闇が蔓延してゐた。

男の書いた文章のやうだ(評)

○木　苺

本郷　平塚白百合

夜上りの水蒸氣がたつ地面に、重い程撓つた青葉の枝影がポタ／＼と流れてゐる。强いコバルトの空の色には涙ぐませる程まばゆい眞綿のやうな光りのある雲が湧いてゐる。ムク／＼間斷なく蠢めいてゐるけれど少しも伸びて行かぬらしい。

五月初めに白い輝のある花をポウと、暮春の夢からさめた淋しい先覺者のやうに若葉の先端に開いた木苺の花は、一つ／＼黄橙色の小さい實になつた、實の一つ／＼には露がタツプリ輝いてゐる。

赤い唇にあてたら直ぐとけてしまひそうな其木苺の實は、餘りに甘過ぎて少しの酸味もない、駄菓子をよろこぶ幼子は目を細めながら貪り吸ふけれど……自然と地にまじつてしまふ許である。

花壇を見廻つてから出られた夫の靴音がまぎれてしまふ迄見送つて庭から上つた。

私の丈を過ぎ夫の背を過ぎ六尺餘りにそびやいだヂキタリスは花壇の覇王のやうな誇りに驕り咲いてゐる。

夏から秋にかけて咲く草の花にはこうした優れた育の性質のものが多い。

部室の隅に置いた姿見に、花壇の一部と植込みの影が鮮やかにおのゝいてゐる。青葉の匂ひは霧のやうに水のやうに部室一ぱい動いて、蠅の

やうに美しい半裸體胸像の女の石膏像に・青いかげが忍んでゐる。

返す許にして置いた帶を緣近く座をしめて心靜に一尺許の緣殘りから引出した、黑地に白の線が二本斜に浮き出てくる、夏帶故心はない、一枚に置かれた膝の上にはネルの廣い線が透き通つてくる。花模樣の帶は返すとき、別れた人に又逢つたやうな氣がするけれど此帶はそうした氣分は少しもない。

引出し終つて涼しい葉影に瞳を休ませた。

うれて自然にとろけ落ちる木苺が朝の光に黄線を縱に織る、靜かな六月の朝グラ〳〵湧く雲には赤い笑がこぼれる！

うつとりすわつた瞳に木苺の實がチロチロ忙しく動く、まばたきして見直すと、小さい怜悧しい瞳をもつた雀が忙しそうに青葉に埋まつて首だけ見せながら、甘い實を吸つてゐるのであつた。

自然を觀る眼がだん〳〵細かく働いて來るのは、作者の爲に欣ぶ、併し全體の心持には進んだ跡が見えない。何時迄も――私は追はない。（評）



お使ひ

大阪　長谷川　美津子

「眉毛落して……まだ日も經たぬ、髮はこはされかんざしや折られ……叩いて……」

上調子の三絃の音につれて、噪しやいだそのくせうら悲しい肉聲をきいた時、道具箱かついだ俠氣な職人は、振り返りざま畜生つ、チョツと忌々しさうに舌鼓うつて横町へかくれたあとは、又一しきり人通りが絶えた、淋しき初夏の日くれ時よ！亂れた音調は夕やみを破つて、たえずおそふてくるけれど……

私はじつと門の柱に身を凭せた恰度戀人でも待つやうに、我知らずかうした態度をとるとき私のハートはいつもときめく。

○幼なき罪惡

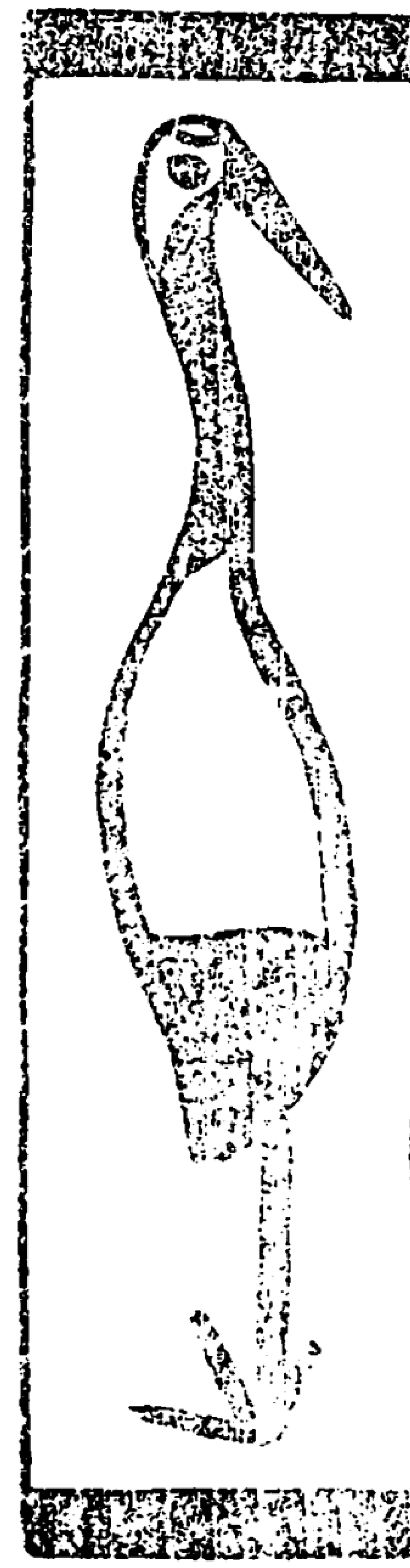
下總　浮舟女

あゝ幼なき罪惡――それは私が四つの秋の頃だつたと覺えてゐる。父さまに敎へられて書き覺えた自分の名を、其頃よく何にでも書いて見た。父さまの大事な御本の表紙でも硯箱のふたにでも、母さまの針箱にまで私は樂書したといふ。

ある風の烈しい日だつた。新たに表門のたてかへられた時――其時人々はお茶を飲んで居た――私はペンキの强たか含まれた太筆を執つて木の香の快い門の柱に己が得意の文字を揮つた

あゝ旦那樣孃ちやんがつ……

驚いて人々のかけつけた時、事はもう立派に成功してゐた。



和歌

編輯局選

〇（天賞）　豐後　吉田夕草

この見たさこの逢ひたさに責めらるゝ身をば日毎にもてあますかな

〇（地賞）　宮城縣　齋藤靜子

あかつきの月見草咲く野を行けば日のなき國をふむ心地しぬ

〇（人賞）　佐渡　古城千代子

狂ほしう起きなやみはた伏しなやむ眞晝の花に水やりて見し

佳作

〇　かすみ

逢はざるをよしとし思ふ此頃の心恐怖に曲り道しぬ

〇　星野かへで

白き雲花の形に又鳥の形に青き空に浮べる

〇　周防　若菜

御文とわが魂と純金の蒔繪の箱に秘めて封じむ

〇　田村かね子

大木の暗きうつろにすゝりなく五月雨時の露草の花

〇　出雲今市　三吉よしみ

君を思ふ夕心のわりなさよ父の靴など見つめてありぬ

〇　北海道　蒲原てる子

ありし日の少女心地に垣ぎはの三味線草をもてあそぶかな

〇　群馬　はゝ木

永久の春を願ひて切りすてしくろかみなれど涙こぼるる

〇　渡島　安子

人みれば寂しと云へどはしきやし少女の面は輝きてあり

〇　周防　美女子

弱き身と冷き心を捧ぐべき男子一人も探しあぐみぬ

〇　前橋　みづ枝

うす暗き藏の二階にあめの日をかくれてよみし梅暦かな

〇　下關市　喜本紅雨

一とせを十歳の如く衰ふる身をもて君をまもる悲しさ ○ 小原あい子

來るべき戀の力と悲しみと一つになりて落つる涙か ○ 山口縣 椰良美那子

漂へる護謨風船の色どりの一つ〴〵つに夢のせてねん ○ 大分縣 雨花子

白き手をかろくさすりて自づからを慰さめてみる夜のはかなさや ○ 信濃 長谷川未女子

日向葵は黄金いろして夏の日を王者のごとく咲き誇るかな



夏の人 深川 矢澤榮子

牛込 北原雪子

○ともすればいとかすかなるさゝやきの耳にのこれる人戀ふ夜ごろ ○ 中澤かし子

すてられし男にあひぬ白ばらの香もやゝうせしたそがれの道

〇病むとしもなき身なれどもこのごろは見る雲にさへ涙流るゝ
神田　高橋千代子

〇喪へる戀に泣く子はいと深き穴藏の底に落ちたるこゝろ
栃木　しのぶ子

〇舞妓らの踊りに疲れて眺めやる夜の大川の水の悲しさ
牛込　西村しのぶ

〇つかれたる心に水と睡蓮の眞白き見たる眼の快さ
瑞野つゆ子

〇そのかみの心と心僅かなる痍に惱みて冷えんとすなり
京都　くれなゐ

〇さは〳〵と樺の葉づれにふとみだす胸毛の紅き南洋の鳥
金澤市　歌の宵

〇いと古き毛糸のたまの如くにも吾等が戀の古りて淋しき
埼玉縣　たか子

〇まつ心またるゝ心いづれをも苦しきものと知りそめし我
福島　春子

〇ちら〳〵と灯の見えそめて新開の港さびしや雨にくれゆく
福岡縣　長谷川國枝

〇夜の目にもそれと匂ひて卯の花のひと雨すぎし灯ともし頃よ
福岡縣　櫻井敏朗子

〇紺青の日傘かたげて侘びしげに酒場女が河岸づたひ行く
近江　鈴蘭

〇しのび音はね息の如くまぎらせど枕に熱き一雫かな
尾張　水谷靜枝子

〇我が戀は深山がくれの花なれや草にかくれてかをるばかりぞ
羽前　蝶櫻

〇戀しらぬ身はさびしさにたへかねて歌など歌ふ五月雨の宵
伯耆　月の華

〇三味線の爪びき聞くが何となくかなしくなりぬ此頃のわれ
加賀　土田久子

〇夕空に紅の雲たゞよふを苦しき戀のほのほと見やる
播磨　藤井つや子

〇紅のいちごの汁に筆染めて戀しき人に文を送りぬ
橫濱市　直子

〇寢苦しき夏の夜更けの靜けさを悲しき歌をうたひ過ぎけり
下關市　木本濃生子

〇針のさき狂ひて刺せるわが指の血汐のいろに心をどりぬ
茨城縣　浮舟

〇野にくれば光なつかし初夏の心地よげなる日光に生く
山口縣　福田芳枝

〇人の世の花咲く春を何故に斯くは我身の心寂しき
伊賀　福田惠美子

〇ほの白き待宵草と幽かなる瀬鳴に我吸はれゆく哉
若狹　長谷川英

〇われながらやさしと思ひうら若き小さき誇に君を見るかな
愛知縣　中村百合香

〇
近江　瑠璃香

三井寺の杉の下道黄昏れて戀人欲しき夕映えの山
奈良縣　東本勝野

○

十七の若きうれひに泣ける子の涙か日毎そゞ降る雨は
伊賀　中村こま子

○

一年に一度あふ身の七夕の星にもにたり我等二人よ
大分縣　赤き花

○

風吹く夜われに生れし哀しみの行きまどひつゝ夜は更け渡る
下總　久我芳子

○

ふとさめし夢のあとよりうかび來るやさしきおもわまぼろしに見ゆ
福井市　木村芳子

○

日のいづる潮のよずる雲おこる君の在はせる皆ひんがしよ
横濱　臼井ひで子

○

花瓦斯の明るき君と玉突きし青羅紗に似る初夏の山
加賀　嵯峨野

○

百人のなぐさめごとも一人の一言きくにとほく及ばず
京橋　杉浦はる子

○

繪だくみがうすゞみの筆に似たるかなをのゝきふるふ今朝の夏雲
本郷　平塚つげ枝

○

きやら〳〵と青鷺わたる夕空の哀しき匂ひさしぐめるかな
茨城縣　後藤岩子

○

二つ三つ星あらはるゝ夏の夜をなきてすぎゆく里ほとゝぎす
岡山市　桂木淑子

○

少女子が心ばかりの花壇にも卯の花咲きてうつくしきかな
東京　野の百合

○

初夏や青葉の中の大悲閣ふもとに聞し夕暮の鐘
青山　西村貞子

○

窓に居て月を見まほしみな月の雨の夜をもいでゝ歩まん
大阪　村田千代子

○

眠りゆかむ淋しき記憶よびおこせ潮なりすればまた涙落つ
函館　佐藤美代子

○

望盡き空しき日のみうちつゞく悲しさもなく嬉しさもなく
菊葉

○

アトリヱの窓のほとりに筆洗ひ水捨つる頃合歡の花咲く
徳島縣　龜田きん子

○

十五夜の月のごとくも戀なかに人知れずこそかなしみの湧け
横濱　月草女

○

白く塗りし水の樣なる洋館に居て上京おもふ夏の夕ぐれ
信濃　世良田優子

○

川原なる石に寢入りしかたお等の心安さがうらやましけれ
中澁谷　佐藤露草

○

われひとり病みてある如思はれてたゞ口惜しくてたゞ悲しくて
陸前　小岩柳

○

青き葉のひとつ〳〵にさゝやきてながれ行くなる初夏の風
周防　智江子

○

霧たちぬ月はのぼりぬきみ待つと落着かぬまゝに口べにをとく
小倉市　渡邊華泉

○

朝夕涼風のふく此頃を袖をつらねて君とあるきぬ
伯耆　田村美子

○

戀てふは樂しきものと覺えしに花も涙にぬるゝわが袖
大和　ちか子

○

君をおもひおもひつかれてねむりたるかなしき戀に夕光りさす
府下　しのぶぐさ

○

つゝむべきことゝ思へどほこらかに友は語りぬ戀人のこと
長野縣　小林美喜代子

○

炎天やつはもの住みし塚穴をめぐりて咲きぬ晝顏の花
大和　安浪柳玉

○

窓際のほのかに白き月あかり浴衣すがたのおかしき夕べ
横須賀　美稲子

○

川添の街をはるかに上りくる月の匂ひよ夕顏の咲く
土佐　はぎ子

○

秋蟲の月をむかひてなくが如淋しかりけりわが初戀は
栃木　紫波

○

青葉若葉茂みの頃よ物うろしとかこつ男の偲ばるゝかな
○　埼玉縣　大郷代根子
海に立つ霧ほの〴〵と野薔の花咲くころの風がかなしき
○　仙臺市　赤間くに子
ゆるやかに初夏の雲皆のせて君とわれとの間行く川
○　王子町　大浪せい子
たゝずめば故なき露の白玉に單衣の衣は紅に染みけり
○　丹後　譽田順子
ひそやかに風吹く海にうす光るさゝがにの絲のかろきたはむれ
○　岡山　安田英子
數あまたてらす螢のあと追ひてこゝろも空に飛ぶ少女かな
○　山城　木の花
物思ふときに頰つたふ泪にも似て秋雨は花ぬらす哉
○　渡邊歌子
我が友に失戀色とそしられしオリーヴの帶うとましきかな
○　二葉子
君いづこと仰ぎし空に只一つあはたゞしくも星のまたゝく
○　山口縣　千香子
日沒の後のさびしさ野に立ちて夕雲赤き南國を戀ふ
○　大阪市　よしの
脊惠比須電車の中のひとごみに忘れし姿ふと見たるかな
○　兵庫　紅すゞめ
水の如き月かげ清くながれ入る園生に咲ける月見草かな
○　京都市　大槻よしゑ
われとわが涙にぬるゝかなしみをながすに居たる夏の宵かな
○　山形　蓼子
我がすべてを夢と云はまし綠にも赤にもあらぬ灰色のゆめ
○　和泉　みどり
あこがるゝ海のかなたの島國の山々あかくそめて日は入る
○　上總　粕谷豐
早乙女が片手かざして日をあふぐ野邊のまひるはいと靜かなり
○　芝區　仁八八千代
初夏は心も輕くすが〴〵し明るき空にいさゝかの風
○　中西りか子
聽心器はものおそろしゝ秘戀のあばかるゝおもひ心おづわれ
○　岐阜縣　佐藤央子
木偶つかふ傀儡師の顏なやましき夏の夕の黄なる川口
○　麴町　牧野銀杏子
天地は廣しといへど我胸のおきどころなし悲しからずや
○　佐渡　わくら葉
赤き灯の下に別れし人思ふたそがれ時に啼く蛙かな
○　廣島市外　代湖田芳子
小路おくのとある貧家を見に入りぬうすくらがりに二人は默す
○　雛　鸚雲子
若人のむねの血汐の高鳴りぬ燃ゆれば赤き火にも似たらむ
○　長野縣　淸浦すま子
淋しやな破れしばせをの葉にかゝる雨の音きゝぬ我に母なし
○　能登　夕暮土橋子
戰慄の胸安からむ事なげに大事を語る君としも見ず
○　備中　玉の浦さつき
君の瞳は喜び充ちて花と見ゆ我は嘆きに捕れし日も
○　美作　橋本しげ子
我胸に描ける君はとこしへに稚なくして春また暮る
○　仙臺市　妙香
廣瀨川岸のほとりに涼みして淸き流れのさゝやきを聞く
○　京都市　富貴子
硝子器に盛りし葡萄は輝きぬ弱き少女の初戀に似て
○　和泉　西村野菊
世の中のよきと惡きをときわかば櫛は得がたきものにぞありける
○　京都　森本俊子
砂山の松を包める紫の靄にたゝずみ君が舟見る
○　四谷　白菊

さゝがにのあみにかゝれる雄蝶とも知らで雌蝶の宿に待つらむ

○　西多摩　唐崎秀

軒近き柱に寄りて物想ふとたよりをこせし人の戀しき

○　京都　貴船たね子

薄ずみの山のふもとの青葉路雨のかすみに傘二つ見ゆ

○京都市　ひで子

都より繼を荷ひて三百里南の島へ行く夢見たり

○高知市外　北村美佐夫

一八の花が匂へば巡禮の娘の眸に哀しみの浮く

○岡山縣　入江曉花

夕暮の門邊に立ちて默したる少女の如き夕顏の花

○信濃　もみ

濕りたる凹地にこぼれし柿の花かなしくなりて踏て見しかな

○渡島　美津子

君が手にかざせる花の一片をそと手にもてば悲しみの湧く

○武藏　桂のはな

また幾とせ母にわかれて旅するとなげく頃なりながあめの降る

○　秋田縣　愛子

靜やかな君がみ顏を想ひてはわびてもつきぬ罪多き我



讀書　芝田島しま

○　美作　橋本崇

夏の宵の橋にもやひし小舟より涼しく落つる灯のかげ

○　石川縣　哲

美しき鳥が瘦せる巣を守りていくべきさだめ我に賜ひぬ

○　石川縣　久代

一筋のあやうき絲につながれて危うき空に今日も暮れける

○　岐阜縣　佐藤初音

あかつきのつめたき風はこゝちよく臥所をいでし我頬にふれぬ
○ 岐阜縣　佐藤天香

梅の實は薄く色づき五月雨の降る日も近くなりにける哉
○ 群馬　きう子

天地の惠みに生くる我れなれどなほうらめしき天地にして
○ 岡山縣　大西孝子

思ひ佗びほつるゝ儘の黒髪を寫繪にして見せまく欲す
○ 信濃　青木よし子

懐しきわが家をあとに見送りて雨降る中を故郷出でぬ
○ 神田　若月君子

若き日は悲しき事もうれしさも只涙して味ひしかど
○ 神戸市　足立春子

よろぼひし草のつるにも悲しけれわが戀人は病むと聞く故
○ 佐賀　花の雫

赤き花愛づとき君は在さずに白き花つむとき君は來し
○ 下總　あらぎ子

君と我れと話とだへて月けぶるありなし門の一八の花
○ 大阪　本山しげ子

夏の日は繪日傘さして湯歸りの足音輕し京の舞姫
○ 土佐　橋田紫葉

美しき黄昏の色うすれゆく磧に萎む晝顔の花
○ 長崎　町田とし子

蟬の聲つかれつかれて逃れゆく夏の夕日のなやましき色
○ 名古屋　波の花

なきじやくり笑にまぎらす強き我死にまさるとて泣く日も有りぬ
○ 靜岡縣　松島靜子

松風の琴のしらべも靜浦の浪ものどけき夏のあけぼの
○ 群馬縣　芝小鳥

我が戀は薄絹をもてつゝみたる螢の如く美はしきもの
○ 姫路　靜子

山深き谷間に咲きし百合のごと清き我が身の昔を思ふ
○ 神岡　野見山輝

白熱にもゆるが如き少女子の戀やぶれては闇へに死なむ
○ 京都　三宅白菊子

かゞやける夏のまひるの木の蔭に傷つきて咲くひなげしの花
○ 埼玉　渡邊積翠

かすかなる絲に吊られし我が心落ちもせざれど搖見き易し
○ 下總　あらぎ

五月雨は十日になりぬ苔の上に血の色にして柘榴の花
○ 茨城　田村はつ子

苅られたる桑畑中になつかしく日の光吸ふ紫蘇の葉のむれ
○ 神戸　緑髪子

色づきて葉蔭に忍ぶさくらんぼ少女羞らうさまに似てよき
○ 大分　葉滿路

たそがれの窓にもたれて淡緑の若葉見る時君を思ひぬ
○ 水戸市　川崎春子

ふと出でゝ梅雨の晴間を飛ぶ蝶の花をたづぬるしほらしさ哉
○ 越後　若井紅雨

波靜かもの思ふ子の眼の前に白鳥の群波に飛び交ふ
○ 備中　小見山春

ほろほろと椿こぼれぬ其日よりはなるゝ戀のさびしさを見し
○ 日本橋　桑原せん子

かへりゆくやさしき祖母を見まもりてなみだぐまれぬしづかなる朝
○ 府下　高木多香子

ぱつと立つ君の戀火の消えやすく我胸炎にこがしける哉
○ 城南　鈴枝

住家なきわが魂は狂ほしく泣きてさまよふ天地の外
○ 函館　藤本鳥羽子

蚊やり火のけふりにむせびをばしまにふと君が手にふれしわなゝき
○ 京都　上田たき子

友一人すてしばかりにさびしさは昨日とけふと空をへだてぬ
○ 和歌山　宇田すが子

いたましき記憶の中に消えずある細き苦しきあの夜の灯火



評論　編輯局選

○邦枝子樣と菊子樣

伯耆　ふみ子

甚だ失禮かも知りませんが、妾は妾の見た邦枝樣と菊子樣について、少し書いて見たいと思ひます。

多くの誌友の崇拜の的となつて居らつしやるお二人のことでございますから、隨分いろ／＼なことも誌上で拜見しますが、妾は常にお二人について、性格なり作物なりに對して、想像したり、考へたりして居ることを話して見ませう。

お二人とも、文學に生きる人といふことは、誰も知つてゐることでございます。けれども、また、お二人はそれ／″＼、性格なり作物なり、について、多くの異點をもつてゐらつしやると思ひます。まづ、

邦枝子樣は、兎角。新奇のことお好みで、凡てが配都式な、華美な人の樣に思はれます、そして、お美しいお顏としなりとしたお姿に、それがよく現はれてどこまでも人の目にたつ人と思ひます。

そして、粹な心のまた粹なことをお好みの方と思ひます。ご容貌などもこつてりとした、京都式ではなくて氣のきいた、江戸つ子式の樣に思はれます。

精神的の虚榮心よりも、物質的な虚榮心の多い人、又それだけ、邦枝子樣の無邪氣な所が、想像せられます美しい髪飾りや、華美な着物をお好みでせう、けれども、決して美々しく着飾つて、萬人の目を引かうなどではなく、只邦枝子樣の心なり、お姿なりが、それに、ぴつたり合つてゐるんだと思ひます、奥樣として從順なやさしい柳の樣なお方でせう。作物は、邦枝子樣のは多く過去の事實についての、あるなつかしみや憧憬が書かれて、何處までも才ばしつた、らくな筆づかひの、讀むのに、氣も清々しく、一種の快感にうたれます。

次に菊子樣は、何處までも、堅實な、意志強固な、理性に勝つた女の人の樣に思はれます。そして常識に富んでゐらして、社交のうまい方でせう。そして人に可愛がられなさるつていふよりも、人に尊ばれなさる方でせう。菊子樣の前にいつたら、屹度、襟でも正さなければならないといふ樣な心持がすると思ひます、質樸で、併も野暮ならず、美人ならずして。又醜婦ならず、平凡ならずして、奇拔ならず、何處か、落つき

のある、氣高いお顔の樣に想像せられます。

菊子さまには、物質的虛榮心などは、毛頭ありますまい。只自己の立ち場つているお樣な所に、虛榮心があるんぢやありますまいか、そして、內面の燃ゆる樣な烈しい感情が、其極度に達して化した理性の人で、それだけ、菊子樣の涙は、誰れのよりも熱いでせう。又そして、作物なんかにも、よく其の涙が流れて居るやうです菊子さまのは、只に、才にまかせてたでなく、努力が積んで成つた樣な一讀しても尊い心地がいたします。お二人を花にたとへて言へば菊子樣は椿、又は菊花、邦枝子樣は、白百合又はコスモス。（地賞）

未だ一面の識もなく、單に作物だけを見てこれだけたち入つた批評の出來るのは、具眼の人です、意力の勝つた、批評らしい批評です（評）

○苦しき世

（小林高子樣のお說を讀みて）

岡山　みち子

私達の生活は飽迄『眞摯』であります。『あそび』ではありません。けれども、私は『遊びごと』をしてをります。求めてしたくは無いのだけれど强ひてさせられてゐます。困つた事です。それと申すのも、現社會が嘘僞の社會だからで、決して私は私自身を攻めようとは思ひませぬ。寧ろ、斯う成つてしまつた『己』を憐れむ心こそ起れ、せめる氣にはなれないのです。私の周圍には嘘僞が充ち滿ちてをりますもの。自然とズルズル引きずられて行つちまひます。なげかはしい事ですけれど……

六月の本誌評論欄で、小林高子樣の『お神樂論』を讀みまして、私は、『お孃さまだな』と呟かずにはをれませんでした。失禮ではあれど、お聞き下さい。

あの文に據て推しますと、小林樣は『今の忙しい世に、文明の世に生きのびたいと思』ひ、『仙人にな』らうと希ふ人であると見られます。仙人？仙人になりたい？まあ何と云ふロマンチックな、面白い人もあつたものでせう。私は疑はずにはをれません。どうしてつて、さうした甘い考へでよくまあ此苦い現實の世が渡れた者だと思はざるを得ませんもの。

私はさう思ひます。明治も四十五年の御生代に生れ合せた者が、二六時中、お神樂を見るやうな心持で活きてゐたら、それこそ大變では無いでせうか。『過去の夢』にあくがれたり、美しい『幻』に隨喜の泪をこぼしたりしてをつては、此のセチ辛い世路の逃れさうな筈がございません。霞を食つて生息しつゝある者で無い以上、私達は酸素を吸はなければなりません。米の飯を食はねばならないんです。

さうでは御座いますまいか？。

ご飯をたべる交換問題として、それや私だつて、時には笑ひもし、冗談も申します。しかし私は、曾て眞面目で冗談を云はなかつた事を斷言するに憚らないのです。誠の笑を見せたことは一度も無いのです。……唯、いつはりの笑を、現社會は要求致しました。そんな世でございます皆樣お歎されあそばすな。

或は、私の頭腦を變則だと仰有るかも知れませんが私は私自身を、『現代の生んだ女』だと信じてをります、私に云はすれば、嘘僞の笑ひ、安價な言葉の浪費を嫌はぬ人があつたら、其人は『活きてゐる』とは申されません、生存の資格が無いのです。『生存』とは、決してそんな安つぽいものではあるまいかと存じます。甚だ禮を失した云ひ分でございますが最も『新人』の多數集まつたと人も吾もゆるす女子文壇の愛讀者に、今も尙『おめでたき人』の尠なからぬ事を、私は嗟嘆します。

私には、何故記者樣が小林さんの論文を地賞にお選び遊ばしたかゞ聞えません。隨つて、あの短い評語の如きは全然無意味でございます。『藝術を愛するものには此氣分が無くてはならぬ』とは何たる空疎な言葉でせう！若し藝術にお神樂のやうなものがありとせばそれは要するに低級

な幼稚な藝術に過ぎますまい。夢の國のお七さまや、お染に思を寄する人々の愚かしいこゝろは、高級の鑑賞力を具へた者の頭では解ずる事が出來ないのでございます。

記者樣は『若い女だからとて、只むやみに新しく〳〵と新しい刺戟ばかりに神經を疲らせるのは傷心の次第だ』と仰有いました。で、此のお神樂見るやうな氣分が無くてはならぬ、と云ふ結論になるのでせうか。心得ぬことと共でございます。現代、斯かるせゝッコマシイ世の中に、むやみに新しく〳〵と新しい刺戟ばかりを求める人のあると云ふことが既に解し難いではございませんか。果して、そんな人がありませうか。

さらば聞いて下さい。現代は、しかく生ヌルイものではございますまい『刺戟』は求むるに及ばず、數限り無く、私達の頭上、身邊に有るではございませんか、斯うして坐つてゐても、私は悲慘な、むごたらしい、悲しい、生存競爭を目睹することが出來ます。私の頭は狂氣しさうです。

記者樣。私はお米の價も知らぬ。『お目出度さ人』をあはれとしない譯には參りません。私達は夢を喰べたり霞を吸うて生き得る身ではありませんもの。藝術は『あそび』でも無く『夢幻』でも無く、血の出るやうな『眞劍』でございます。

素材の赤熱をば白熱化する――と申すことは、現實をローマンス化するので無く、道德の飾に掛けることでも勿論ありません。と存じます。敢て愚見を述べ賢明なる記者樣の御敎示を乞ふ次第でございます。どうぞ……。妄言多罪。(人賞)

藝術は眞劍だと云ふことは新しい說でも何でもない既に自然主義一派の人々が言ひふるした說だ、而して此君は其一派の自然主義者の說を眞向からふりかざして來たのです、無論內心には多大の反抗力――反感――現實に對して――を持つてる人と思ふ、前のお神樂觀を書いた小林たか子の說と、兩々相對比してくると一寸興味のある問題を生じる。永井荷風氏や北原白秋氏一派の辿つてゐる享樂主義と、田山花袋氏や早稻田の一派の唱へてゐる自然主義議論と、此處に文壇の二潮流を現出して來る。惜いかな此論者は初から反感を抱いてかゝつてるから、議論を戰はすべく損な立脚地に居る、二六時中お神樂を見る心持で活きてゐられないとか、夢の國のお七やお染に思ひを寄せて居るのは愚だとかいふやうな、反感的言葉は取り除いて欲しい、現社會を虛僞だとか、周圍がいつはりだとか、現實界に執した言論は、藝術を論ずるには餘りに習俗を脫しない。如何にも仰ることは眞劍だが、ナイフも眞劍なら、二尺八寸の正宗の銘刀も眞劍だ、眞劍も振り廻しやうによつては、十人斬や五人斬やくだらぬ人間を斬ることがある、斬つて可いものを斬らなけりや眞劍の價値はない、近頃の婦人や、近頃の靑年には、此しんけんをむだにふりまはす人が多い、用心すべきことだ。(一記者)

此論は近來の熱ある文章だ、お神樂觀の作者或は此論に答へるところあるかも知れぬ、幸に刮目して看む。(評)

○書から讀まう

上總　粕谷豐

「男ぢやあるまいし本なんか見ずともいゝっ」てあんまりなお言葉だ、いくら只一人のおばあさんだつてこの命令にばかりは從はれない、「何故本を見ちやいけないでせう」と云つた所で例の蛙の子は蛙、一點張のおばあさん、天保時代の頭と思へば腹もたゝないけれど、自分は雜誌に新聞に折々鋏取りながら妹には天明の空氣處か新聞も雜誌も一切禁ずる兄さんの心計りはにくらしくつて恨まずには居られない、くやしいつ?何時まで小供ぢやあるまいし大人しく人形であられるものか鍬鎌計りを握つて百姓あねさまで居られるものか、少し計りの學問ででもこないだまでは尋常一年の敎壇に紫袴で立つて居たものを、それを無理に退職させ本にも離れよとは情ない……本や雜誌見たからつて家の仕事を怠るんぢやなし、下女には草履つくらせて夜業までするぢやないか、人の寢た後で本を見、筆を取る位許して呉れてもよささうなもの、燈も別につけないで有明の豆ランプを便りにするのなら家の經濟にもかゝりはすまい……生意氣と云はれるけれど人がお八つを食べる間も田の畔に橫になつて雜誌の頁繰る私の心、好きなればこそと同情して下さらないのでせうか。

大波小波

☆

ゆき子

△六月號の小說――

△京子さんの天網島はよう御座いましたね、男に捨てられたいら〳〵した淸子が、小春の男に對する優しい心中に同情する邊や、自分を捨て行つたつれない男を忘れようと思ひながらも、尙男の身を案ずるあたりは、如何にもよく女性といふ者のムードの優しさが表れてゐると思ひました、全體に於て感じのよい作と思ひます。

月草女さんの朝湯―― 桃色のヴエールでそつと顏をなでられた樣なあつけないものでした、輕薄な不自然な戀の成立は此の作から江戸趣味を深く味ふとした妾は全然失望と冷やかな笑とより外は見出し得ませんでした。禮枝さんの二度目―― アーテイフイシヤルなコンポジシヨンやデザイン……そして不調和な語調―― 他に何んとも云ひ得ない作で御座います。

毎月私はつまらない評ですけれど書いてみたいと思ひます。

☆

上田菊枝子

△人の求むるものは、美なり。

△人の希望するものは、無限の命是なり。

△現代社會は虛僞なりと、知覺し得る人は、才ある人なり。

△己れの愚なる事を、知り得る人は、智者なり。而して、此の人は益々勤勉する要あり。

△光なき玉は、益々琢磨の餘地あるが如し。

△志を立つると否とは、自己にありて、成功と否とは、天命にあり。

△成功とは、發足點より見たる結果を云ふなり。

△富も、名も、權利も、望まぬ者とてはなし、されど、その望みに、大小あるを知る。

△美味、美服、(肉慾)好まぬ者とてはなし。而して此の慾望は、不安中の快樂なり。

△眞の快樂は、至誠の愛に於ける信仰なり。前者は人に卑まれ、後者は、人に尊ばる、永世の命は存在せり。

△藝術家の直接に目的とする所は、快樂にあり。

△動物と人間と、性相近し。而して動物は永世の命を得難く、人間は永世の命を、得る事動物よりも易し。

△偉人たるを得ずと、自暴自棄する人は、吾れ惡事を、續行せむと云ふが如し。而して性最も動物に近し。

△自然に支配さるゝものは偉人になり難く、自然を支配し得る人は偉人たるを得べし。

△富はより高く。求むる必要なし。富を得んとするものは、人を苦めむとするが如し。己れ貧しからむと欲すれば、富を得て樂む人ある可し。

△最も恐ろしきものは人にして、最も愛らしきものも人なり。

△金錢は毫も尊からず、唯だ金錢を得る正義の道、最も尊し。

△宇宙全一にして一の誤謬なし。

△凡て極致は一致す。

△唯だ知らず、鳥ありて卵出でたるか？卵ありて鳥出でたるか？

☆

海棠

つれ〴〵なるまゝに四五年も出した事のない汚い〳〵古行李を、そつと出して見ました、幼き時より何かと切拔く事が好きで其の中は皆切拔きばかりでございます、今見ると何んだこんなもの何を仕樣と思つて取つておいたのかしら、馬鹿らしい、小說の繪なぞ人に見られりや、笑はれつちまふわ、でも中央のには一寸好いのもあるつて一人言を云ひながら、塵を拂ひ〳〵皆出して見ましから、まあ一人住には大きすぐる十二疊間に一パイになつて了ひました。よく母樣はお前は嫁に行く時は、其切ぬきばかりでも一つになつてしまふね、もう一つも出來る位、ためてお置きよつて笑はれる事も度々でございました、都に居りました時も大きな箱に一パイためておきましたのを、休暇に歸つた留守に女中が屑屋に拂つたとて跡形もなくなつて居りました時の悲しさつてございません。今思ふてもにくらしくつてたまりません。

さて一枚〳〵と讀んで見りや、捨てるものもございません、やつぱり元のまゝしまつて置き度くなります、口の惡い兄樣や腕白の弟などは、女つて仕樣のないもんだ、古新聞など何うするんだ、其暇に何をしても好いぢやないかつて片

端から火の中に入れ様となさるのを、母様に叱らせる時の心地好さつてありませんわネ、、、

☆

弔露子

佛敎の現在の有樣は、根原地の印度並びに支那朝鮮すら全く微々として振はないのに、獨り我が國ばかりは今日の樣に隆盛であるばかりか、政府は猶之を保護する態度を示すといふのも、佛敎がどれだけ我が國民に効果を與へて居るかといふ事が解るのです。

それですから如何しても現在の坊さん達は、其の幸福を謝して其の傳導につとめ、我が國民の道德觀念を更に一段と高める事に盡力して頂かなければならないのです、近く開かれた宗敎家合同の會も時勢のかうした傾向が伺はれるのです、けれども現在の坊さん達の有樣は、聞くも痛ましい利慾に走つて其の流れは何處でつくるのでせうか、今年の春池上の坊さんは一枚十錢といふ入場券を賣つて豆まきをしたぢやありませんか、十錢を出す事の出來なかつた爲に豆を拾へなかつた人は少くなかつたでせう、利慾を單位とした豆まきに何んの幸福、何の厄除がありませうか、反つて福は外に鬼は內へ舞ひ戻つて來た事でせう、この弊がなくなる迄はとても安心して成佛は出來ないのです、引いては國民の品性にも黃金主義といふバチルスが繁殖を來たすのです。

更に坊さん達に申し上げたい事は、現今の樣な繁忙な時代に、月に一度や二度の說敎が何んの効果がありませう何んにもないのです、ですから出來れば毎日さもなくば一日おき位にして頂きたい、たとへ聽者は一人でも効果は月の說敎度數から考へても多いのです、遂には堂に溢るゝ迄にきまつて居るのです、努力といふ事程恐ろしい物はありません、かうして國民の品性の向上が表れた時坊さんの心持は、初めてそこに釋迦の弟子といふ貴い義務が果せるのではないでせうか、願くば坊さん達私の信ずるあまりの低見をお入れ下さい。

☆

つね子

△英國の法律家グラーク先生が現代の文壇を論じて二十世紀には十九世紀に釣り合ふやうな作物は實に寥々たるものであるといふので英文學者ゴス先生が憤慨したとか、然し此のゴス先生自身と雖も實は陰でグラーク先生の評論を至言と認めて居つたとか、唯、法律家が方角違に文學の是非を云々したと云ふので腹を立てたのである、私はこの際門外漢であるからと云つて沈默すべき理由はないと思ふ。

△吾が國でもうである早い話が繪畫に關係のない私達が繪畫の批評でもすると「何んだ素人の癖に」と頭から、貶しつける、然し「文藝」と云ふものは或る特種の人に許り見せるものではない廣く人間に見せるもので公衆に展覽して其の公衆が「美」を感ずればそれで「藝術」の目的は達する、人間が美を感ずるのは義務でない美學に依つて美感をコンマンドされる筈は更にない。

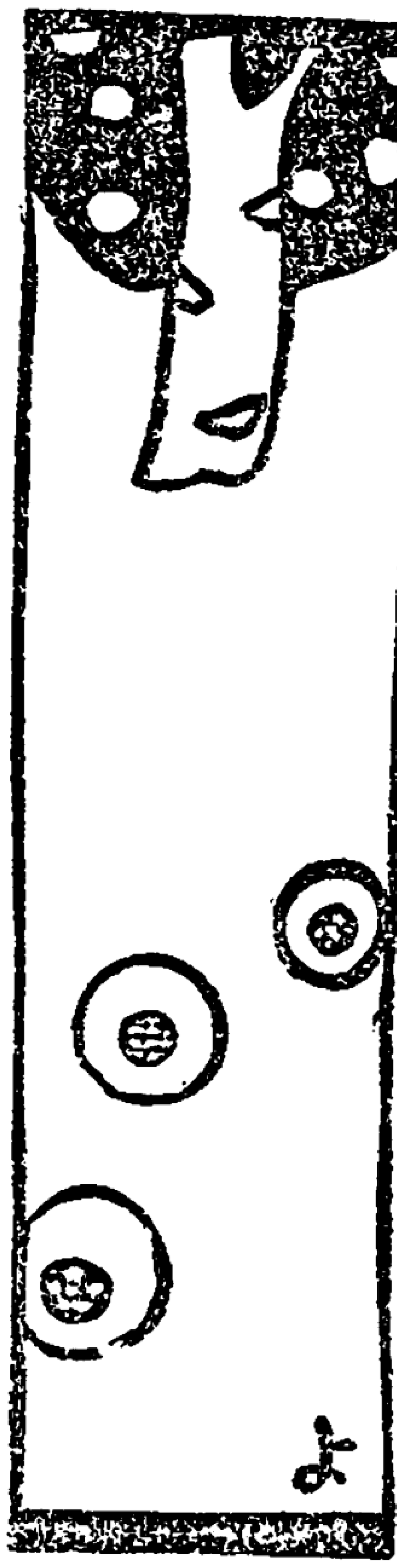
△卽ち幕の外から讃められるより幕の內から喝采を得ようとする樂屋落は吾が國に於て特に甚だしく私は感ずる、近世の吾が文壇には幾多の新しい文藝が移植された、然し國民一般は過半未だ其の趣味を解することが出來ずに居る、かゝる場合に加ふるに更に彼の日本一流の樂屋落を以て能事終れりとして居たら如何であらう、多數の人達は遂にテーストを味ひ得ずに終りはせないだらうか？

△泰西の詩人は口を揃へて「吾等は人のために詩を作る」と言つてをるとか、然し吾が藝壇の此れ迄の歌人俳士は皆自分のために詩を作つてあるのである、芭蕉は現に「俳諧は人のために作るのではない自分の爲に作るのだから辭しい」と殊更言ふたやうに記憶してゐる。

△斯る狹義の裡に育つた日本文藝の翫味鑑賞が骨董的、或は樂屋落ちとなるのは強ち無理ならぬことであつた旣に所謂樂屋その物が公平な鑑賞力を失ふて居る以上、斯るものを目當に作つた作物は必ず眞の要件に適合してゐないことは明かである。

△要するに藝術の目的が或る特種の人にのみ見せるためならば樂屋落的傾向を帶びてゐても差支なからうが「より大なる意味」の藝術とすれば後ろから讃められるのではなく前方からも讃めらるゝやうな創作して欲しいと私は思ふ。

△大波小波に載せて宜いやうな短い論文、文學、婦人、社會の各方面に涉る面白いものを投稿して下さい。



俳句

内藤鳴雪選

○（天賞）
尻切れし安居の庭の草履かな　京都　くれなゐ

○（地賞）
槍とりて川渡りけり夏の月　麹町　牧野銀杏子

○（人賞）
有明けて力なく吹く嵐かな　群馬　新井つま子

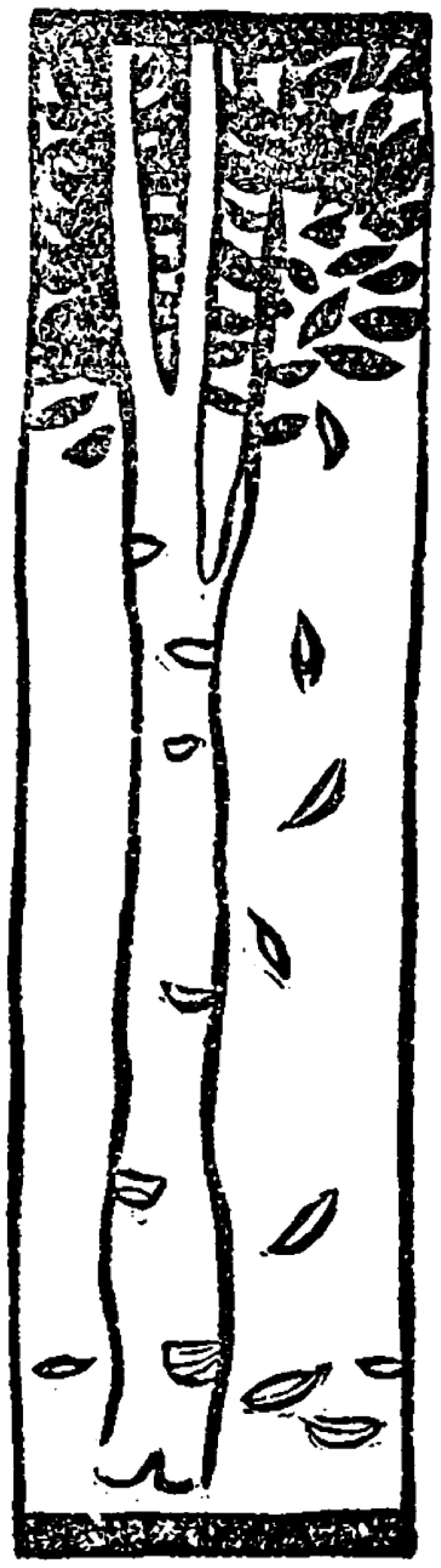
佳作

船人の友とならばや夏の月　廣島縣　春野蝶子
漣に佛三千おぼろかな　府下　小原あい子
紫陽花に戀ふ人多き夕かな　麹町　牧野照葉
朝顔に隠し文あり露深し　山口縣　秋友織野
初蚊帳の人なつかしき匂かな　越後　若井紅雨
薫風の波蹴つて行く白帆かな　牛込　畑中小子
湯あがりのはだ心地よきセル一重　福岡縣　長谷川國枝

美しき人に傘かす夏の雨　福岡縣　櫻井敏朗子
古窓に忍草つる女かな　深川　矢澤榮子
幼兒の寝顔を渡る若葉風　山口縣　福田芳枝
尼寺の芭蕉にそゝぐ時雨かな　茨城縣　浮舟
切桑の緑玉なす五月晴　上毛　阿久津雲路
若葉漏る月や嵐や涼み臺　淺草　露の玉女
緑日の植木屋多し夏の月　王子町　大浪せい子
上臈のうたよむ月の夜や戀ひし　山城　木の花
はたごやの湯を出て涼し夏の夕　ますみ
螢追ひてこゝも涼みの人ありぬ　山口縣　千香子
五十鈴川に水くむ禰宜や青嵐　大阪　河盛よしの
風かをる君住む岡のかなたより　前橋　みつ枝
大寺の柱冷めたき若葉かな　横須賀　いなめ
新月や女ばかりの涼臺　周防　重原美女子
今朝の秋石槌山のはるかなり　愛媛縣　野堯子
月影の残りて光る新樹かな　大阪　うすゞき
若葉頃ものうしとかこつ男かな　栃木　百合枝
旅僧の衣濡れけり百合の露　岐阜市　紫陽花
河骨の花ほのぐと朝の月　山口縣　栃艮美那子
雲雀野や馬引く馬士に小雨降る　大和　みの
青すだれ籠の螢に映えにけり　大和　貞枝
飯事の昔なつかし豆の花　新潟縣　上村恒子
涼しさの笛をふくなり乞食の子　長野縣　小林美喜代子
櫛落ちて影のみだれや草清水　奈良縣　安達房子
晝顔や陰なき道の土しろき　東京　つゆ
五月雨やビラ繪さびしき店の口　周防　金澤房子
水盆にさす夕月や河鹿鳴く　岡山市　桂木淑子
秀才の君に比せばや白薔薇　東京　西村貞子
炎天や井戸に浮くなる瓜西瓜　日暮里　波多仲政子
遊ぶ子の夏帽白う磯の月　淺草　さつき
一隊の水馬蹴ふや夏の川　備中　小見山春子

雨の日や蛙の背に蝸牛　下總　あやめ女
柳潜る相逢ひ傘や春の宵　愛知縣　中村百合香
橋畔の出茶屋に集ふ涼み哉　伊賀　中村こま子
春雨の人にとびつく蛙哉　福井　明の星
温泉の宿の浴衣着て街を歩きけり　日本橋　はづき
紫陽花や午ねた顔のたゝみあと　神田　里豐草影子
村雨やお染の好きな紺の傘　金澤　夢の里
五月雨や鐘樓に登る尼一人　京都　一女
五月雨に戀なればこそ花住居　群馬縣　阿久津尚子
池に生ふ五尺の葦や月涼し　三重縣　夢の子
雨晴れて雄蝶尋ぬる雌蝶かな　王子町　高木多香子
蚕とりて宿直の夜の明易き　水戸市　小松崎ふみ子
風薫る窓の下なり百合畑　赤坂　しげよ
江を上る數の舟あり夏の月　大阪市　寺井しぐれ
春の水山の低みを流れけり　遠江　森下政枝
田植歌うたひ疲れて好き乙女　栃木　梅子
五月雨の沖遥なる干潟かな　上總　鈴木喜子
七夕の夕風涼し笹の音　群馬縣　新井延子
初秋の櫛に滲みたる油かな　三重縣　富田一色
初夏の風袴のひだのみだれかな　山梨　吉田くにえ
夕立ゝ後は涼しき青すだれ　札幌　山内白梅
陽炎の眼に入るまちの日中かな　信濃　青木よし子
磯草の黄に咲く花や露涼し　京都市　ひで子
かんかんと桶屋の隣り明け易き　三重縣　大井左右美
大河に筏集ひぬ五月晴　金澤市　歌の宵
神鳴りに夢驚きし晝寢かな　岐阜縣　佐藤初音
閼伽桶の水にも夏の雲の影　和歌山　山村香枝
夢さめて寢なれぬ床に夏の月　大阪　村田擴子
戀しらぬ娘も交る田植かな　山口縣　繩田みさ子
大池に夏のつむじの落葉かな　澁谷　月見草
そよそよと袖吹かへす若葉風　岐阜縣　佐藤天香

諸團扇の風もゆかしや京女　京都　三宅白菫女
湯浴みつゝ時鳥聞く里居かな　埼玉縣　渡邊積翠
夏の夜や夕顔棚に人多し　大阪　壽草
夏さむき暇にも鳴け不如歸　美作　橋本紫
梅雨の窓眼を閉ぢて君おはす　水戸市　川崎春子
鐵橋を越えて帆を上ぐ夏の舟　茨城　田村はつ子
さみだれや空うちあふぐ旅の僧　木曾　月見草
訪ひ合ふやあらしの後の寺と里　群馬縣　冷花子
梅雨晴れて京は五山の緊りかな　下總　北川つね子
塀高き公卿の庭や桐の花　下總　あらゝぎ
鹽を焼く磯の小村や雲の峰　京城　瀧本光子
圓窓に泓横たへし日永哉　備前　勿忘草
麕が住むてふ谷の五月や黑牡丹　小石川　千代子
夏の月泣きては笑ふ狂女かな　王子町　大浪はる子
五月雨に酒貰うて行く角力かな　横須賀　美茄子
神の灯に靡く御階の若柳　栃木　紫波
湯に入りて窓に眺めぬ雲の峰　奈良縣　上田都子
讀書する身もとけかゝる暑さかな　信濃　駒澤三難子
古道の清水を照らす螢かな　大和　紅斜子
夏痩の男となりぬ栗の花　備中　小見山春
涼臺に忘れられたる團扇哉　日本橋　小林政子
稲刈りて案山子淋しく立ちにけり　札幌　しらうめ
水草に螢すゞしき光かな　群馬縣　新井靜江
岩清水鷺草ゆらぐ飛沫かな　三重縣　水谷みね子
淡墨のあやめかきたる團扇哉　三重縣　野崎ゆき子
百日紅苔むす石にこぼれけり　下總　伊能まさ子
馬留や螢折々影さして　麹町　牧野はん子
夏の馬古城の月に喘ぐかな　大和　上田ちか子
人の喪にこもる三日やほとゝぎす　横濱　山崎京子
堂守小細工をすて蚊遣かな　京都　しげ子
夏の夜を涼しき人の笑顔かな　美作　むらさき



初作

編輯局選

○かたつむりの着物

坂部米子

降りつゞいて居つた長雨も名殘りなく晴れて、初夏の風は木立をめぐつて靜かに流れ込んで來る。

おしごとなんかそつちのけにして、今、屆いたばかりの女子文壇を一心に讀んで居ると、「姉ちやんつ。」て從妹の聲、「うるさいのね、姉ちやんは今御本を讀んで居るのよ、お人形の着物なら、今晩、縫つて上げるわ、其んなに催促しなくともいゝぢやありませんか、」と申しますと、「人形さんのおべゞぢやないの、綿なの、ちつとでいゝんですから頂戴な、」「綿なんか何うするの、」「あのね、しかつちやいやよ今あたいね、お隣のはま子さんと、かたつむりの殼をむしつちやつたの、さうするとブル〱して居るので可愛さうだから紙に包んでやつたわ、だけど、はま子さんが紙ぢやゴツ〱して痛いでせうと云ふから綿をいたゞきに來たのですのに姉ちやん御本ばかり抱いて居るのですもの、母様にいひつけてよ」と星の樣な眼でにらむ眞似する。

「まあ!!!ぢや上げますからよく看護なさいよ、」と少々綿を出して與へると「ありがたうよ、姉ちやんあたい大好きよ、母樣よりも」ですつて「たつちやん現金ね」、「なあに、」「もう母様がおかへりになりませうよ」「え、そしたら姉ちやんとお土産いたゞきませうね、」「あたい早く行きませう。死なゝい中に綿のおべゞを着せませう」と云ひながら庭の方へ馳けて行きました。（地賞）

初心らしくて好い。（評）

○蛙

長野縣　新緑

四五日前迄はれんげ草の花で桃色の疊をしきつめたやうであつたのが束の間に鏡のやうになつた。

一人唱歌をうたひながらあぜ草をかつてゐるとどこかで誰かよんでゐるやうだから頭を上げて見ると誰もゐない耳をすましてよく聞いてゐると蛙の鳴き聲であつた。

今迄どぶや草叢の中にすくんでゐたのが田の中に水が這入つたので蛙は銘々つれだつて出て來たのでせう。彼所でも此所でも青蛙がお腹をふくらめて「ガワガワ」と鳴いてゐるかと思へば向の方ではどんびき蛙が「ゴト〱」と鳴いて居る。

夕方近くなればなほはげしく「ガワ〱ゴト〱」と耳もつんざくばかりに鳴く。

蛙は何が悲しくて鳴くのでせうか。（人賞）

これも初心らしい。（評）

○夏の紀の川

和歌山縣　宇田つや子

蛙なく水田二ツと、月見草咲く堤一ツを、越えると紀の川で、みがかれた小石の上を、美しい水が流れて居ります。川原のくぼみの所々、洪水が置いて行つた、やはらかい土に、うすもゝ色の、かあいらしい川原

なでしこが、咲きつゞきます。枝ぶりのよい女萩もスク〳〵と、のびて居ます、小さい頃はこの川原の砂を掘つてそこへ白い石、青がかつた石、赤い石を入れて、池ごとをしてよく遊びました。

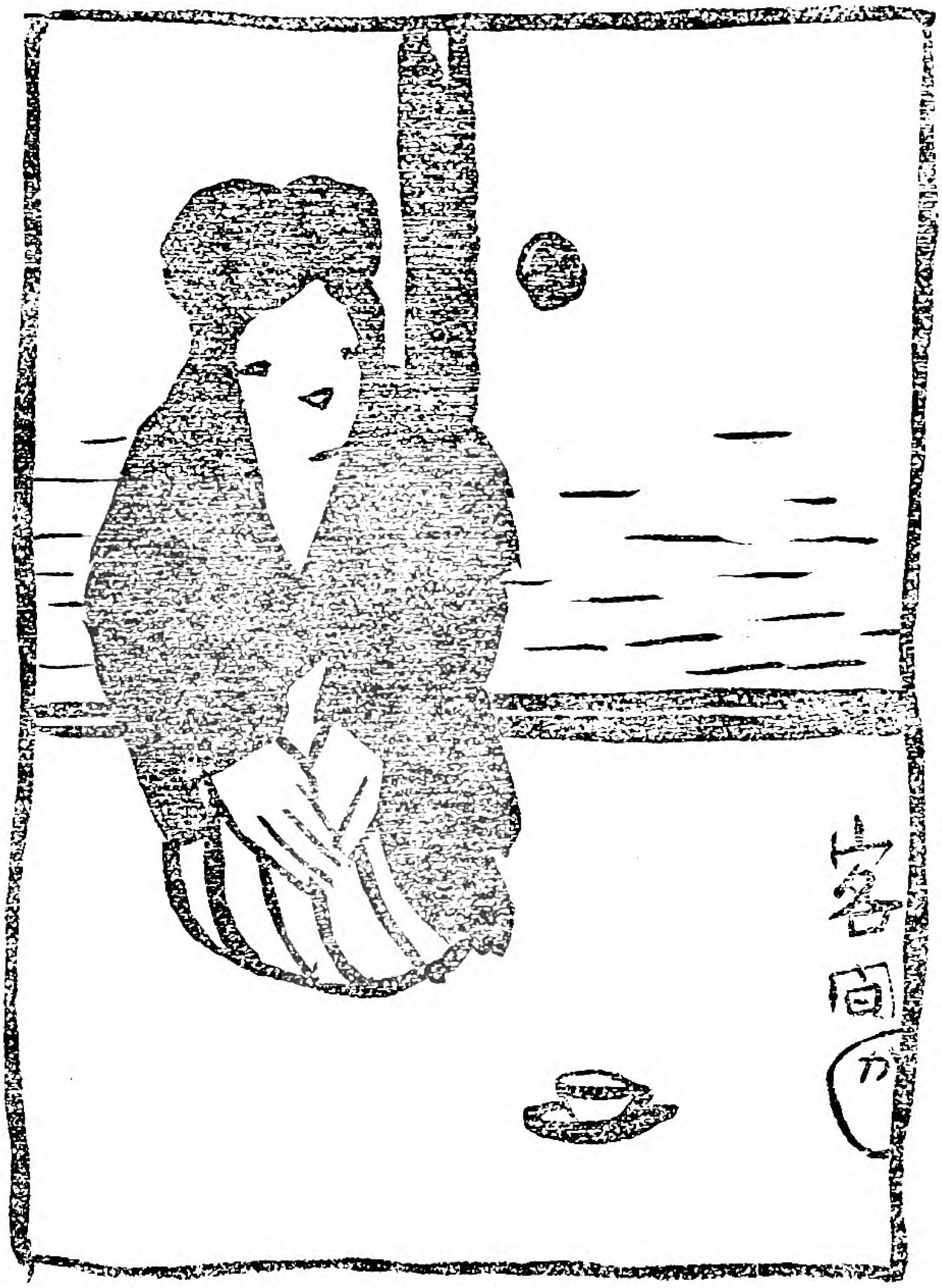
心地のよい砂をふんで、敏枝さん等と、むぎわら帽子の首だけ出して水に入つて遊んだ事もあります。

此の頃は夕暮になると、姉様や妹を、つれて涼みに行きます、川下の方、岩出の鐵橋のあたりボーツと、かすんで蛇の尾の様になつた流れは赤い雲、紫の山をうつして美しい、川の向ふ岸は安樂川村で、山續きの麓に家々は立並んで、大聲で話合ふ男の聲や、襦袢はだかで歩いて居る女の姿などはよくわかります。

火ともし頃になると家々のともし火はチラ〳〵と、長く水にひいてそれは〳〵靜かで、きれいです。

都に住む人々は、イルミネーションだの、活動しやしんだのと、華やかな、花瓦斯のもとで、そゝる様な、音樂に醉ふて居る時、私共は靜かな、さびしい、そしてうれしい、おとなしい、あこがれを抱いて、紀の川原に、立つて居るのです。

菅子さんの姉さんでせう、年齢は年齢だけ、少し幼い處はありますが、癖のない好い文章です、姉さんに負けないやうに勉強して下さい。（評）



客室　浅草　石川一枝

○今日の心

加賀　中崎於京

此間から氣ざはりになつてゐた今日の吉田家の花枝さんの結婚披露式、別にあの進さんが聟に行かれたのが怨でもなければ、花枝さんがあの人を迎へたのが妬ましいわけでもない、なんでもないけれど、或は私！といふものゝ心の心の奥の戸を兩方からそつと開いてみたならば、其つき合せ目に「それだ」と書かれてあるかは知らないけれど、何しろ氣の向かぬお招ぎ、いつも氣もちのいゝ湯殿の曇り硝子さへ何故透き通つてくれないかと齒がゆいおもひ。さりとて此の春あれ程強請つて裾模樣さへ繡にして頂いた紋附、狹い此町では美しいと評されて——自分さへも小さい時から鏡見るのが嬉しかつた——母としてこの私にゴブランの丸帶、お父様に内證で東京の人の様な首掛鎖さへ買つたもの、さうした服裝で人中へ出させたいだらう、未だ十八ならおかよさんの島田で行つてみたくもあるけれど……恁う思ひ乍

らも固練の白粉を眞白に塗り終へた、噫矢張行かねばならないのか知ら……。鏡臺を離れると母樣が後に「平打はもつと後でも好いもんだよ、ほうら、お前がさうして行けば花枝さんだつて烈藥屋の娘だつて逃げなくちやあならないわ」斯う云ふてじつと私をみて彼在るお母さんの襟元をみて、私はあゝ矢張お母さんも女だわねえと思つた。

目をつぶると暗い瞳の内ぶらを、喜悅（?）に滿ちた建さんの顏がうろつく、、、まゝよ、、、、、、やつぱり行きませう。

これも女か。（評）

○其の前

浅草　さ　つ　き

今日も髮結のお安さんが來て母樣のあれこれとのお指圖で、艶々光る島田が出來上つた、一度一度に念が入つて行くのも嬉しいのやら、つらいのやら、まあ合せてでも御らんなさいなと母樣はお安さんと顏見合せてほゝゑまれた、何だか極りがわるく、赤くなつて部屋へにげ込み鏡臺の前で、そつと髷に手をあてたら、氷髮へさはつた樣に冷やつとした。豫定の通り午後から本箱の整理にかゝつた、なつかしい古日記をちよい〳〵ひろひ讀してゐたらはつと驚いた「妙さんなどは今の内だわね。美しい私などは處女の時代などまるでない位よ、あなたはほんとに幸福者よ、えゝ淋しい、まあもつたいない事、今幸福を思はないで、人妻となつて眞の樂園を空想してゐるのでしやう、大間違ですよ、人の妻と云ふのは丁度小鳥が籠に入れられたやうな者よ、何不足なく暮しても、大空を我物顏に飛びまはつた自由の昔を戀ふて泣かねばなりません、丁度其自由の花の時代にゐて、滿足を思はなければ、一生を過じて樂しいと思ふ事はありますまいと思ふわ、今の内に兩翅を一パイに廣げて、踊ふて、歌ふて、面白く御暮らしなさいよと、血の氣の失せた頰に笑みをたゝえて語られた私もこんな事思ふ時代が來るかしらと思ふて記す」とあり。あゝ之は姉樣の御病を鎌倉へ御見舞申した時の、息もつかずにづうつと讀んだあゝ私は陋に引かれて籠に急ぐ鳥なのか、あゝ私の前途は如何であろうと強く〳〵今の胸にはこたえて、もう少し自由の時代の永かれと祈るものかいな！、今となりては思ひは思ひを產み亂れに亂るゝ若き心。

ふと圓窓の障子に鳥影さして川原の方へ一聲高く自由の身をほこる如くに。

處女の不安。（評）

○野邊の夕暮れ

鳥取　夕　美　香

さら〳〵と流れ淸きいさゝ川の萠ゆる樣な若草の間を通つて居るのが丁度一筋の白い帶が延してある樣だ。今迄靑かつた西の空に一條の紅の線がすうつと引いたと思ふと、忽ち又一線……空は刻一刻と變つて來て黃色樺色が浮んで見る間に燃ゆる樣な紅に染められた。

彼方の林も畑も靑葉も皆此の麗しい夕日を浴びて心地善ささうに眠つて居るやうだ。そよ〳〵と吹く軟風は、妾の顏を軟かく撫でた。眞紅に染められた若草は、長い眠りから覺めたやうに、ぶる〳〵と身を振はせる。半町餘り向ふの一軒家の緣側に六つ位の男の子が長く寢そべつて、白い可愛氣な犬とぢやれて居る。可愛ゆく笑ふ顏が能く分る。白手拭をかぶつて鍬を擔いだ農夫が一軒家から立ち登る夕餉の煙に掩はれた野路を辿り、己が家に急ぐのが見える。遠くの寺からつき出した晩鐘餘韻長く響いて遠き天外に消え去つた。

ねぐらに急ぐ烏が二羽鬱々した林の上を二聲三聲叫び乍ら西の彼方に飛んで行く。繁つた林は淡き夢の中に浮んで居る樣だ、西の空の麗しかつた黃金色の夕日は、何日の間にか色さめて唯うすくぼうつと花乙女の羞んだ頰の色の樣に美しくかゝつて居た。それも束の間直ぐ消え失せてあとには寂しい鼠色の雲が出た。あたりは大分暗くなつた。薄黑い幕が蔽ひかゝる樣に……………

稽古に書いたものらしい。（評）

讀友くらぶ

交際

○ 下關市外生野村大坪部府　岡村よし子

▲歴史好き　女子文壇御愛讀の御姉樣この西の國の淋しい濱邊に育つた妾をあはれと思召して御交際下さいましな、私は歴史等に大變趣味を持つて居ますから御姉樣の中御趣味あらば郷土史なんど聞かして頂戴な。きつと御返事はあげてよ。

○ 大阪市北區上福島北一丁目一五九　北中光子

▲誌友の皆樣よ　私は古くから女子文壇の愛讀者で御座います何卒不束な者で御座いますが御見すてなく永久に御交際下さいませ就きましては和歌、詩、散文等は大好で御座いますが無學の私には其が自由に書けないのですよ何卒諸姉樣よろしく御敎への程願上ますレター頂戴な。

○ 群馬縣碓氷郡九十九村　後藤みどり

▲私も本年五月から本誌の愛讀者となりました本當に田舍に淋しく暮らして居りますから何卒「レター」御恵み下さいませ。

○ 高知縣高岡町時戸田中樣内　花岡愛子

▲草深き山里の庵に住ふ乙女なんですが女子文壇は先月から愛讀して何よりの友としつゝ居ます音樂を御好み遊ばす情深き皆樣に御交りを御願ひ申ます。

○ 神田五軒町二十、山中方　中山歌子

▲心から　誠に一人淋しく暮して居りますの筆の上のみでなく心からの御交りが願ひたう存じます振ひつきたい樣なお手紙でも心にもない事が書てあるのは私大嫌ひでございますのよ萬が一御返事が出來兼た場合がありましたら誌上にておわびをいたします。

○ 長崎縣北高來郡臣結村二〇四　町田とし子

▲皆樣お暑うなりました　御かはり御座いませんか私は淋しい田舍に日を送つて居りますのどうか皆樣御うるはしい御レター頂戴な、御返事はきつとさしあげますわ、淋しいのよ……清い御交際を永久にね御頼ひ致します。

○ 青森縣下北郡田石部町字小川町　清野こう子

▲片田舍より……おなつかしき文壇の諸姉樣妾は片田舍に住む至つて淺學の不束者ですが以後は御見捨なく御交り下さいまし、尚玉章や繪はがきの交換をも御願ひ申します。

○ 豐後　夕草子

▲吾が豐後にも藝術化した人がだん〳〵出來て來たる事を私は心からよろこびます、ことに中山香誌友の熱心さには、羨望に堪へません、同じ大分縣でも「大分」とか「豐前」とか書いてあるのは少しもなつかしいとも何とも思はないが豐後と書いてある作物を見るとなつかしくて仕方がない。人の心って妙なものだと切に思ふ。終りに、益々奮勵せられよ？　吾が豐後の誌友。

○ 清國芝罘愛德街　上野絹子

▲淋しい異郷より　記者樣を初め誌友の皆々樣御變りは御座いませんか其後私も每月熱心に皆樣の作を拜見致して居りますよ此後共御失念なくば私を思ひ出して下さいませね、ことに長崎の御方は懷かしう御座いますわ。

○　京都市下珠數屋町木村アサ内　伊藤みゆき

▲わたしは京のまちの　女ですの御情ぶかき諸姉樣方何卒御玉章御惠み下さい御かへしは屹度いたしますわ。

○　甲府市櫻町村松方　長田龜子

▲甲斐國より　私は親しむ兄弟も姉妹もなく唯文壇を友として居る者ですの誌友の諸孃よ一片の御同情有らば末長くレターや繪葉書等の御交換を偏に願ひます。

○　三河額田郡岡崎町字傳馬八十五番　神戶須美禮

▲私は二月　から女子文壇を愛讀致して居ります今後諸姉樣の御同情を御分け下さい、何卒御願ひ仕ます。

○　福岡市東中洲町古川霞次郎内　疋田みさを

▲歌を好む方　綠の夏もそろく老いてまゐりました。この投書が紙上に掲げられます頃は、懷かしい故山の、慈愛深き父母の許に、銷夏の樂しい遊びを追つて、再び校舍に歸り、そして、二學期の新らしい敎授を受けてゐる頃でせう。月日の過ぎて行くは、寔に夢の樣ですね、歌を好まれる地方のみな樣よ、永い休暇に詠まれた、お歌を拜見致したう御座います、私は歌を唯一の慰藉として居る者です。何卒地方同好の御方々と、わけて御文通が望ましゆう御座います。不束者を、御導き下さい。

○　茨城縣筑波郡大穗村篠崎　中川淸子

▲繪葉書　玉章、圖書、寫眞の交換をねがひます妾も本誌の愛讀者です。

○　佐賀　泥子

▲肩身がせまい　私は雜誌を見る度に肩身が狹い樣な淋しい樣な感に打たれます、幾度あさつても我が縣のお方は一人も見當らないぢやありませんか殊に女子文壇には皆無といつてい丶位です、全く文藝に趣味のない方許りでもありますまいに、他縣のお方のあの御活動振り實に羨ましくてなりません、何々講習會とか同窓會とでもいへば、それはく御念入のお化粧にお衣裳の展覽會彼方に五人此方に七人集つては何のお話？　誰樣のみ帶、何樣のお召物、藥にたつて文藝のお話など持出す方は一人もありませんちつとも見上げた所がないと私は厭な氣持がします、これが若し誌友會でもあつたらどんなに樂しいでせうに、皆さん奮發して下さい。

○　伯耆國米子法勝寺町　田村美子

▲私も　此度女子文壇の愛讀者となりました、遲筆秀才なる皆々樣、ふつ丶かなる愚女をよろしくお指導して下さいませ、王子の大浪せい子樣もしや貴女は、大日本文學會の會員ではありませんでしたか、私は以前から慕しうなつかしう思つて居ります、お交際を…永久にね。

○　廣島市西白島町　村上白菊

▲たへがたき暑さ　にて候哉さて誌友の皆樣私も女子文壇の愛讀者になりました不束者ですが永久に御交際下さいませ。

○　岡山縣兒島郡鉾立村大字番田　山本筆

▲望がかなつて　私は最うよつぽど前からの愛讀者でしたの……けれど或事情のため御なつかしい皆樣と御交際をねがふ事も又、投書も出來ませんでしたですが私の身上にも樂しい花咲く春が來たのでせう？日頃の望がかなつて嬉しくもかく未熟なふでを取る事を得ました。皆々樣、草深き田舍の不束な私に、御やさしい御玉章を。

○　淡路津名郡釜口　高田淸子

▲茅海に臨める　淋しい片田舍に暮してゐる不束者の妾でございますが記者樣、誌友諸孃何卒御見捨なく御交際をね……殊に妾は和歌と俳句に趣味を持つてゐますのよ、妾と同趣味の諸孃よレター頂戴な。

○　京都市　町五條北入東側伊藤化粧品店内　伊藤英美子

▲「少女」より　私は七月號まで永らくの間「少女」を愛讀してた不束者です今度「少女」の改題に付いて思ひ立ち淺學の身を持つて姉上樣方のお仲間には入つたので有ります何卒宜敷御願

申上ます。終りにのぞみ一時的でなく永久に淸き御交際を玉章又は繪葉書御送り下さい返事は屹度差上ます。

○　　　　プリムローズ

▲お願ひ●●●　繪はがきや御手紙の交換をして誌友の姉君樣たちと永久に御交際を願ひ度うございます、私の名宛は東京小石川久堅町十四橋本樣方 PRIMROSE として下さい必ず御返事さし上げます。

○　　　廣島市荒神町一五三　伊藤花子

▲寮歌●●　皆樣の中に一高の寮歌中「綠も深き柏葉の」と「春爛漫の花の色」と御存じの方は何卒御敎へ下さいませんか粗末ながら繪葉書を御禮に差上げます。

○　　　芝區乘房町十二山本樣方　石井まこと

▲心ある御方へ●●●●●●　靑葉隱れに病むでゐた私は再び本誌の愛讀者となりましたわ昨年只の一回投書したきり今迄懷しい文にたずさわる事が出來なかつたのでどんなに泣たか解らなくつてよ皆樣の御內に本誌七巻十か十一號に私の初作が揭載されて居るのを御持の御方は何卒御讓り下さいませ御禮は屹度致してよ。

○　　　岡山縣邑久郡笠加村上笠加　明暗社　入江曉花

▲明暗●●　誌友の皆さん今回私共發企致しまして詩歌を中心とし其他純文藝を硏究し併せて自分の作物を永遠に藏し置くといふの目的を以て明暗社なるを設けまして年四回以上雜誌明暗を發行する計畫です、そして今回其第一輯原稿を募集致します、皆さんドン〳〵御投稿を願ひます、種類は短歌三十首以內、詩二篇以內、俳句二十句以內、短文一篇限りです締切八月三十一日限り、投稿のみは誰でも自由無料です、然し雜誌の配布を希望さるゝお方は實費として郵劵十五錢御送附下さい。

○　　　奈良縣吉野郡下市町字下市　辰巳千代子

▲よしの山●●●●　峰の白雪ふみわけて入りにし人のあとぞ戀しきと思ひ出多き吉野の山麓、水淸き吉野河畔の、ずしやのおさとで名高き、こゝ下市の里にさびしく、くらすふつゝかなる妹あることを忘れ給はず、永久にやさしきお交りのほど願ひ上げ候尙又絹レースにて編みし栞、お送り下されしお方樣には、吉野にても、又當地にても、お好みの名所繪葉書、お禮として差上ぐべく候。

○　　　信濃大町局內野口校內　麓の女

▲俳句狂●●●　私は俳句に非常に趣味をもつて居りますの。同好の御方はどし〳〵御送り下さいませ。博愛なる皆樣に願ひます。

○　　　大分縣北海部郡下北津留村一二一番地　首藤いま子

▲昨冬から病にかゝり●●●●●●●●　遂に慢性病となつて今日まで全快しませんで毎日天上を眺めたり枕邊の花瓣を數えたりつまらぬ思ひに大切な日を送つて居ります諸姉樣方御同情して繪葉書や御玉章や讀み終りの御本でも御惠送下さるれば誠に嬉しう御座います必ず〳〵御禮はいたします。

○　　　千葉縣野田町多田方　若草女

▲誌友の皆樣へ●●●●●●　私事は本誌愛讀者の一人で御座います以後御交際を願ひます御玉章を下さればすぐ御返事さしあげます。

○　　　大阪市南區天王寺筆ヶ崎町　吉井方　田上しづ子

▲大阪より●●●●　おなつかしき誌友の皆樣妾は二年前からの愛讀者なんですけれども只今はじめて誌友くらぶに投書さして戴きました何卒不束な者ですが永久にお交り下さい又御玉章や繪はがきの交換も切に御願ひ申ます。

○　　　千葉縣長生郡二宮本鄉村眞名大和久豐吉方勝　枝子

▲千葉縣の人東京の人是非●●●●●●●●●　妾も愛讀者です諸姉樣繪葉書やレターの交換をして頂戴な妾嬉しく御返事するわ屹度。

書籍交換

○　　　高崎市白銀町　岸とも

▲萬天下の姉上樣、私に家庭要鑑、言海、作文辭書、食道樂冬の巻、袋物敎科書、新式美術造花、裁縫敎科書、刺繡術新書、文の手ほどき家事要訣、後のほとゝぎす、多恨、文章軌範、評林讀本、新古今和歌集、文海の指南車等の不用書が御座います故姉上樣方のうちに△杉本文太郎氏の日本座敷の飾り方、下田歌子氏の婦人禮法、田寺寬二氏の花ことば、宮川す

み子氏の三寶主義、芳賀矢一氏の國民性十論、巖谷小波氏のふところかゞみ、石橋臥波寶舟と七福神、井上正賀氏の食物論、神谷保朗氏の旋頭歌詳釋、中島銕ホ氏の菅公言行錄、武田櫻桃氏の臺所顧問、石井泰次郎氏の明治の禮式作法、後閑菊野、大妻瑳鷹氏の家事經濟學。等御持合せの方は何卒御交換下さいませんか尙又卅年より卅三年迄に發行せられた總ての雜誌の中にて何なりと御持の方はどうぞ拜借させて下さいませ以前發行せられた大日本女學會の高等科講義錄をも伏して御願ひ申上ます。

○　名古屋の女

△小間物と圖書の交換を御願ひ申度いので御座います、若し皆樣の中で與謝野晶子樣の源氏物語御不用の方は何の巻でもよろしいのですが御交換下さいませんか、若し一巻なれば舶來髮金色頸掛鎖（ルビーパール入りの胴〆付）と、二巻なれば、束髮用二枚櫛（サフヤ人造ダイヤパールなどにて裝飾せし極上等のもの）及び半襟一掛以上二品と、三巻なれば前記の三品と御交換を願ひ度う御座います、そして手づれのして居ないのでしたら何の方にでも流行の花束を御禮に差上げます、右御思召の有る方は紙上にて知らせ下さいまし失禮ですけれど其節に直接私の住所姓名を申上げます。

○　伊豆三島町加　藤　爲

△本年五六月の新潮、六月一號の趣味、地方お持の方はおゆづり下さい。

○　府下巣鴨村六六〇野口方
大浪せい子

△誌友の方で昨年か今年の寮歌集を御持でしたら私の文學講義錄と交換して頂戴なそれから五丈原御存じでしたら御敎へ下さいませんか御禮に繪ハガキか古雜誌を差上げますわ。

○　滋賀縣大津市松屋町八八
山田田鶴子

△入用の書。現代文藝叢書「泥人形」「我子の家」「山上より」「女と赤い鳥」「最近小説家」秋聲氏著「黴」「足跡」谷崎氏著「刺靑」白鳥氏著「何處へ」昨年及本年「白樺」「スバル」。
▲所有の分。藤村氏著「新片町より」草平氏著「煤煙上巻」鷗外氏譯「續一幕物」荷風氏著「荷風集」雜誌新小説、中央公論。
右交換及讓讀何れにてもよろしく御ハガキにて御一報願上候。

○　愛知縣起町二七商店方
若月ひさ子

▲皆樣の中に秀才文壇四十一年一月號より本年四月號迄女子文壇四十一年一月號より本年三月號迄新婦人初號より第一年十月號まで右何れも特別號增刊號も含む。及び獨步書簡集、グラヒック臨時增刊結婚畫報御所持の方にて御不用のが御座いましたら私の演藝畫報の四十三年度、文章世界の四十三年度、帝國文學の四十三年度、女學世界の四十三年度、日本艷女傳、文藝倶樂部四十二年度、新小説の四十一二年度、婦人世界の四十三年度、スバルの四十三年度の中と御交換下さいませんか御希望の方は私の要求致しましたのを御送附の際ハガキなり帶封のすみに私の所持の書名を記して下されば直に御返し送附致します是非御聞き下さいまし若し私の所持品中他の方と差し合ひますといけません故二三種御記しの上送って頂戴。

○　山口縣佐波郡和田村米光
財間濃生子

▲小説。思ひ出の記、魔風戀風、壁畫、戀の浮島、雜誌、淑女畫報、一巻一號、婦人世界本年四月五月號。右入用の御方にお讓り致します。
△秀才文壇本年四月特別號、及六月普通號二冊御郵送下されし方に御望の書を御送付致します但し十日以内の事。

○　愛知縣中島郡朝日村字祐久
水谷靜枝子

▲私の手元には昨年四月から十日までの「婦女界」七冊と同じく十月から今年二月までの「女學世界」增刊とも七冊、及び增刊「悲劇十番」とが只今不用になつて居りますから、皆樣の持つてらつしやる「新文章」本誌昨年の一月號（七年一號）及び若き婦人と御交換下さいませんでせうか、先に何卒御葉書を下さいまし。

○　茨城縣新治郡石岡町九七四笹目市太郎方
姬島優梨枝

▲諸姉樣。私は四十三年の少女の友一月より五月迄、八月より十一月迄、四十四年度二月迄、又四十三年の婦女界五冊同四十四年の二冊、女子文壇昨年十月號及び增刊娘時代、同月の婦人くらぶ、本年五月女學世界等不用になつて居りますから、何本かと交換して下さいませんか、お願ひ申ます。

○　東京市小石川區西原町二ノ二二西川方
栗原かね子

▲私の手元。に次の樣な本が有りますから御望の御方は枝折、附蒲團、リボン、ハンカチーフ

等と御交換致しませう、新己が罪、泥人形、ノンキ者のノンキ話、天うつ浪の上一冊、故郷マグダ、以上種々ありますから何れにても御指定下さらば御送り致します御望みの方は必ず御手紙下さいませ。

○ 尾道市土堂町　岩崎花子

△皆樣の御内で本誌の增刊(文壇の花)只今御不用の御方が御ざいますなれば どうぞおゆづり下さい 御禮は屹度致します、前もつて一寸御一報なし下さいませ。

○ 本鄕　S　子

▲洋食の料理法　皆樣の中で誰にでも出來る輕便な料理法を知りたき方は 誌上にて御住所を御知らせ下されば妾の方から手紙を差上升 道具を使ずに御美味しく出來るメニユーを差上升。

記者より

▲豐後、吉田夕草さんに、先日は御地の名產を二鑵お送り下さいまして有り難う、お禮が延引になつて相濟みません(記者)▲靜岡の貞水女さんに、以前の時にも能く投稿なさいましたのを記者は覺えて居ります、再び仲間におはいり下さつたのはよろこばしいことです(記者)▲岩崎あや子さん其他二三の方々に、賞品發送に就いてお尋ね下さいましたが、入賞したる以上は必ず賞品は發送いたします、延引になつて相濟みませんが、先後の順次を逐ふて發送して居ります、但し原稿の一端に住所姓名を詳しく書いてないものは發送の方法がないので見合してあります(記者)

▲望月れい子、戶田光子、鈴蘭、谷口麗子、都鳥よし子、稻垣みちを、三根ちさ、加藤篤、齋藤靜子、高橋郷子、宮本孝子、優梨子、わか葉、早川花子、大須かの子、小泉貞子、赤木花子、以上の諸孃より賞品着の御禮書わざ〳〵お送り下さいまして正に拜見いたしました(記者)▲青木嘉子さんに、東京に出ないで地方で御勉强のよししつかり願ひます(記者)▲佃野の百合、福岡、市川久子、要司村ふく子、美作、橋本榮子の暑中御見舞、ありがたう拜見いたしました(記者)▲なつ子さんに、お尋ねの澤村先生のことは、全くお尋ねの通りの方です、只今は京橋にお住居です(記者)▲こと子さんに、『夜雨集』の外に夜雨氏の著述は、『二十八宿』『花守』『花守日記』がありますす、前二著は殆んど絕版、『花守日記』は本鄕區東片町十番地本鄕書院に在ります、定價金六十五錢、郵稅八錢です(記者)

注意

○ 福岡　みどり

▲三重縣の和子樣及當地のまさ子樣、お二人へ私は同情します、吾が文壇界にかく淺間しい人があるとは實に、情ないですね、私も夢二畫集の交換について、同女(當時の號の小ゆり)にあて端書を發し、同居の市川さんも寫眞を送つたのですが未だに梨のつぶての音沙汰も御座いませぬそれと別に、宮城の武者といふ御方には私の使つて居ました「それから」といふ小說を貸してあげましたところが、受取つたとも何とも御返事を下さらないです、私はかういふ、弊を何とかして除きたいと思ひます。

個人消息

○ 牛込にて　花山院　貴美子

▲宇津井さつき樣　大變お暑くなりました其後は如何でいらつしやいますか？何時ぞや誠に失禮な事ばかり申し上げまして何卒お免し下さいませ、もう近く八幡樣のお祭ですねえ御暇の節にはどうぞ御遊びにいらつしやいませ御待ち申して居りますから……。

○ 紀伊の女

▲紀伊の夕浪樣　もしやあなたは新宮町のお方では御座いませんか もし左樣なれば失禮ですが次號で御實名おあかし下さいませんか。

○ 常陸西茨城郡北山内村　田村紫色

▲木村章子樣　其の後のみけしき如何？此の節は貴女の御作物が見えないので、物足らない感が致されます。筆より鍬の輕きをおゝぼえだつて、そんな事おつしやらずに御書き下さい後生です、埼玉の桂の花樣母校の同窓會は多分八月初旬ですから、お出下さい。此度七月切りで、母校は組合が各町村で、分離するのです、そして校舍はあのまゝで、跡に裁縫學校が出來るとか變ればかはるものですね……ちとお便りを。

○ 深川　矢澤榮子

▲金澤の千草樣　ふつゝかな私に御交りをなんて私どれ程嬉しく存じました事でせうけれども私宅では未知の方との交際は固くいましめられてありますので御返事も致しませんでした以後はどうか誌上で親密に御交際を私かく御願ひ

申します。

○　京都府　竹村まき

▲大阪の稚子様へお答　おやさしいお言葉ありがたうございます、投稿は自宅からの番地で出してゐますが、自身は他所に居りますのですから、折角おたづね下さいましても、殘念ながらお目にかゝることが出來ませんから、番地はおきかせ申上ませぬ何卒惡しからず。

○　青山六　歌奈子

▲青山南六の八重子様　御苗字は何と仰られますか、私も御近所に暮して、志岐様の前は度度通つて居ります、拙筆ながら御交通致し度存じます、誌上で御知らせ下さいませな。

○　福井縣坂井の一隅　Y　H

▲福井の明星様へ　同縣で御なつかしうございますあなたの御和歌に接するたびにどんなにうれしいでせう、私この春まで女學校へ通つてましたの、どなたかせめて御芳名だけでも御もらし下さいましな、誌上にて。

○　室蘭御前水社宅七二七號　安部さわ子

▲眞澄あい子様　貴女まアよく御忘れ下さいませんでしたのね　先日のお葉書に今住所はお知らせする事が出來ない故文壇誌上でおめにかゝるとありましたから喩御境遇もお變り遊ばしたる事でしやう　私も早や姓を變りましたの、御伺ひ致したい事も山々ありますから何卒御手紙下さいませ　私も早速お返し致しますからね。

○　嵯峨野のほとり　富貴子

▲佐々木野菊子様へ　その後何れへお越し遊ばされしやとお案じ申して居ました折柄七月號にてお美はしき御寫眞を拜見いたし再びお目にかゝつた様におなつかしく存じました私は重ね重ねの不運にて只今はお恥かしい様な處に苦勞ばかりいたしてゐます　しかし體軀のみは相變らず大きくて皆様に笑はれます　其内最近撮りましたのを寫眞欄に載せて頂いてお目にかけます。

○　函館　小幽里

▲札幌の幽香里様　御目にかゝつてからもう二ケ月になりますのね、來月は暑中休暇、青葉の北部を今一度と望んで居つたのですけれど空しい望で御座いました、何卒御自愛專一に、さらば。

○　備中淺口郡玉島町　大西千登世

▲呉の隅なる翠星女様に　御美しき繪はがき難有う私御返事致したいのですけれど御所が只呉の隅だけでは分りません何卒くはしく御姓をも御知らせ下さいまし御願ひです。

○　北國の　篠原みゆき

▲同姓の道子様　御なつかしうございます御住所わからなくて御返事出す事も出來ませぬ不束ものですが妹と御思召し末永く御交りを願ひます。

○　諸姉様誌上の御交際を願ひます。

金澤兼六公園廣坂の下一四六　歌の宵女

▲福岡の久子様　嗚呼、懷つかしき久子さま淋しい時悲しい時は公園のさざえ山の麓の茂みの樹立の中に悲しく鳴く小鳥と共に啜り泣きしますのです。

○　浦賀　鈴木かね子

▲小泉くに子様平井三千孝様よ　其後は御無沙汰致しました、どうぞ御ゆるし下さるやう先は誌上にて御わび申上ます。

○　伊豫　罪深き女

▲千葉の高間歌子様　流れて早き月日は病後ウツ〱として居る間に行き〱て、今は青葉なつかしき頃となりました、罪深きわたくしは毎日苦しい良心の苛責の爲め千葉の空を仰いで泣いて居ります、さりとて今となつては御手紙を出す様な勇氣はありませぬ、でも御許し下さらば早速御詫書さし上げます。

○　安藝國熊野にて　宮垣はつ代

▲安田しげ子様　大阪の皆様へ、私の友に安田繁子様といふのがあります　昨年大阪へ御家族行かれて御住所が不明ですが皆様の中で御存じなれば御聞せ下さいまし備後三原の人で年は二十歳位の美しい人です。

○　鹿兒島市上龍尾町七〇　板崎島

▲大分のいせ子様て誰れ？　私には一向思ひ出せませんのよ　然し友の一人が申しました一高女三年の時大阪に御出遊ばしたとかけど御別れしてから四年にも成りますもの御名前を思ひ出せません　何卒お教へ下さいそして御交際を願ひます　鹿兒島の誌友の方々御遊びに御越し遊ばせよ。

雜報

△跡見花溪女史は 多年女子敎育に盡したる功勞により、勳六等に敍し 寶冠章を授けられた、女子の名譽や大なり。

△矢島揖子刀自會長たる 基督敎婦人矯風會では七月十日より三日間大會を開いた。

△米國の一婦人飛行家は空中一千尺の處より墜落し、海中に陷つて失命した。

△七月十五日 富士の山開きがあつた、登山家の爲にはいろ〳〵の便宜がある。

△米價騰貴の爲め 生活難の聲が高い、けれども新聞で見るやうに 實地の世間は困つて居るやうに見えない。

△本年は 梅雨期に雨少く、七月に入つて暑氣なか〳〵に強い、東京では中旬に 九十度に上つた

△今年の夏衣は 白地よりも、稍々黑つぽいものが流行してゐる。

△女が蔣羽織を着るやうになつた。

△市中で車道を歩くと 罰せられることになつた

△新大橋が開通した。

△音樂の講習 神田錦町三丁目日本音樂協會では八月一日より三週間 第十回音樂夏期講習會を開く、講習時間は 午前の中、講習料は一科目に就いて金一圓五十錢、申込は七月末日まで。

誌友の消息

△長曾我部菊子は 七月中旬東京を出發して郷里阿波に歸省した。

△高橋栁子は 郷里酒田に赴いた。

△今井(元の山田)邦枝子は健康漸く恢復、目下女子文壇叢書第二篇に自作の日記と 和歌を編輯中である。

△松莊紫花は 今春愛兒を喪つた。

△吉田夕草は 別府溫泉に遊んだ。

△細谷鏡子は 病床に在り。

△鈴木春子は 某溫泉に療養中。

△前島優梨子は 結婚した。

△北海道札幌の保野幽香里さんよりリリー 花を本社に送つて下さつた、ありがたう。

十・月・特・別・號・發・表

特種原稿大募集

▲令孃の告白 いつもの通り處女時代の皆さん方に或は得意或は失意其境遇に應じて僞らざる告白をお書き下さい

▲若き夫人の述懷 地方と都會を問はず新家庭の生活の描寫を其若きマダムに書いて頂きたい、述懷として置きましたが述懷に限らず單に描寫でも宜しい

(右二項) 懸賞 一等 金拾圓 二等 金七圓 三等 金五圓 五等 金一圓 四等 金二圓 (一等は正金其他は物品)

原稿の端に『特種原稿』と朱書すること、一行二十四字詰二百行以內、凡て振がなつき

◎・愛・讀・書・目・十・種・ 平素愛讀する書物十種の題名を擧げること、其著者の名も記入すべし(一等金三圓以下數名に贈賞す)

◎・無・名・婦・人・傳・ 原稿は凡て振がなつき長短は問はず (一等金七圓 二等金三圓 三等金一圓(物品)

◎・紀・行・文 今年新しく旅行されたる記行文を望む長短隨意振がなつき(發表と同時に正金にて聊か報酬を呈す)

▼右の外例號募集の小說詩歌俳散文評論初作等は規定例の通り入賞者多數振つて投稿あれ▲

俚・謠・

皆さんの地方に殘つてゐる盆踊歌流行子守歌田植歌其他の俚謠の投稿を乞ふ揭載したる上は本誌一部を呈上す

原稿締切 八月二十日

八月

大都會の幾萬の家の屋根瓦も、大平原の草も、海も、山も、夏は直射する太陽の熱の爲に、炎の息を吐いております。夏は暑いほど氣持が好い壯快の感が起ります、海にも入り、山にも登り旅行の出來る人は一年の旅行期です、身體の健康を試すには夏が長もよろしい、避暑などゝいふことは弱い人の言ひぐさで、暑は避けるに及びません、涼しい地を選んで旅行するのなら暑を避けるといふだけの意味ではないのです、夏の活動です、不斷の活動と異つた活動をするだけのことで、人間は一日でも活動を廢して、遊惰に陷り怠慢に流れてはだめです、殊に夏は活動する時です、天然に接近するとか、新しい講習をやるとか、兎に角心持をかへて活動するのが何よりも宜い夏を過す方法でせう。

地方の人達でも、夏は活動します、水を灌ぐ農夫、草を引く少女、農村の活動は夏のめざましい仕事です、夕立や、雷鳴や、嵐や、氣候も亦夏は外の時よりも活氣があつて、烈しく動くやうです。

日曜	四日	十一日	十八日	廿五日

▲注意　本誌は本年度より從來の增刊を廢し、年四回（一月、四月、七月、十月）定期號を特別三百頁の大冊として發行することになりました　なほ左の定價表を詳しく御覽下さい

○本誌投稿及び懸賞規定

▲投稿は凡て女子に限る　▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること　▲原稿は凡て女士文壇社宛（未納税は斷じて受付ず）に送ること、▲小說と詩は振假名をつけること　▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は三十行乃至五十行、初作は三十行以內　▲各種類毎に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす、▲詩友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る　▲別に本欄の原稿を募る長さは二十四字詰二百行內外とし總振假名をつけること　▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◎投稿は毎月十五日到着を以て嚴に締切る

▲小說と散文は　▲天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す　▲『詩』は天賞金貳圓地賞金七拾錢、人賞金四拾錢　▲『和歌』『俳句』圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す　▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す（但し短きものは此限りにあらず）　▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす　定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す

明治四十五年七月二十五日印刷納本
明治四十五年八月一日第八年第八號發行

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本魁
印刷所　東京國文社

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　女子文壇社
電話京橋六〇七番
振替東京壹七〇九番

特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂、東海堂、良明堂、大阪盛文館外

第八年第八號（八月一日發行）
女子文壇
明治四十五年七月廿五日印刷納本
（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）

女子文壇普通號 定價金拾五錢 郵稅壹錢五厘